
Real World～本当の僕ら～

新橋うみ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Real World（本当の僕ら）

【Nコード】

N7763T

【作者名】

新橋うみ

【あらすじ】

もしも、この先の未来で、実際に”体感”できるオンラインゲームが普及したとするなら――。

この物語は、そんな「オンラインゲーム」――『ワールド』と、「リアル」の狭間で揺れる、少年少女たちの葛藤のお話。

【松原龍介編】（Log. 1～Log. 6）

「なんでリュウ君は、この『世界』をプレイしているの？」

【亀田麻子編】（Log. 7～Log. 12）

「そんなに、一人になりてえのかよ。だったら、一生一人でいれば

いいよ」

「藤川由梨編」（Log. 13～Log. 17）

”生きている”って感じが、したんです」

「松原龍介編」（Log. 18）

「本当に、俺たちは、今まで何してたんだろうな……」

※Log. 17から、不快な表現・残酷描写・暴力表現が少し出てきます。ご覧の際は、ご注意下さいませ※

プロローグ

『題名…面白そうな依頼、発見っ！』

送信者…亀田 麻子

内容…

『依頼・大物モンスターを討伐せよ』

ダンジョン「天空に浮かぶ孤高の高原」にて、巨大なモンスターが出現した！

詳細は不明。その厳ついモンスターの目撃情報が、多発している。一般PCへの被害も、あるようでないような状態だ。

どうか、キミたちの力で討伐してほしい！ 頼んだぞ！

カテゴリー・討伐依頼

報酬・受付所にて』

ねえねえ。こんな依頼見つけたんだけど、面白そうじゃない？

いつもみたいになさ、あたしと松原君と由梨、三人でパーティ組んで行こうよ！

実は今日、夜からギルドの集会があるんだけど、それまで時間が有り余ってて暇なんだー。

今から『ワールド』って、例の掲示板の前で待ってるから。

早く来てね！ じゃあ！』

「……て、なんだよそれ」

目の前のパソコン画面に表示された新着メールに、俺は苦笑した。送信者が亀田と知った時点で、誘いのメールだろうな、ということとは想像ついていたけれど。

——やれやれ。首を振りながら背もたれに身体を預けると、椅子

がきいと鳴った。

ふと窓の外を見れば、オレンジ色に輝く太陽が山の向こうへ隠れようとしていた。

俺はデスク上のパソコンの横に置いてある、『ワールド』専用ヘッドホンへと手を伸ばした。

音楽専用のヘッドホンとは違って一回り小さいそいつは、一年経った今でも黒い光沢を放っている。耳に当てるスピーカーは付いてなくて、その部分は耳にかけられるような輪っか状になっている。

ちょうど頭の天辺に当たる上部には、小さな四角い箱型のものが取り付けられている。最先端の小型コンピュータだ。こいつが、プレイヤーの身体をすぐさま睡眠状態にし、更にその意識を全てオンラインゲームへと飛ばしてくれるのだから驚きだ。

さっそくそのヘッドホンを頭に装着した時、机に置いてあったスマホが光り出した。通話だ。

送信者は――『藤川 由梨』。

少しだけ跳ねた心臓を押さえながら、慌ててスマホに手を伸ばした。

「も、もしもし？」

『もしもし？ 龍介君？』

ねえ、麻子ちゃんからのメール、見た？』

あどけなさが残る甘い声。

間違いなく、クラスメイトの藤川からだった。

「あ、ああ、見たよ。討伐依頼の御誘いメールだろ？」

『うんそれ！ 龍介君、行くよね？』

「まあ……断る理由もないしな」また苦笑が漏れた。

『本当？ 実はね、私、家の用事でちょっと遅れるかもしれない。もし早めに龍介君があつちに着いたら、麻子ちゃんに伝えてくれないかな？ 遅れるかもって』

ああ、分かったと返事したら、ありがとう、それじゃあねと言った後に通話が切れた。

未だに耳の中に残る藤川の声を胸に仕舞うように大きく深呼吸し、スマホを机の上に置いた。

「……さて、と」

背もたれから身体を浮かし、パソコン画面を凝視する。

画面には、世界で有名なオンラインネットゲームのWEBサイトが表示されている。

俺は頭の中で念じるようにマウスを動かし、一番右端にある大きなボタン、『ログイン』へとポイントを合わせる。

クリックする前に、俺は机の上で腕を組んでその中に頭を沈めた。いつも『ここ』ヘインするときの格好だ。

次に目を閉じながら、頭の中でログインのボタンをクリックするように、念じた。

意識だけがぐいと引っ張られるような感覚。ふいに背後から驚かせられた衝撃に似ている。

そして、まるで万華鏡を覗いているかのような、様々な模様や色が駆け巡る映像が否応なく展開される。

しばらくすると視界は真っ白に塗りつぶされた。その真ん中に、小さな穴が空いたような黒い点が出来る。

俺は迷いなく、そこへ向かって手を伸ばす。

実際に伸ばすのではなくて、そんな「イメージ」で。

徐々にその穴が広がっていく。

黒い点が楕円形になり、やがて両手を広げた程度の大きさになった。

中ではどこかの街並みが見えている。いつも見慣れている風景。俺はゆっくりと、その中へ一步を踏み出した。

※

急速に開いていく視界の中で最初に飛び込んだのが、煉瓦で埋め尽くされた地面。そこに映る、銀の甲冑を纏った自分の足。

一步動かしてみる。かちやりと音がした。足の裏からは確かに、地を踏む感覚が伝わってくる。

次に両手を見た。ゆっくりと握ったり開いたりして、その感触を確かめる。

試しに深呼吸を一つ。肺から空気が抜けていくのも、きちんと把握できた。

確かに俺は今、『ここ』にいるんだ、と思った。

オンラインネットゲーム、『Real World in Online』に。

Log 1 ダンジョン↓天空に浮かぶ孤高の高原

辺りを見渡せば、そこはどう見たって立派な草原だった。

空には、突き抜けるような真っ青な空。その真ん中には、肌を焼けつくさんとばかりに輝くまん丸な太陽。

強烈なその光の恵みを、大地に広がる一面の緑の草たちが受け止めていた。風が吹くと、さわりと音を立てる。

俺は手を翳しながら太陽を見上げた。すると頬から一滴の汗が流れた。思わず眩く。

「……あつ……」

「て、ちよつと何してんの、リュウ！」

ハッと我に返り、声のした方へ顔を向けた瞬間、頭のとっぺんに強い衝撃が走った。

「つてえ！ お、おい、いきなり何すんだよアサ！」

俺は慌てて頭を抱え、げんこつを繰り出してきた隣の人物から一歩距離を取った。

その人物――アサは、ふん、と大きく鼻を鳴らした。頭の両側にくくりつけられたツインテールが、ぴよんと跳ねる。

「なんか別のこと、考えてたでしょ！」

今は、あのモンスターをなんとかすることだけ考えてよ！」

「ちよ……だからって殴ることないだろ！ マジで痛いんだぞ！」

「んなこと知ってるってば！ あたしも殴った手が痛いんだからさあ！」

頭を押さえながら主張する俺に、手をブラブラ振りながら反論するアサ。一緒に、その振袖も揺れる。

アサが身にまとっている花柄の浴衣は、本人お気に入りのデザインらしい。赤が基調になっているその花柄浴衣を、俺は睨みつけた。

にしても、たかがゲーム世界だつてのに、こういう”痛み”もリアルに体感する必要などあるのか？

と、こういう時に限って思ってみたりする。

「……ねえねえ」

俺たちの間から、別の声が飛んできた。同時にそちらを見た。その声の主は、えへへ、と微笑みながら言った。

「なんなら私も叩いてよ、アサちゃん」

「ちよっ！ 何言ってるのよ、リリィ！」

次の瞬間、アサは反射的にか、ぽこんとリリィの頭をげんこつで叩いていた。

叩かれたプレイヤーが——リリィが頭部をさすりながら、無邪気に笑った。

栗色の長い髪が、さらりと揺れる。

そして、

「ホントだ、痛いね！」

と、元気よく言った。面喰ったように、口をぽかんと開けるアサ。その様子がなんだか可笑しくて、俺は思わず吹きだした。リリィも同じように、くすくすと笑った。

殴った本人は、少し罰が悪そうに目を伏せつつも、「もう、から

かわないで！」と頬を膨らませながら明後日の方角へ顔をそらした。そんな俺たちのやり取りを笑うように、頭上に広がっていた葉っぱたちがざわりと音を立てた。

一面に緑の受け皿が広がるこのダンジョンに存在する唯一の障害物といえば、俺たちの側にあるこの巨大な樹だけだ。

そいつはこの高原の中央で、まるでここの主であると主張しているように堂々と立っていた。

幹の直径は一メートルを軽く超え、高さは十五メートルほどか。精一杯上へと首を巡らしても、その天辺は見えなかった。

俺たちは今、この巨大な樹に身を寄せている。

およそ十メートル先に、今回の討伐依頼の目標であるモンスターがウロウロと徘徊していて、そいつから身を隠す為だった。

「……まあ、とにかくアレをどうするか考えなきゃな」

頭を戦闘モードに切り替え、樹の陰から改めて標的を伺う。

モンスターの高さは、恐らくこの樹の半分ほどだろう。人型の姿をしたそいつは、がっちりとした美しい肉体に仕立てられている。先ほどからひっきりなしに頭を左右に振り、鋭く光る目をあちこちと忙しなく往復させていた。

片手には、そいつの身体と同じ大きさのごつい金棒。そこにびっしりと生える大きな針がぎらぎらと光っている。全くもって目に痛い。

モンスターが太くて短い脚を一步一步動かす度、どすんという地響きが鳴る。その振動が地面を伝って足の裏に伝わってきた。

「まさに、”依頼文”にあった『巨大なモンスター』って感じだよ

ね」

俺と同じように、樹の陰から標的を伺っていたリリイがぼそりと言った。

——それと、中身もな。心の中で付け加えた。

先ほど特定のアイテムを使ってそいつのレベルを調べたら、なんと八十もあったのだ。

ちなみにこちらのレベルは、俺が五十二。アサが四十。リリイが十二。

ということは、だ。

あいつとは少なくとも、二十八ものレベル差があることになる。

「そんだけレベルが離れてると、どうも強行突破しづらいな……」

ふと呟くと、隣にいたリリイがポンと手を叩いた。

「でも、私たちのレベル全員足したら、百十四もあるよ!」

「いや、リリイ。その足し算なんの意味もないからね?」アサが即突っ込んだ。

とにかく、どうするか。

少しずつダメージを与えながら回避しまくる戦法も考えた。だが、このダンジョン構図がそれを許さないだろう。なんせ身を隠せるものなんてこの樹しかないから、死角が少なすぎる。

……いや、ここは。

今までの思考を振り払うように、俺は頭を振った。

ここは——

「ここはもういつそ、あたしらお決まりの戦法で行くしかないんじゃない？」

アサが、持ち前の武器——弓矢を構えながら言った。「その方が、やりやすいと思うし」

「うん、そうだね！」

リリイも、いつの間にか愛用の長い杖を手にしながらにこりと微笑んだ。「私、なるべく頑張ってサポートするよ」

「……そうだな」

こくり、と俺は頷いた。

改めてモンスターを伺う。こちらに背を向けていた。今なら、不意をつく絶好のチャンスだろう。

よし、と俺は手を打った。

「そうと決まれば、いっちゃやるか」

「うん、頑張ろうね！」リリイが少し緊張気味に、ガッツポーズをした。

「こっちはいつでも準備完了！」アサが親指を立てた。

俺は二人に目配せをした後、頭の中で自分の愛用武器を握り締めるイメージを描いた。すると右手が光り出す。すぐさま力を込めた。自分の武器——剣が出現した。

このゲーム、『ワールド』では、持っているアイテムなどをイメージすれば出現してくる仕組みとなっているから、便利だ。

俺は剣の柄をしっかりと右手で握りしめて一薙ぎし、その感覚を確かめる。

……よし。

「——行くぜっ！」

俺が叫んだのを合図に、三人一斉に樹から飛び出し、標的目掛けて走り出した。

相手モンスターの背中が、ぐんぐん迫ってくる。

※

半分ほど距離を縮めた時だった。

巨大モンスターはびっくりと反応し、くるりとこちらへ身体を向けてきた。その険しく鋭い視線が、俺たちを突き刺す。

こちらにも負けじと睨みつけながら、モンスターとの距離を詰めていく。左手には、俺と同じ速度で駆けるアサ。

背後で強い光が発せられた。リリィが俺たちへ掛ける補助魔法を詠唱し始めるのが聞こえた。

「リュウ、来るよっ」

相手まであと数メートルといった地点。

巨大モンスターは突如呻きながら、金棒を大きく振り上げてきた。それが地面に激突する前に、俺は右側へ、アサは左側へと飛びのく。

——ずうん。

金棒が、地面に思い切りめり込んだ。重い振動が胃にずっしりと響いてくる。辺りに砂埃が舞う。思わずよろけた。

そいつは、金棒を両手で握りしめて固まったまま俺の方を睨みつけてきた。

「はあああっっ」

すかさずそいつの足元へと急接近。剣を横薙ぎした。

『1hit』の文字。その上に『106』と控えめな数字が、目の前に小さく表示される。

俺はすぐに頭の中で、相手のHP状況を知らせるウィンドウを表示させるよう念じる。

視界の左上隅に小さなウィンドウが現れた。

HPの欄には、「99894／100000」。

十万のうちの、マイナス百六。ちっ、と舌打ちした。全然効いていない。

取りあえず、モンスターから距離を取ろうと足を踏み出した瞬間。巨大モンスターが、上空に向かって大きく吠えた。

同時に、金棒を勢いよく地面から引っこ抜いた。ヤバイ。とっさに危険を感じた。瞬時に後ろへ飛びのく。

モンスターは金棒を大きく横振りした。ひゅん。空気を切り裂く音が耳元で鳴った。強い風圧に吹き飛ばされそうになるが、なんとか踏ん張った。

「これでも喰らえええええ！」

モンスターを挟んだ向かい側から、アサの怒声が聞こえてきた。瞬間、モンスターがピクリと動きを止めた。急いで相手ステータスを確認する。

状態異常の欄で、髑髏の形をしたアイコンが小さく光っている。

『毒』——一定時間、体力が自動的に削られていくステータス異常。

「やった！ 見た、見た！？ 一発で成功したでしょ！」

「油断するなって！　まだ来る！」

忠告すると、モンスターはまたもや上空へ向かって大きく吠えた。今度は金棒をめいっばい上空に掲げる。

モンスターを中心に、半径一メートルの地面が緑色に光りだす。

……しまった！

そう思った時には既に遅かった。一瞬にして視界は大きく回転。ふわりと身体が浮く感覚。思わず目をつぶる。遠くでリリーの叫ぶ声が聞こえた。

しばらくしてからどすんと背中から大きな痛みを感じて、呻いた。

一呼吸置いてからゆっくりと目を開けた。一面の青があった。あの突き抜けるような空が、眼前に広がっている。

強く鼻を突く土と草の匂いに顔をしかめながら、俺は頭の中で感じた。瞬時に視界の下に二つのウィンドウが現れる。そこに表示されている自分のHPとアサのHPが、赤色に点滅していた。くそつ、と心の中で毒づいた。やっぱ結構喰らってたか。

この『世界』のプレイヤーの体力は、相手から受けた痛みの大きさによって減り具合が変わってくる。

例えば目も開けられないような激痛を感じてしまったら、そのまま視界はブラックアウト。

つまり、『ゲームオーバー』だ。

「――ってえ」

上半身を起こし、ずきずき痛む背中をさすった。

見ると、モンスターはここから五メートルほど先で、一人金棒を

振りまわしながらどすどすと足音を立てていた。

「……………。初っ端からきついのは、やめてよねえ」

近くで声が聞こえた。隣で同じように倒れ込んでいるアサを見つけた。

「大丈夫か」と声をかけると、「まあ、なんとかダイジョーブ」とアサは少しだけ顔を引きつらせながら笑った。ほっとして胸をなでおろした。

——あれ。そういやリリイは。

その姿を探そうと左右に視線を走らせた時だった。一瞬にして、身体が柔らかい光に包まれる。

思わず目を細めながらも、表示させていた俺とアサのHPを確認する。一気に満タンになっていた。それと同時に背中の痛みも引いていく。

「リュウくん、アサちゃん。大丈夫？」

背後から声がしたので振り向くと、いつの間にかリリイが側にいた。杖を掲げていた両手を下しながら、心配そうに俺たちを覗き込んでいる。

俺はリリイに笑いかけた。

「サンキュ、リリイ」

リリイが優しく微笑みながら、両手を差し出してきた。その片方ずつに、俺とアサは捕まって立ち上がる。

アサも「サンキュー」と笑った。

「よし。リリイは危ないから、ギリギリまで下がってて」

「うん。無理しないでね」

リリイはこくと頷き、後方へ向かって走っていった。
地面を見渡す。自分の剣が近くで転がっていた。俺はそれを拾い、
しっかりと握りしめた。

すると横から、不機嫌な声が飛んできた。

「ねえちよつと。どーするよ、これ。普通に考えれば、無理ゲーじゃない？」

アサも、改めて弓矢を装備し直していた。唇を小さく尖らせ、頬をむっつりと膨らませながら。

俺は遠くで一人暴れるモンスターを見ながら、小さくため息をついた。

「確かに、こんだけレベル差があって、あれだけしか攻撃が効かないとなれば、無理ゲーだろうな」

ぐうう、とアサが悔しそうに呻いた。

——でも。

俺は、ぎゅ、と剣の柄を握り締めた。

「でも、やるしかない。

アサは、あの調子でどんどん状態異常仕掛けてって。俺が、あいつの注意をひきつけるから」

しばらく俺を見遣ってから、アサは、にかり、と笑った。

「……うん、分かった。

ま、出来うる限りやっちゃいましょうか」

アサは、ぐっ、と勢いよくガッツポーズを作った後に、その左手を真っ直ぐに天に伸ばした。掌から小さな光が放たれ、新たな矢が生まれる。アサはがちりとそれを掴んだ。

俺も剣を大きく一薙ぎしながら、後方に向かって叫んだ。

「リリィ！とにかく、絶えず回復と補助魔法を頼んだぞ！」

「うん、分かった！」

威勢のいい返事と共に、強い光が発せられた。

俺はもう一度、標的を睨みつける。

毒を食らっているという様子も見せずに、そいつは相変わらず、ドシドシと足踏みをしている。

——待ってろ。

そんなに退屈なら、相手にしてやるよ。

「いくぞっ」

「オーケー！」

合図とともに、俺とアサは、同時に駆けだしていった。

Log 2 タウン↓冒険者が集う入り口の街

「えええ!？」

あんだだけ頑張って、報酬、こんだけえ!？」

アサの叫び声が辺りに響き渡り、近くにいた俺は慌てて耳を塞いだ。

すぐ隣にいたりリイも、同じ動きをする。

けれど、目の前にいる案内役の女性はひるまなかった。
にこりと微笑んだまま、彼女は言う。

「はい。報酬は以上となります」

「はああっ!？」

手にした『回復アイテムセット』を睨みつけながら、アサがまた、大きな声を上げた。

辺りの煉瓦造りの建物に、それはまた、反射していく。

※

ここ——『冒険者が集う入り口の街』は、通称「入り口の街」として知られている。

ログインしたプレイヤーが、最初に必ず訪れる街になっているからだ。

まるで外国を思わせるような——そう、例えばロンドンのような——煉瓦の街並みを見上げれば、隙間なく肩を並べた二階建ての建物たちがずらりと並んでいる。

ショップや武器屋などの様々な店も交じっている。まるで、俺たちプレイヤーを取り囲もうとしているかのように。

そんな街並みを、オレンジ色に輝く太陽が、優しく照らしていた。その太陽の色合いは、いつの時間にログインしても変わることはない。この『ワールド』には、時間の概念というものが存在していないからだ。

そんな入り口の街の中心部には、大きく拓けた場所がある。

広場として有名なその場所のど真ん中には、長さ・高さとも先ほど俺たちが戦っていたモンスター並みの大きさの、電光掲示板がある。

そこで、プレイヤーたちは依頼を確認したり、ギルドの状況を確認したり、公式からの情報をチェックしたり出来る。

そんな掲示板の前にあるテントが、「総合受付所」だ。

ここで、全ての依頼の受付や、ギルド入隊申請、ゲームを辞める際の手続きまで、全て案内役の人がやってくれる。

そして今、俺たちはそこで、二時間程かけてようやくクリアした『巨大モンスター討伐依頼』の終了申請に来た、というわけだが。

「と、とりあえず落ち着け、アサ」

肩を怒らせながら呼吸が荒いアサの肩に、ぽん、と手を置くと、恐ろしい速度でこちらへ振り向いた。鬼のような形相で睨みつけられ、俺はたじろいだ。

「だって、リュウだっておかしいと思わない!？」

よりによって回復アイテムよ! レアアイテムなら分かるけど、なんでこうなるわけ!？」

「いや、俺にだって分かんないけど――」

「ねえお姉さん、これどーいうこと!」

受付のお姉さんに向かって、アサがまたもや吠える。

だが、お姉さんは既に別のプレイヤーの相手をしていた。

まるで、隣で吠えるワンちゃんにも目もくれずにテキパキと仕事

をこなすお姉さん。さすが、世界規模のゲーム会社の社員は違うな、
と思った。

くう、と悔しそうに呻くアサの横で、傍観していたリリイが、あ
あ、と何か納得したような声を出して言った。

「きっと、あれかな。ゲーム製作者さんの労い」

は？　と言いたそうな表情で、リリイを見つめるアサ。

リリイは、にこりと微笑んだまま、ぽんと手を叩いた。

「お疲れ様！　これでゆっくり体力回復して休んでってね！
……ていう」

俺たち三人の間に流れる、数秒の沈黙。

後に、アサが頭を抱えて「ぐあああ」と地面に倒れ込んでしまっ
た。

あれ？　と首をかしげるリリイに、俺は頭を掻きながら、こっそ
り教えてあげた。

「タウンに戻れば、プレイヤーのHPや異常状態は自動回復するん
だよ、リリイ」

「……あ、そうだっけ」

「『そうだっけ』、じゃないのよおお！

あんた、これでプレイすんの何回目だっつーの！」

アサが地面をゴツゴツと拳で叩きながら、叫ぶ。

リリイが、しばらく考え込むように空を見上げた後に、ぱあっと
花を咲かせたような笑顔で、

「きっと五回目くらいじゃないかな？」

と、あっさり答えた。

アサはがつくりと肩を落とし、またもや地面に倒れた。

俺はそのアサのリアクションに、またもや「くっ」と吹きだした。次第に腹を抱えて笑い声を立てた俺の横で、同調するかのようリリイもくすくすと笑いだした。

しばらく頬を膨らませてこちらを睨みつけていたアサも、観念したかのように苦笑し、やがて笑いの輪に加わった。

三人分の笑い声が、夕暮れに染まる煉瓦の街に響き渡ったかのようには思えた。

※

びこん。

アサの方角から、軽い電子音が聞こえてきた。メールの着信音。同時にアサが、「うわっ」と叫びながら立ち上がった。

「いつけない……！ ギルドメンバーからだ！

ギルドの集会に遅れちゃう！」

「？ ギルド？」

あわあわと慌てだすアサ。その様子を見たリリイが、またもや首を傾げた。

俺は、またもやこっそりと教えてやる。

「ギルドってのは、まあ……。『集団』、て感じかな。

同じような目的を持った奴らが一つの集団を作って、そこでいろいろ交流したりするんだ」

ふーん、と頷くリリイ。俺は、アサに問いかけた。

「そういや、アサってギルドに入ってたんだな」

「入ってるよ、当たり前じゃん！ オンラインゲームの基本でしよ
う？」

「何のギルド？」

胸を逸らしながら、へへん、とアサが答えた。

「ギルド、『ラヴあんどピース』よ。」

ただ単に、雑談目的な仲間が集まって、お喋りするギルド。

結構人気のあるところで、ギルド加入数はランキング百位以内に入る程なんだから！　すごいでしょ！」

へえ、と俺は呟いた。そういう平和目的のギルドは、あまり聞いたことがない。

結構、モンスター退治や難しい討伐依頼をこなすためのギルドが多いような印象があったが、そういう穏やかなギルドもあるもんだな、と一人感心する。

「……てか、リュウは入ってないの？」

目を丸くしながら問いかけてくるアサに、俺は肩をすくめた。

「入ってない。面倒臭いし」

「ちよ……なにそれ。」

『面倒臭い』という理由、一番損してるよ」

びしっと人差し指を向けながら言い放ったアサに、俺は苦笑した。

「まあ、面白そうとは思うけどさ……。なんか乗る気になれなくてか、早く行かなきゃいけないんじゃないか？」

「あ、そうだった！」

アサは、くると俺たちに背を向けた。そして、手を振りながら言った。

「じゃね。また依頼やる時は、いつでも誘ってくれていいからさっそう言い残すと、ワープ装置のある方角へ向かって、アサは走っていった。」

全てのプレイヤーが通過するワープ広場は、ここから西の方角にある。

長い橋で隔離されているそのワープ装置から、プレイヤーは各ダンジョンやタウンに移動できる仕組みだ。

俺は、走り去っていく小さな浴衣姿の弓矢使いを見送る。それは数秒もしないうちに、混雑するプレイヤーの波に飲まれ、忽然と消えてしまった。

はあ、とため息を吐き出しながら腰に手をあてたら、苦笑も漏れた。

「とか言って、いつもアサの方から突っ込んでくるんじゃないか」
「でも、なんだかすっごく輝いてるよね。アサちゃん」

隣でリリイが、ふわりとほほ笑んだ。

「……だよな。」

アサのやつ、リアルでもああいう風に振る舞えばいいのに……」
そう呟いてから、俺はリリイへ顔を向けた。

「んで、そろそろこのゲームには慣れたか？」

「うん。リュウ君や、アサちゃんのおかげで」

大きな笑顔で頷いた。さらりと揺れた髪が、俺の腕にかかる。

こそばゆい感触に、俺の心臓がどきっと跳ね上がる。照れ隠しのように、あはは、と笑った。

——そういや、こんなふうのリリイと二人っきりなもの、久しぶりなのかもしれない。

何故かいっつも、アサが乱入してきたから。

そう意識しだすと、何を話せばいいのか分からなくなる。

頭を掻きながら、地面の煉瓦を見つめる。

その境目を意味もなく目で追っていたら、いつしかぐるぐると頭の中が回りだした。

……ヤバい。俺、めっちゃ動揺してるじゃないか。

しばらくして、隣から大きく息を吸い込む音が、聞こえた。

「――すごいよね」

と、小さく呟くりリイ。

俺は咄嗟に顔を上げた。

「……え？」

「あ、いや」リリイがハッと気付いた様子で、躊躇いがちにはにかんだ。「ホントにこのゲーム、すごいよなあ……って」

「え、うん……。まあ、すごいよな」俺は、頷いておく。

「だってさ、この空気をちゃんと感じることも出来るし、ちゃんとここに立ってるんだ！ て感じもするし。

凄い、よねえ」

「ああ……。ホント、最先端の技術、だよな」

俺はそう呟き、あの巨大モンスターと戦う前の時みたいに、自分の手を握ったり開いたりしてみた。

オンラインネットゲーム、「Real World in Online」――通称、『ワールド』。

専用のヘッドホン上部に設置された小型コンピュータが、脳内の電気信号を残らず把握してその意味を分析し、それら全てを行動に反映させてくれている。

それは視覚・聴覚だけではなく、味覚・触角・嗅覚の五感、全てに及ぶ。

そのおかげで、俺たちプレイヤーは、本当にその世界にいるような感覚を、味わうことが出来ているんだ。

その間、現実の身体は眠りに近い状態となっている。

だから、意識は丸ごと、『ワールド』へと投げ飛ばされるのだ。

そんなことを思いながら、ふと静かになったリリイを見た。
その顔から、笑顔が消えていた。何故か、悲しそうに目を伏せている。

思わぬ事態に、俺は戸惑った。

どうしたんだろう。

何か俺、変なこと言ったか……？

やがて、その哀愁を帯びたような瞳は、俺を捕えてきた。

驚く表情のまま固まる俺の姿を映し出すその瞳は、少しだけ濡れているように見えた。

心臓が、どくつと跳ねた。

「……ねえ、リュウ君」

その問いかけるピンク色の唇が、ゆっくりと動き出す。

「なんでリュウ君は、この『世界』をプレイしているの？」

「——え？」

思わぬ質問に、息が詰まった。

リリイの悲しげな視線は、真っ直ぐに俺を貫いていて、まさに真剣そのものだった。

そんな視線からわずかに目を逸らし、俺はどくどくと唸り始めた心臓を抑え込みながら、考えた。

なんで、俺はこの『世界』を、プレイしているのか……？

なんで――

「――ううん、ごめん。やっぱり何でもない」

リリイが頭を振りながら、明るい声で言った。

この場に張り詰めた緊張がほぐれた気がした。俺は拍子抜けしたかのように肩の力を抜かしてしまう。

見れば、リリイの瞳は、いつものような明るい色に戻っていた。

そして、えへへ、とはにかみながら言った。

「ごめんね、なんか変な質問しちゃったね。」

あ、私、そろそろログアウトしないと。夕飯の支度、手伝わなきゃ」

その言葉でふと気づき、俺は頭の中で、リアルタイムのデジタル時計を確認した。

> P M . 1 9 .. 3 1 <。

いけない。俺は頭を掻いた。

「時間のこと、すっかり忘れてた。……そろそろヤバいかもな」

「夢中になっちゃうと、つい忘れちゃうよね」

ふふ、とほほ笑むリリイ。そこにはいつものように、可憐な花を漂わせている。

俺は気が緩むのと同時に、頬も緩むのを感じた。

俺たちプレイヤーには、『ワールド』に居られる限度時間が設けられていた。

――四時間。

身体と脳の影響を考えられた、プレイ最長時間が、その数字だ。ちなみに残り数分程前になれば、警告音が鳴りだし、強制ログア

ウトの時間が迫っていることを、知らせてくれる仕組みになっている。

「それじゃあ、また明日。」

学校で会おうね、リュウ君」

「あ、ああ。また」

笑顔で手を振ったお花畑の魔導師は、アサと同じように、ワープ装置に向かって走っていく。

俺は、いつまでも馬鹿みたいに手を振り返して、その姿を見送った。

小さなスカートをひらりと揺らしながら駆けていくその背中は、すぐに多くのプレイヤーに紛れ、溶け込んでいってしまった。

Log 3 いつもの、お約束パターン

今や、全世界的に有名となったVRMMO、『Real World in Online』。

世界の人口の約一割はこのゲームをプレイしていると噂されるほどであり、その名を知らない者は、ほぼいない。

発祥はここ、日本。

この地で発売された三年前に、爆発的に売れたそれは、瞬く間に世界中へ広がっていった。

社会問題にも発展するほどの勢いで、世論では身体の影響やらなんやら問題視する声が上がったけれど、今ではそれも落ち着いている。

その世界——『ワールド』で、プレイヤーたちは思い思いに、与えられた世界を旅することが出来る。

依頼という、所謂クエストをこなして報酬を手に入れて楽しんだり、単純にモンスター狩りしてレベル上げをしたり、オンラインで知り合ったプレイヤーと雑談したり。

オンラインゲームには、もちろん全体を通してのクリア条件、つまりエンディングなんて存在しない。

だから、それぞれのプレイヤーは各々自由に行動しているわけであって——

手元にある電子ペンシルをくるくると回しながら、俺は机の上に置かれた電子パッドの画面を見つめた。

そこには長ったらしい英文がつつらと書き連ねられてあって、それを意味もなく目で追っていく。

俺の全意識は、昨日のリリイが放った言葉に向けられていた。

”なんでリュウ君は、この『世界』をプレイしているの？”

「……そりゃ、ファンタジーの世界に身を置いて楽しい、とか。

剣振りまわしてモンスター倒せて爽快だ、とか」

俺が考え付く限り、そんな単純なことしか浮かんでこない。

そもそも、そんなこと深く考えたことなんてない。

まあ、ゲームなんて、プレイヤーに単純に楽しんでもらうために、存在しているようなもんだし。

でもきつと、リリイにとっては、そんな単純なものではないのかもしれない、と思った。

なにかこう、『ワールド』に思い入れがある、みたいな。

もっと深くて、複雑で、深層心理の深くまで突いた――

「もっと、心の奥深くにあるような理由が……」

「――理由が、分かったのか？」

突如、頭の上から声が振ってきた。俺は思わず飛び上がった。

その弾みで、机の裏に思いつきり膝小僧を強打。がつんと鈍い音が響く。呻きながら、両手でそこをさすった。

教室内の俺の周辺にだけ、くすくすと笑い声が広がっていく。

「おい、何やってるんだ。松原」

「あ、いや……すみません」

声を掛けてきた主――先生は、電子パッドを片手に持ち、もう片手で濃い髭を撫でてこちらを見下ろしてくる。俺は咄嗟に、苦笑いを送った。

大きなため息を吐き出してから、先生は俺の電子パッドを指差しながら、言った。

「ほら、この英文のこの問かけの理由が分かったんだろ？
答えてみる、松原」

「え」

——しまった。

リリースの問かけを考えていることに夢中になっていて、授業の内容を全く頭に入れてなかった。

俺は慌てて、先生が指定した部分の英文を読みこむ。必死に単語を追いつ、意味を理解していく。

えっと、これはこうでこうだから——

持っていた電子ペンシルで、パッドに表示されている英文の該当箇所、線を引いていた。

「えと……つまり、」——「……」って、ことですか」

「うむ。まあ、そういうことだな」髭をさすりながら、先生が頷いた。「だがな、松原。お前、答えが分かったんなら、挙手して発言しないと駄目だろう？」

「あ、はい……すみません」

俺を見下ろした後、先生はもう一度ため息をついた。そして、俺が答えた英文を読みながら、教室内を徘徊していった。

取りあえず、なんとか危機を脱出出来た。机に頬杖をつきながら、ほっと胸をなでおろす。そして、窓側の一番前の席へと、視線をやった。

すると、こちらに顔を向けながら、後ろで一括りにした髪を揺らしながらにこりと笑いかける、女子の姿が見えた。

俺は慌てて視線を逸らし、窓の外を見る振りをした。

窓の外には、瑞々しい葉を盛り込んだ木々が、寄り添って立っている。強靱な太陽光線に耐えながら、時折吹きつける風にさわりと嬉しそうに音をたてていた。

その空には、梅雨があけて嬉しいと言わんばかりに、色鮮やかな

蒼が広がっていた。

※

終わりを告げる鐘の音が鳴り響き、ようやく本日最後の授業であるリーディングが、幕を閉じる。

英語の先生が立ち去ると同時に担任が教室内に入り、用件だけさっさと伝えると「それではまた明日」と言って、そのまま出ていってしまった。

まあ、帰りのホームルームなんて、大概そんなもんだ。

それから教室内は、一斉にざわめきだす。クラスメイトたちはそれぞれの電子パッドを鞆に仕舞いこみながら、帰り支度を始めている。

「なあなあ！ この後、家帰ったら『ワールド』やろうぜ。一緒にレベル上げの旅しよーぜえ」

「えー、やっだあ。美紀ったら、まだレベル二十なの？ もう何年やってるのよって話じゃん？ うけるう」

「もうすぐ隠されたイベントがあるっぽいな。俺、ちょっと参加してみようかなあと思うんだあ」

「あー、駄目だ。頭ん中攻略のことでいっばいだあ！」

いつものごとく溢れかえる、『ワールド』関連の話題。

このクラスでも、男女関係なくざっと八割ぐらいが『ワールド』をプレイしているだろう。

クラス替えの時から今まで、『ワールド』を通じて友達になったり、グループを作ったりしているやつらが、ほぼ大勢だからだ。

そう考えると、本当に『ワールド』の影響力は凄まじい。これが全世界規模なのだから、想像してみるとなんだか恐ろしくも感じてしまう。

そんな会話の渦の中で、今日一日の疲れを吐き出すように、俺はため息をついた。なんだか、色々と考え過ぎた気がする。

電子パッドの電源を切る。ぷつんと、そいつの画面が黒くなった時だった。

「――龍介君」

顔を上げると、そこには先ほど笑いかけてくれた女子が立っていた。

「またもや跳ね上がる心臓。俺はそれに気付かぬふりをしながら、よう、とさりげなく手を上げた。」

「昨日はお疲れ、藤川」

「うん、お疲れ様」

黒く流れる長い髪をさらりと揺らしながら、藤川は手を後ろに組んで笑った。

「二時間も格闘してたんだよね。今考えると、よく頑張ったなあって思うよ」

その、笑顔で辺りに花が漂う感じは、『ワールド』上でも――リリースの時も一緒だ。

ただ一つ、ゲームと違うのは、今は縛られていない髪から淡いシヤンプーの香りが漂ってくることだった。

くすぐられるようなその香りにどきまぎしながら、俺もなんとか、笑い返した。

「龍介君は、これから部活？」

「ああ。まあ……、そうかな」

教室の真正面にある、真っ白な電子黒板の横に設置されているデジタル時計を見ながら、言った。

部活の集合時間までは、まだちょっと余裕がありそうだ。

「すごいね。バスケ部って、すごく大変そう」

「まあ……練習とか、結構きつい、かな」

デジタル時計の下で、何やら楽しそうに話している数人の集団を眺めながら、ははは、と苦笑を洩らした。

すると、視界が急にセーラー服で遮られた。「ねえ」と問いかけてきた藤川に、俺は驚いて身を引いてしまった。

それを意に介していないかのように、藤川ははにかみながら言った。

「明日もまた、『ワールド』のご指導、してもらっても良い？」

「あ、ああ！」

それは、もちろん良いぜ」

慌てて頭を振ったら、こくこくと二回も頷いていた。

そんな馬鹿みたいな俺に、藤川はくすりと静かに笑った。

「ありがとう。龍介君。」

——私、早くあの世界に慣れたいんだ」

急に、声のトーンが落ちた。

藤川は、遠い目をして窓の外を眺めていた。

その姿に、俺は思わず、ハッとした。

まるで、少し触れただけでも壊れてしまいそうな、危うい陶器のようで。

危ういが故に、そこから放たれる独特な静謐さに見惚れてしまった俺は、途端に動けなくなる。

しばらくして、藤川はハッと我に返った。そして、誤魔化すように、えへへ、と笑って両手を左右に振った。

「あ、なんでもないよ。

ただ、早く慣れて、もっと世界を遊び尽したいなって思っただけ。
ごめんね邪魔して。もう、部活の時間だね。

それじゃあ」

藤川は、慌てたように、くるりと俺に背を向け、教室の外へと出ていこうとする。

その時、藤川から、ひらりと何かが床に落ちた。

小さくて黒い輪っか。髪を結ぶゴムだった。

俺は咄嗟に、おい、と呼びかけ、その腕を掴んだ。

くい、と身体が前のめりになり、そこでようやく気付いたように、藤川が目丸くしながら振り向いた。

強く引っ張った覚えはなかったのだが、俺は急いで謝りつつ、落ちたゴムを差し出した。

「これ、藤川の……？」

「あ……、ありがとう」

藤川は一瞬だけ困惑した表情を浮かべたが、すぐにこりと笑いかけ、そのまま教室を去っていった。

まるで逃げるようなその背中を、俺は立ち尽くしながら見送っていた。

なんだったのだろう。

あの、藤川の様子は。

そういえば、昨日の『ワールド』の中でも、同じような様子だったな。

……何か、あるのか？

と、俺が物思いに耽って居た時だった。
肩に、ぽんと、誰かの手が置かれた。

振りかえると、いつの間にか教室に舞い戻っていた担任が、立っていた。

「ちょっとキミ。教室掃除の人手足りないんだ。手伝って」

「……はい？」

※

「やば。掃除が長引きすぎたっ」

鞆を肩に下げ、階段を勢いよく降りていく。

慌てて腕時計を確認する。午後三時四十分。

結局担任からの申し出に断れなかった俺は、さっさと掃除を済ませようとしたものの、他の奴らが立ち話して邪魔するせいで上手くいかず、時間がかかってしまった。

「くそ……、なんでこうなるんだよ……！」

悪態を吐いても、時間は戻ってくれない。階段を駆け下りながら、唇を噛みしめた。

——すぐに断れない性格は、やっぱり損だ。

第一校舎を抜け、体育館へとつづく外廊下へと出た時だった。

「お。松原クンじゃないかあ」

俺は慌てて、辺りを見渡した。

声の主は、体育館の入り口に立っていた。

咄嗟に、唇を一文字に結んだ。

ゆっくりと、その人物は、こちらに近づいてくる。

「なんだ？ 今日遅れ気味なのなあ」

整った顔の横で、派手なピアスが光を放つのが見えた。

にやりと曲がる口元から覗く、所々にある銀歯も、不気味に光りだす。

バスケットの一つ上の先輩——野村先輩だった。

「あ、す、すみません。」

ちよつと、帰りのホームルームが長引いて、掃除も手伝ってた、というか」

言葉が、上手く出てこなかった。

部活のミーティングは、三時半から始まる。

俺は、そのミーティングが始まる十分前に体育館に行き、準備をしなければならぬ。

それが、俺に課せられた命令だから。

いいよいいよ気にすんなよ、と豪快に笑いながら、先輩は俺の肩をポンポンと叩いた。

「まあ、たまにやあ遅れたっていいんじゃない？」

本当なら一年がやんなきゃならぬのに、あいつらサボってばっかだしよお。

あ。毎回俺が頼んでおいてこんなこと言うのもアレだけど、松原くんには悪いと思ってんのよお。

でも、いっつも文句言わずやってくれるっしょ？ マジ感謝して

るわー」

「……いや、そんな」

先輩の顔面からこれでもかと滲みでるニタニタ笑いから視線を外し、俺は苦笑いで答えた。

ふと、野村先輩の背後で、同じようにこちらを見てくる部活の先輩たちが見えた。いつも野村先輩の傍にいる人たちだ。その表情は見えなかった。見なかった。

途端、何か苦いものが、食堂を伝って喉にこみ上げてくる。

「あ、ところで」先輩は何か思いついたように、ポンと両手を合わせて言った。「松原くん、今いくら持ってる？」

「金、ですか」

「こそ」

今朝、コンビニで昼飯用のパンを二つ買った記憶が蘇る。

千円出したお釣りで、確か七百円貰った筈だ。

そう伝えようとした口の動きが、ぴたりと止まる。

ここで俺は嘘をつき、「金なんてもってないです」と押し返す選択肢も、選べる筈だ。——いや、むしろそうするべきかもしれない。こういう場面に出くわす度に、俺は何度もそのことを考える。

ここで、言い返すことが出来れば——

ぐ、と拳に力を入れた。

「……七百円、ぐらいです」

けれど、出て来た言葉は、嘘をつかなかった。

「マジで？ 良かったわー」

野村先輩は更ににっこりと大きな笑みを見せ、再び俺の肩に両手を乗せた。

その顔を近づけてくる。にんにくのような匂いが鼻をつく。しかもそうになる顔を、必死で保つ。

「実はさあ、お願いがあつて。自販機でジュース四つ、買ってきてくれないかなあ。いつものヤツね。」

もちろん、金は後で返すよ。今までの分も含めて、ね。

だから頼むよ。こういうこと、松原クンしか頼む人いなくてよお」

パン、と掌を合わせ、先輩は小声で言う。

だが、その声はとても低く、何か牽制するような含みがあつた。

監視するようなきつい視線で、じつとりと俺を捕えながら。

いつもの、お約束パターンだ。

こうなるともう、俺に選択の余地はなくなる。

俺は顔を上げ、こみ上げて来る何かを必死で飲み込みながら、苦笑交じりに答えた。

「——もちろん、良いですよ」

途端に、先輩の口はひん曲がつた。人は、時にこんなにも口元が歪むのかと、驚くくらいに。

「マジマジ？ 松原クン優しいな、やっぱり！」

先輩が後ろを振り向いた。そこに控えている先輩たちへむかつて、オーケーの合図でもしているのだろう。

「そんじゃ、頼んだ！ あ、なるべく早く頼むぜ」

先輩は大げさに手をひらひらと振りながら、後方で控えている先輩たちの元へと駆け寄っていき、そのまま体育館の中へと消えていった。

俺は財布を取り出し、中身を見た。百円玉が五つ、冷たい光を放っていた。

ああ、そうか。七百円のお釣りもらったのは、一昨日の話だったわけ、と今更のように思いだす。

馬鹿みたいだな、と自分でも呆れてくる。

俺は自販機に向かう為、踵を返した。

ここからは距離があるから、きつと帰ってくる頃には、ミーティングが終わっているのかもしれない。

——まあ、いいさ。どーせ、俺が居ようが居まいが、関係ないのだから。

と、そんなことを考えている自分自身に気付き、腹の底から嫌気が湧いてきた。

唇を、きつく一文字に結んだ。

俺は、いつまでこんなことを、続けるつもりなんだろうか。

ピー！

体育館内に、甲高いホイッスル音が響き渡る。

と同時に、ばす、とネットの中をボールが通過する音が聞こえた。おー、と一斉に歓声上がる。

「よし、練習試合、ここまでだっ！

野村、さっきの切り返しとシュート、見事だった！ 他の選手は、あれを参考にするように！」

顧問の声が続いて、コート上にいる選手や、傍で見学していた生徒、そして体育館外で見学していた部外者の輪からも、拍手喝采が湧きあがる。

当本人の野村先輩は、「こんなのなんでもねえよ」と言いたそうに、両手をポケットに入れながら、肩をすくめているのが見えた。

「すっげーよな、三年の野村先輩。

あんな終了間際でボール奪い返して、ロングシュート決めちゃうなんて」

「あったり前だろ。先輩、中学の頃全国試合にまで出場した実力者なんだから。

引退した今でも、ああやってプレイして指導してくれるんだし。

ああー……、やっぱ、尊敬するなあ」

俺の傍で見学していた一年の選手が、拍手を送りながらそう語りあうのが聞こえてくる。

二年でただ一人、体育館の壁に背を預けながら見学している俺も、周りに合わせて拍手をする。

いつの間にか多くの選手に囲まれて、尊敬のまなざしを受けながらもそそくさと退場しようとする野村先輩の姿が、遠くにあった。

その、とても清々しくて大きな背中が、なんだか眩しくも見えた。顧問の先生が、またもや声を張り上げる。

「よし、ちょうど良い時間になったから、今日はここまで！」

選手は俺のどこに來い。他は片付け始めていいぞー」

はい、と生徒たちの返事が、一斉に体育館内に響き渡った。俺も、腹から返事をした。

体育館内の生徒は、二つの方向へと動いていく。先生の元へ集まる者。そして、更衣室に向かって歩いていく者。

俺は一つため息をついた後に、体育館の壁から離れ、床に転がっているボールに手を伸ばした時だった。

「よう、龍介。俺の勇士、見てくれたあ？」

垂らす汗を、首にまいた濡れたタオルで拭きながら、クラスメイトの洋平が声をかけてきた。

その眩しいほど輝かしい友人を横目に見ながら、俺は淡々と答えた。

「ごめん。なんも見えてなかった」

「なんだよそれー！ 見てくれよ！ なあ、俺成長しただろう？」
しつこくまとわりついてくる洋平を避け、「はいはい」と適当に相槌を打ちながら、いつものようにボールを拾っていく。

しばらくしてから、洋平が諦めたように、はあ、とため息を漏らすのが聞こえた。

そして、声のトーンを少し低くさせながら、洋平は言った。

「なあ……龍介。」

お前、いつまでそうやって雑用係、してるつもりなんだ？」

ぴたり、とボールを拾う腕が止まった。

咄嗟に、洋平に背を向けた。

ぐっ、と唇を噛みしめる。

「そりゃ……俺が最初、『心細いから』ってお前を無理に誘っちゃったのは、悪いとは思ってるけどさあ……」。

でも、お前も一回だけでいいから、バスケ、やってみろよ。ここまですべてしてるんだし。

案外、面白いもんだぜ？」

洋平の言葉が、重石となって俺の心に乗っかってくる。

俺はこっそりと深呼吸をして冷静を取り戻すと、体育館の壁に向かって喋った。

「知ってるだろ？ 俺、運動かなり苦手なこと。五十メートルすらまともに最後まで走れないんだ。」

そんな俺が、バスケ出来ると思うか？」

「でも、バスケじゃ五十メートルも走らないんだぜ？」

「それでも相当走りまわるじゃないか。一緒だよ」

近くに転がっていたボールに手を伸ばし、掴んだ。

そして、数メートル先に置いてあるボール籠に向かい、俺は投げた。

渾身の力を込めて投げたそれは、宙で半円を描くも、籠の三十センチ手前に着地し、虚しくバウンドした。

そのままあらぬ方向へ跳ね返り、ついには外にまで転がってしまったボール。

俺は、その方向を指差しながら、苦笑した。

「……ほらな。まともにボールも投げられない腕力だし」

「おい龍介——」

少し怒りに近い口調で何かを言いかけた洋平に背を向けたまま、飛んでいったボールを追うために、歩き出した。

その方向を睨みつけながらも、なるべく平然を装うように。

「また、暇があったら『ワールド』でパーティ組もうぜ。」

あと、選手は早く顧問のところ行けよ」

声のトーンはなるべく明るく聞こえるように気を付けた。

両こぶしだけは、きつく結びながら。

※

「——あ」

外に出ると、バスケットボールを両手に抱えながら、こちらをじ

つと見据えて立っている女子生徒がいた。思わず、足が止まる。

その、カールがかかった髪が風でふわりと浮いて、似合わないほど大きな眼鏡の向こうの目が、冷たくこちらを見ていた。

「……か、亀田」

俺が呼びかけると、亀田は無表情で、すたすたとこちらに近寄ってきた。

そして、「これ」と短く言いながら、抱えていたボールをこちらに差し出してきた。俺は小さくお礼を言って、それを受け取る。

その際も、亀田は黙ってこちらを見ているだけだ。なんだか居心地が悪い。辺りに黒くて冷たい靄がかかったような気がした。

試しに、「お前、今から帰りか？」と、亀田の後ろの地面に置かれた鞆を見ながら言ったが、返事はなかった。結局、俺はバスケットボールを手にながら、あはは、と苦笑いするしかなかった。

最初に会った時から——一年の時からそうだった。

何故だか、“リアル”の亀田から発せられる雰囲気は固くて、対峙すると気が重くなる。

まるでこちらから何かを言われるのを、近づいてこられるのを、拒絶しているみたいに。

それは、『ワールド』の世界の「アサ」と同一人物だとは、信じがたいくらい逆だった。

アサならば、馬鹿みたいに明るくおおっぴろげて、一緒にいても楽しくなるようなヤツなのに。俺はいつも、不思議に思っていた。

やがて、亀田が少し俯きがちに、口を開いた。

「……なんで、バスケ部、続けているわけ？」

突然の質問に、俺は言葉が詰まった。

受け取ったボールを見て、ぐっと力を込めることしか、出来なかった。

追い打ちのように、亀田は言う。

「去年、同じクラスだった時……、言ってたよね？」

『一年の時だけやって、二年になったら辞める』って。

でも、二年になっても続けてる。ずっと、補欠なのに。

ずっと、準備運動だけやって。拳句に、準備や片付けまで押しつけられて。

肝心なバスケなんか、一回もやってないのに」

「それは――」

そこまで言いかけて、口を噤んだ。言い返せる言葉など、何もない。咄嗟に亀田から視線を逸らし、さわさわと揺れる緑の葉っぱたちを見上げた。

上空では、相変わらずお天気を主張している太陽がきらきらと輝いていた。西の方角を見れば、灰色の空がどんよりと広がっていて、太陽を侵食しようとするかのように、徐々にその距離を縮めている。ああ、夕立でも降ってしまいそうだ、と思った。

そんな迫りくる灰色の空に向かって、俺は苦笑しながら言った。

「……ほら、一応、バスケ部って運動部だし。」

そんな部に三年間入ってれば、もしかしたら、大学行く時の推薦で、良いポイント稼ぎになるかもしれないだろう？」

「嘘つき」

冷たく言い放つ亀田。

そっと視線を戻せば、まるでこちらの心の奥底を覗くかのような、鋭い目が飛び込んできた。心臓を鷲掴みにされた気分だった。

その時、強烈な風が俺たち二人の間を駆け抜けた。それは地面の雑草を揺らし、亀田の制服のスカートをためかせ、俺の体操服の半そでをぱたぱたと叩いていく。

風が完全に立ち去り、再びしんと静寂が落ちてきた時、亀田は口を開いた。

「野村先輩に、言えばいいじゃん」

その人物の名前が出てきたことに、俺はびくりと身が縮こまるのを感じた。

完全に息が詰まった。――野村先輩。

「……なんで」

なんで、知ってるんだ。そう言いかけて、俺は慌てて口を閉じた。先輩から指令を受け続けていることは、誰にも話していない筈だった。洋平にだって。

亀田は、そんなたじろぐ俺を見て、その口元を少しだけ浮かせたように見えた。

「見てれば、分かるよ。だって、すごい目立つし」

俺は慌てて問いかけた。「そんな、目立ってた、か？」

「うん。そりゃ、体育館前でそういうやり取りを頻繁に見かけりゃ、目立つだろうね。」

多分、バスケット部員全員知ってるんじゃない？ あたしが知ってるくらいなんだから」

持っていたバスケットボールを取り落としそうになり、俺は、ぐ、と力を込めた。

そりゃ、薄々は周りにきずかれているかもしれない、とは思っていただけだ。

……そうか。そんな、目立ってたなんて。

もしかしたら、洋平だってもう気付いているんじゃないか。

そう思ったら、自然と苦笑が漏れた。

「はは……。」

やっぱ……そうだよな」

下唇を噛んだ。口の中にじんわり鉄の味が広がった気がした。

「――ねえ」

その小さく問いかける声に、俺はゆっくりと亀田を見た。

瞬間、俺はハッと息を呑んだ。

そこには、眉を寄せながら眼鏡の奥の目を伏せがちにして、そして少しだけ苦しそうな亀田の表情があったからだ。

「……言えば、いいじゃん」

亀田は、言った。

「『もう、ヤメてください』って」

強い風がまた、俺たちの間を吹きぬけた。

「『雑用するためにバスケット部にいるんじゃないやありません』ってさ——」
バスケットボールを握り締める手に力が入りすぎて、じわりと汗
が滲んだ掌が、じんと痛くなった。

そして気付いたら。

俺は、叫んでいた。

「それは、ないっ」

虚しいほどでかい声は、体育館の外壁を幾重か反射した後に、消
えていった。

——無理だ。

分かっていた。

そんなことが言えているのであれば、今頃、こんな所に居たりし
ない。

いつだってそうなんだ。

俺は、いつだって、損をしてばかりだ。

何か頼まれれば、何も言えない性格。

何も言い返すことも出来ない性格。

そんな自分に、いつも自己嫌悪を抱いてきて。

「現実」は——”リアル”は、いつだってそういうものなんだ。

——リアル。

ふと、ある疑問が脳裏をよぎって、俺はハツとした。

リアルの俺は、確かにこうだけど。

別の世界——『ワールド』では、俺はこんな思いを抱いてことな
んで、あったらどうか？

リリイの言葉が——何度も何度も頭の中を巡った台詞が、また蘇
ってきた。

”なんでリュウ君は、この『世界』をプレイしているの？”

さわり、と草を踏む音に気付いて顔を上げると、亀田がくるりと俺に背を向けていた。

そして一步踏み出そうとした亀田に、俺は慌てて呼び止めようとした時。

「…………ごめん」

そう小さくそう呟いたのを、俺は確かに聞き逃さなかった。

そして亀田がそのまま、校舎に向かって歩いていこうとした時に、今度こそ俺は「亀田！」と呼びとめた。

瞬間にぴたりと足の動きを止めた亀田は、そのまま振り向かない。俺はその背中に、『ワールド』のプレイヤーキャラ、アサの姿を重ねてみた。

そこに漂う雰囲気、やっぱり「アサ」というプレイヤーに似ていて、ああ、あれは間違いなく亀田なんだなと思った。

そして、先ほど思い浮かんだ台詞を、俺は口にしていった。

「なんで、亀田は『ワールド』をプレイしているんだ？」

「……へ？」

呆氣にとられような表情で、亀田はこちらを見る。

俺は慌てて頭を掻きながら、「あ、いや」と口ごもりながら視線を彷徨わせた。

「わ、悪い。つい。」

いや、別に深い意味とかないんだけど。ただなんとなくっていうか」あはは、と苦笑しながら早口で言った。

しばらく亀田がこちらに不思議そうな視線をよこした後に、そのままくると校舎の方角へ向き直って歩いていった。ほんの一瞬だけ、辛そうな表情を見せて。

その姿が見えなくなつて、ついに一人取り残された俺は、はあ、と盛大にため息をついていた。

俺、何言ってるんだろ、なんて思いながら、もう一度、空を見上げた。

灰色の雲は、太陽を侵食することもなく、そのまま明後日の方角へと消えていこうとしていた。

Log 5 ダンジョン↓記憶だけが取り残された廃墟（上）

「えいっ」

リリーの杖から放たれた一筋の光線が、目の前に居た雑魚モンスターを包み込む。

やがて、光はモンスターと共に、消えていった。

「お。やるじゃないか」

リリーは、こちらを見て、えへへ、と微笑んだ。

ぴろん、と電子音。リリーのすぐ左側の空間に、ウィンドウが表示された。

そこには、『経験値…200 取得ゴールド…100 PC…リリーはレベル十五に上がった！』と書かれていた。

「やった！」とリリーは、ウサギのようにぴよんとび跳ねた。そして、傍にいた俺に向かってピースサインを作った。

「私、段々と戦闘に慣れてきた感じがする！」

子供みたいにはしゃぐリリーに、俺は自然と頬が緩んだ。

「そりゃ良かったよ。」

リリーのレベルも、かなり上がってきたしな」

「うん。リュウくんのおかげだよ。ありがとう」

にこりと微笑むリリーに、俺は照れ笑いしながら頭を掻いた。

「いやいや。俺はただ、基本を教えてやったただだって」

「それでも、リュウくんが居なかったら、私は今頃、最初のタウンで未だに迷ってたかもしれないよ？」なんて言い、両手に抱えた杖を揺らしながら笑うリリー。

俺は「なんだよそれ」と吹きだしながら、顔を上げた。

遙か上空に広がる夜空には、満遍なく散りばめられた大小様々な星たちがいて、それらは俺たちに優しく微笑みかけているように見えた。

※

もはやこのダンジョンには、残骸しか残されていないかった。

以前この地に建っていた形跡であろう大きな建物の土台や骨組み、またはその一部の壁など、だ。

それらはもうすっかり古びていて、ちゃんと触れただけでも崩れてしまいそうだ。

唯一残っている壁には、何かの傷やら銃痕やら、飛び散った血の跡やらが伺える。

砂が一面に覆う地面には、ガラスの破片が多く散乱している。その中に、剣の切れ端や錆びれた銃、銀の鎧の残骸などが落ちているのも、見えた。

それらは、天から降り注ぐ小さな光を反射して、ちかり、ちかりと輝く。淡く、優しく。

その光景はまるで、地面にも星が誕生したかのようなようだ。

俺は、視界全てが「夜空」に包まれたかのようなこのダンジョンが、お気に入りだった。

一般では、レベルが低いモンスターしか出てこないから『初心者レベル上げ用のダンジョン』として有名だ。

でも、未だに俺は、ここに足を踏み入れては上下の「夜空」を眺めている。

ここに来れば、少し寂しいけれども、とても落ち着いた気分になることが出来るから。

「素敵な場所だね、ここ」

リリィは、そんな地面の星屑たちを優しいまなざしで見つめなが

ら、言った。

「俺のお気に入りダンジョンの一つなんだよ」

「へえー……」

リリイはしゃがみ込み、地面で輝く星を一つ手に取り立ち上がった。

掌に寄せられたそれは、ただのガラスに変化した。それでもそれを大切そうに両手で包み込みながら、リリイは俺の方を見た。

「このゲームには、他にもこんなような場所があるの？」

「そうだなあ……」俺は少し考えながら言った。「廃墟はここだけだけど、あとは砂漠とか海辺とか山中とか。ああ、あと、前行った高原とか。」

それと、ダンジョンのネーミングもなんか不思議な感じなんだよな。

例えばここなら、『記憶だけが取り残された廃墟』、て名前だろ？ 長ったらしいけど、そういうのもなんか面白いよな」

「うん、そうだね」

ちかり、ちかり。

地面と夜空に散らばる星屑たちが、リリイの華奢な身体を、淡い光に包みこんでいた。

「アサちゃんは、このダンジョン、知ってるのかな？」

「……さあ？ どうだろうな。」

ま、でも結構有名なところだし、知ってるんじゃないか？」

「そっかあ」ふふふ、とリリイは笑った。「いつか三人で、ここ、お散歩したいね」

なんて言うリリイに、俺は、ははは、と苦笑を洩らすしかなかった。アサが一緒となると、結構賑やかなことになりそうだ。

そこでふと、脳裏に以前から抱えていた疑問が浮かんできた。

「そういやリリイと——藤川と亀田って、昔からの友達、みたいなもんなのか？」

二人が初めて会うのを『ここ』で見たけど、初対面にしちゃ、すごく仲良さそうに見えたから」

「ああ、うん。そうだよ」

リリイが、はにかんだ。

「えとね、中学三年生の時に同じクラスになって、そこで友達になったの。」

高校に上がってからはまだ一回も同じクラスになってないから、あまり会えてないけど。

でも時々、私の方から麻子ちゃんに会いに行って、勉強教えてもらってるんだ。

麻子ちゃん理系だから、私の苦手な数学、すごく丁寧に教えてくれるんだあ」

「ああ、あいつ、理系だったか」

頭を掻きながら、そういや今の亀田のクラスがどこなのかとか、詳しく知らないことに気付いた。

一年の時、亀田と同じクラスになり、同じ委員会の仕事を担当したことがあった。

それ以降、亀田との接点は、あまりない。

まあ、接点といってもあつちはほぼ黙りこくってるから、会話なんてほとんど成立してないのだけだ。

「ねえねえ。」

リュウくんとかアサちゃんの二人は、結構前から『ワールド』とかで仲良かったの？　いつからパーティ組んでた？」

リリイが首を傾げながら、楽しそうに問いかけてきた。

俺は、うーん、と唸った。そういや、なんであいつとパーティ組むようになったんだっけ？　一年前の記憶を、一生懸命探す。

そして、その答えを手繰り寄せた時に俺は、ああ、と手を叩いた。「そうだ、委員会の当番で一緒だった時だ。」

『ワールド』の話で盛り上がって。あの時、俺と亀田が同じ時期に始めたんだなあってなことを、喋ってた気がする。

そしたら、亀田が言ってきたんだよ、『それなら一緒にパーティ組まない?』って。そっからだ」

「へえ。それじゃあ、パーティ組むきっかけは、私とリュウくんとはぼおんなじなんだね!」

そう言って、リリイはにっこりと笑った。

——そうなるのか?

と思いながら、俺も躊躇いがちに笑った。

※

——二か月前。

まだ桜が散る前の、クラスメイトたちに初々しさが残っていた日の、下校時間。

バスケ部が急遽休みになって、浮かれていた俺と洋平。それで、学校で隠れて『ワールド』をやってみよう、なんて無謀な計画を打ち出してそれを教室の片隅で実行していた。

学校の規則によって、校内で『ワールド』をプレイすることは断じて禁止されていた。けれど、大抵の人間は、禁止されるとやりたくなる衝動に駆られるものだ。

最初は嫌だった俺も、いつの間にか乗る気になっていた。

誰も居なくなった教室内の片隅で、持ってきたノートパソコンを机の引き出しに隠し、肩から毛布なんかかけたりして「いかにも不貞寝してます」といった感じを装う。

そして一時間ほどプレイした後、顔を上げた時に。

目の前に、藤川がいた。

その時、俺は藤川のことを「ただの同じクラスの女子」との認識

しかなかったから、正直とても焦った。

じっと、こちらを見つめてくる藤川。

先生にチクられると思った洋平が「俺は関係ない」といった仕草で、そそくさと教室を出ていったのを覚えている。

そして、一人残されたことに内心焦りまくって、適当な言い訳をずらずらと述べた俺。

藤川は、にこりとして、言った。

「私ね、一か月くらい前に、『ワールド』始めたんだ。

良かったから、基本的なこと、教えてくれない？ そうしたら、先生に言わないから」

俺はもう、こくりと頷くしかなかった。

胸の内で、心臓がばくばくと跳ね上がるのを感じながら。

桜色の頬を緩ませながら、あどけない少女のように笑う藤川の笑顔が、とても眩しく見えたからだった。

※

俺が物思いに耽っている間、リリイはこちらに背を向け、夜空を見上げながら一歩一歩ゆっくりと踏み出していた。

その細い背中を見つめながら、俺は思った。

あの時、学校でゲームをやったことがばれたのが、藤川で良かった。

でなければ、こんなふうには、二人でパーティ組むなんてことは、なかったのだから。

目の前のリリイはふと足を止め、くるりと俺へ向き直った。

髪がさらりと、綺麗な扇形を描いて舞い上がる。

それはとても、グラフィックの偽物だと思えないくらい魅惑的で、俺の視線を釘付けにする。

「リュウくんは、えと……一年前にこのゲームを始めたんだよね？」

「え？ うん……まあ、そうだけど」

そっか、と呟いた後に、リリィは夜空を見上げながら、「ねえ」と問いかけてきた。

「どんな気持ちだった？ 最初にプレイした時って」

「……へ？」

最初にプレイした時――？

変な質問してくるな、なんて思いながら、俺は一呼吸置いて思考を巡らせる。

脳の記憶の奥で眠っていた、一年前の初々しい気持ちを、呼び起こす。

専用ヘッドホンを手にした時の実感。パソコンを前に座る時のワクワク感。これから自分は、違う世界へ旅立つんだという冒険心――。

気付けば、口元から笑みがこぼれていた。

「そりゃあ……すっげえ嬉しかったぜ。」

なんせ、ファンタジーな世界で、自分が好きな職業になりきれて、自分の思い通りに動いて、好きなように冒険できて。

しかもこうやって、ここに立っている感覚も、匂いも分かる。まさに最先端の技術って感じで、はしゃぎすぎてた気がする。

ガキの頃、スマホを手にした時より飛び上がったなあ。あ、ちなみに、今もそのスマホ使ってたりするんだけど。手持ち型のやつ。

今じゃ腕時計型が主流だっていうのに。時代遅れだよなあ」

「へえ」と、リリイは口到手をあてながら、くすくすと笑った。

「なんか、リュウくん、可愛い」

「なっ」

思わぬ言葉に、俺は自分の顔が熱くなるのを感じた。

それに気付いたリリイも、頬をピンク色に染めながら笑った。

「赤くなるのも丁寧に反映されるんだね、このゲーム」

「おま……からかってるのかよっ！」

それでもなお、くすくすと笑い続けるリリイ。俺は背を向け、夜空を見上げた。

そこで輝く星達の光で、この顔の熱を隠してしまいたかった。

「そ……そういうリリイはどうなんだよ。お前、始めたばかりか？」

初めてログインした時って、ほら、やっぱり嬉しいもんだろ」

少しぶっきらぼうな感じで、俺は問いかけた。

けれど、すぐには返事が返ってこなかった。

あれ、と思い、リリイの方へ視線をやった。

リリイは、地面に散らばる小さな光を見つめていた。

その表情は、さきほどもまでの緩やかな感じではなく、あの、少し悲しみを湛えたような、繊細な陶器のようになっていた。

どきん、と心臓が跳ねた。

「……感動した」

目を静かに閉じながら、リリイは優しく言葉を発した。

「ゲームの世界なのにね、感触やら匂いを感じられるってことに、なんかすごく、感動した。

感動しすぎて、しばらく動けなかったぐらい。

信じられなかったの。こんなふうに、普通に感触として伝わってくるのが。

最初は、こんな生々しく伝わるもんだと思ってなかったから、すぐ、びっくりしちゃって。

でも、確かに感じるんだよね。痛みも、かゆみも、触れる感じも。それでね、私、思ったの。

——こういう表現は、おかしいと思うけど」

一呼吸置いてから、リリイは、俺を優しい眼差しで捕えた。

「生きてるんだな” って、思った」

リリイの発した最後の一言に呼応するように、視界の上や下から、ちかちかと星達がリズムを取る。

それらは相変わらず優しげな光を放っていて、俺たちをそっと包み込む。

俺は、リリイの放ったたった一言に、完全に意表を突かれていた。

『生きてるんだな』、か——。

その言葉を噛みしめるように、俺は目を閉じた。

ここは、ゲームだ。単なるゲーム。プログラム上の架空の世界。

「0」と「1」の数式から成り立つ、現実に関わりなく近いようで、それでも偽物の世界。

だから、ここにいるプレイヤーの俺たちも、体感することは出来るけれど、それはコンピュータ上の仕組みでしかない。

機械の中の出来事であって、「現実」じゃ、リアルじゃない。

「……なるほど、な」

思わず、頷いた。

『生きている』、か。

そんなふうを考えてみたことなんて、一度もなかった。俺は目を開けて、もう一度星空を見る。

星は、ここに存在する命の鼓動を伝えるかのように、力強く輝いているように見えた。

ふ、と俺が思わず笑うと、横からリリイがくすりと笑う声が聞こえてきた。

「ごめん。変なこと言ったね、私」

「……いいや、そんなこと」

言いながら、俺はあの台詞を呼び起こしていた。

”何故、このゲームをプレイしているのか”

——そうか。

きっと、リリイにとっては。

この世界を、現実とは「別のもの」じゃなくて、もうひとつの「リアル」だと、思っているのかもしれない。

だから、その体感できるこの『世界』を、リリイは本物のようだと考えている。

本当に、大切にしているんだな、と思った。

それはなんだか、とてもリリイらしい発想だ。

俺はつい、笑ってしまった。

——だったら、リアルの方は、どう思っているんだろう？

ふと、頭の中に一つの疑問が湧きあがった。

つい、リリイの方を凝視してしまふ。リリイは、嬉しそうに頬を

ほころばせながら、「ん？」とこちらを見ていた。

俺は少し戸惑ったものの、言葉にして問いかけようとした時だった。

「――あ。そっこのお二人さあん」

声が、飛んできた。

Log 6 ダンジョン↓記憶だけが取り残された廃墟（下）

その呑気な声が聞こえて来た瞬間、俺は文字通り飛び上がった。心臓が破裂するかと思った。

なんとなく脈拍が止まっていなかったのを確かめながら、声の主を見た。

そこには、小さい体躯に不釣り合いな大きな槍を抱えた、赤髪の少年プレイヤーが立っていた。

俺の様子を見て、「ありゃ」と目を丸くさせた後に、たはは、と笑った。

「おっとっと。驚かせちゃったらゴメンよー」

「いえいえー」

俺の替わりに、リリイが笑顔で応じた。その少年は、子供のように笑い続ける。

俺は大きな深呼吸を一つして、気持ちを落ち着かせた。それから、「何か用か?」と、問いかけた。

少年はそこで、ようやく笑いを止めた。

「あ、そうそうー。実はねえ」

にかりと満面の笑みを浮かべたその少年は、ピースサインを作りながら、元気よく言った。

「ボクの入っているギルドに、入って欲しいのだあ!」

がくつ、と、大きく肩がずり落ちるのを感じた。

……なんだよ、よくあるギルド勧誘じゃないか、コレ。

隣でリリイが、「ギルドって、アサちゃんが入ってるって言うってた?」とこっそり問いかけてきたので、俺は力なく頷いた。

「あー、ただのギルド勧誘だと思ってるなあ！」少年が俺を指差しながら叫んだ。

ため息を一つついてから、俺は言った。

「いやだって、どう見てもただのギルド勧誘にしか」

「あのねえ！ 僕はマジメなの！ 僕が入ってるギルド、マジで人不足で困ってんだよ。」

お二人とも、なんとなく雰囲気でギルド加入してない風だし！

良かったら是非是非！」

「雰囲気で決めるなよっ」思わず突っ込んだ。

「でもでも、凶星でしょ？」

「それは……」

うーん……困ったな。そう思い、リリイに視線をやった。

リリイは訳がわからないと言った風に目をキョロキョロさせていて、なんだか混乱しているようにも見えた。

——ここは、すぐに立ち去ったほうがいいかもしれない。

俺は、一つ咳払いしてから、少年に近づいてから言った。

「せっかくの勧誘で悪いけど、俺たち、ギルドには入る気ないんだ。他のプレイヤーに勧誘してくれないか？」

えー、と少年は唇を突きたてた。そして、じつとりと俺たちを見ている。

そのねばりっぽい視線に、なんだかとてもしつこそうな印象を受ける。面倒臭いことになりそうだ。

リリイに目配せした後、俺はその細い腕を掴み、少年へ告げた。「本当に、俺たちはギルドに入る気はないんだ。悪いな。」

あ、それと、最初にギルド名を名乗っておいた方がいいと思う。じゃないと、誰だっけ入り辛いと思うぜ？」

「……ふーん」

少年がそう呟き、俯いた。

その長い前髪で、目が隠れる。

やがて、その口元が大きく歪み、にやりと、不気味なほど大きな笑みを作った。

瞬間、背筋にぞわっと悪寒が走っていくのを感じた。

リリーの腕を引っ張り、ワープ装置まで急いで向かおうとした時だった。

「――じゃあ、ギルド名乗れば、入ってくれるのかな？」

きらり、と光るものが、すぐ近くに迫った。

動かしかけた身体を止め、視線だけをゆっくりと、そちらに遣る。鋭く光る刃が、顔の側にあった。

「！ リュウくんっ」

慌てて近寄ろうとしたリリーをさっと手で制し、俺は恐る恐る、振り返る。

さきほどまでやんちゃを演じていた少年が、悪魔のように微笑み、長い槍をこちらに向けながら、言った。

「だったら、教えてあげるよ。ギルド名」

少年は、低いトーンで、その名を告げる。

「僕らのギルド名は――」

『プレイヤー殺戮会』」

息を呑んだ。

少年は、誇らしげに笑っていた。

すぐ隣で、同じように息を呑む音が聞こえた。

「な、なんで……？」

プレイヤーが攻撃する対象は、モンスターでしょう……？」
少し声を上ずりながら問いかけたリリィを、少年はぎろりと睨みつけた。

ちろり、と舌を出しながら、言う。

「あのさ。あんた、『VRMMO』の真髄を忘れてない？」

ここではさ、実際に”体感”出来るんだよ？

感触も、息遣いも……痛みだって。

ねえ、これってさ、すっごく楽しいことだと思わない？」

こちらを馬鹿にするかのような、憐れむかのような瞳が、俺に向けられる。

舌舐めずりをしながら、こちらを舐めるように。

どくん、と。

心臓が、一気に重くなった。

俺は、この目を知ってる。

それを、一体何度、見てきていることか。

「だからさ、それをもっともっとプレイヤーに”体感”させてあげようと思って、僕らが痛みを提供してあげるんだよ。

そうしたら、嫌でもその素晴らしい技術を実感できるでしょ？

ふっははははは、どうどう？ 素晴らしいギルドだと思わない？」

その槍の刃が、俺の首元に当たる。

その冷たい感触や、押し込まれるような圧迫感、皮膚が切れるような感覚まで、確かに伝わってきた。

奥に必死に押し込めた恐怖感も、一緒になって身体を浸食してい

く。

下唇を噛みしめた。

喉から苦いものがせりあがろうとしている。

くそ……。

こんなの——こんなの冗談じゃないっ！

す、と手を伸ばし、俺はそいつの刃を手で退いた。

掌に何か切れる衝撃が走ったが、無視した。俺は言った。

「……そんなことしなくとも、プレイヤーはモンスターとの戦いの中で、嫌でも”痛み”を感じるだろうが」

自分でも驚くほど、腹の底から低い声が出た。

くつくつく、と少年が笑う。

「嫌だねえ。僕らが傷つけることに、意味があるんだから。

それぐらい、分からないの？

お・バ・カ・さ・ん？」

ぎり、と奥歯を噛みしめた。

熱いものが体中を浸透していき、腹の中がふつふつと湧きあがるのを感じる。

突然、今日の昼間に野村先輩とやりとりしたことが、鮮明に蘇ってくる。

あの、こちらを見下すような、監視するかのような、冷たい目。

あの、鼻をツンとつくような、とても不愉快な匂い。

あの、不健康な紫色の唇で捨て台詞を吐き捨てながら、去っていく後ろ姿。

——そして、それに対して何も言い返せない、惨めな自分。

ぷつん、と頭の中の何かが、切れた。

「やめて!」と、後ろでリリィが叫ぶ声を耳にした時。

俺は愛用の武器である剣を取り出し、
そして。

それを、自分の左腕に向かって、思いっきり突きさした。

「リュウくんっ!!」

「なっ……」

リリィの悲鳴が響き渡り、目の前の少年の目が、大きく見開かれたのが見えた。

左腕に、一瞬にして大きな衝撃が駆け巡った。体験したこともない強い痛みに呻く。足から力が抜けていく。視界が薄れていく。

ああしまった。俺、何やってるんだろう。このままじゃ、ログアウトに――

地面に崩れ落ちる、その直前だった。

視界が一気に光に包まれた。俺は咄嗟に目を瞑った。

数秒ほど経ってから、ゆっくりと目を開く。

俺はしっかりと、地面に膝をついていた。

ログアウト……していなかった。

ふと、俺のお腹に、誰かの腕が絡まっているのが見えた。それは

――リリィの腕だった。

後ろから抱きついていいるのだ、と理解した瞬間、心臓がひっくり返った。

思わず「うわっ」と叫びながら、その身体から遠ざかった。

「り、リュウくん、大丈夫!？」

リリィが尚もこちらに近寄ってこようとしたので、俺は慌ててぶ

んぶん頷き、地面に尻もちをつきながら後ずさりした。

左腕の痛みは、もうすっかりどこかへ飛んでしまっていた。

「だ、大丈夫、もう平気、ホント。マジで、さ、サンキュ」

ああ、俺マジで動揺してるの、ばれちゃいけないか。

リリィは「良かったあ」と言っ、胸をなでおろしていた。

と、その時、頭上から声が降ってきた。

「お前、あれ……。マジかよ」

見上げると、少年が口をぽかんとあけながら、目をまん丸にさせてこちらを見ていた。

しまった。一瞬だけど、こいつの存在をすっかり忘れていた。

俺は慌てて頭を掻きながら、「えっと……」と何か言い返す言葉はないかと探した。

でも、見つからない。

——ええい、もうこうなりや自棄だ！

俺はそいつをびしっと指差し、引きつった笑顔で言った。

「ど、どうだよ、お前！俺と同じこと、出来るか！？」

人のことばっか傷つけて、実は、自分が傷つくのが、一番恐いんじゃないのか！？

結局、お前は人を傷つけることで自分の弱さを隠してたんだよ！
そうだろうっ！」

ほとんど、あてずっぽうだった。

少年と俺の間に流れる、痛いほどの沈黙。

やがて、少年が呆れたようなため息をつく、と、

「……なんか、萎えた。帰る」

と言った。

そして、くるりと俺たちに背を向け、少年は去っていった。

残されたのは、緊張の糸の切れ端と、傍観者のように見守る星の輝きだけだった。

※

「……本当に大丈夫？ リュウくん」

リリイが、相変わらず杖を片手に治療術をかけながら、俺の顔を心配そうに覗きこんでいた。

俺も相変わらず地面にへたりこみながら、ははは、と力なく笑った。

「平気。もう大丈夫だって。

でも、あーいうことはするもんじゃないな。

説明書に『無闇な自傷行為はおやめください』て書いてあった理由、よく分かるよ。すっげえくるわ」

無理に笑ってみせるが、リリイは笑わなかった。

俺の左腕が、リリイの両手で包み込まれる。

またもや跳ねる俺の心臓。

そして、そっと息を吹きかけるように、リリイは言った。

「お願いだから……。

自分を傷つけること、しないで」

それは、喉からぎゅうつと振り絞るような、掠れた声だった。ずきり、と、今度は胸が痛んだ。

リリイは、目を伏せながら、悲しそうな表情を作った。

「私——この世界に、ああやって人を傷つける為にプレイしている人がいるのを知って、ショックだったけど。」

でも……、咄嗟のことでも、自分の大切な身体傷つけるのを見るのは、もっと嫌だった」

「……ごめん、リリイ」

リリイの震える白い腕を見ながら、俺は咄嗟に頭を下げた。罪悪感が押し寄せてくる。ぐっと唇を結んだ。

嗚呼、俺は本当、何をやっているんだろう……。

「——でも」

リリイはそう呟くと、伏せていた顔を上げた。

その顔には、目に涙を溜めこみながらも、小さな笑顔を咲かせていた。

「ありがとう。最後の、ちょっぴり、格好良かったよ」

リリイの優しい言葉が、今度はふわりと心を包み込んできた。

——『格好良かったよ』、だって……？

慌てて視線を逸らし、右手で頭を掻いた。

「え、いやそんな……あんなの、そんな、全然」

「なんか……まるで『勇者』さんみたい、だったよ」

「え？」

『勇者』の単語に驚き、リリイの顔を見た。

えへへ、いつものようにはにかみながら、恥ずかしげもなく言った。

「本当。ほら、アニメとかでよくあるじゃん。パーマンとか。」

ああいう感じの、ちょっぴり頼もしい男の子」

『勇者』の言葉が、俺の頭の中でエコーを伴って、ぐるぐる回り始める。

かあ、と顔が一気に熱くなって、俺は顔を伏せた。

「俺、別に、そんな大層なもんでもないし、強くもなんともないし。てか、何気に子供じみてて恥ずかしいし、そもそも例えの『パーマン』てのが古すぎるし、いや、そうじゃなくて。

なんつーか、その……」

自分でも意味不明なことを口走っているなあとは思った。でも言葉が上手くまとまらなかった。

リリィが桜色の頬を緩ませる。

そして、もう一度俺の手を、両手で優しく包み込む。

ほのかな体温がじんわりと身体に広がってきて、身体全体を、ふわりと包み込んでくれるようだった。

徐々に血の巡りが乱れてくる。ばくばくと心臓が暴れ出す。

『勇者』さんみたい、だったよ。

そんなことを言われたのは……初めて、だった。

しかも、同じ年の女子に。

熱さと口の渇きで、倒れてしまいそうだった。

そして、本当に、視界がぐるりと回転して――

「あ、あれ？ リュウ、くん？ リュウくん、ね、ねえ！
し、しっかりして、リュウくんーっ！」

俺を呼ぶリリィの声だけが、聞こえてきた。

※

「……はあ」

俺はログアウトして目が覚めてから、さっそく盛大なため息をつく。

ヘッドホンを脱いで、それを机の上に置いた。そして近くに置いてあったタオルで、顔全体の汗を急いで拭きとる。

あ後は結局、リリィが俺の体調を気遣って、そのままお開きということになった。

けれど、未だに汗の量が半端ない。

身体中から、どんどん熱が溢れだしてくる。

ああ、早くシャワーでも浴びよう、と思った。

そういえば。

はたと気付いた俺は、自分で傷つけた左腕をさすってみる。

今ではもう何の痛みもない、傷一つない左腕がある。

——まあ、当たり前前だけど。

「……『勇者』、か」

その言葉を放ち、椅子にぐったりと背を預ける。ぎい、と椅子が悲鳴を上げた。

部屋の天井は、パソコンからの光が漏れている所以外、深い闇に覆われていて何も見えなかった。

ふと窓の外に視線をやると、薄らとした月が、夜空に浮かんでいるのが見えた。

はあ、ともう一度ため息をつきながら目を閉じ、今日のゲーム内での出来事を思い返す。

槍を向けてきた少年。やめて、と叫ぶりリイの声。
腹の底から響いてくる、自分の声。

「俺、ちゃんと、相手に断れてた、よな……?」
今更のように、実感する。

ちゃんと、相手に断れた。
しっかりと、伝えていた。

剣を取り出してあんな行為に走った事実も驚きだったけれど、その事実の方が、俺にとっては衝撃だった。
だって、リアルだったら絶対に、出来ないことだったから。

” なんで、リュウ君はこのゲームを、プレイしているの……? ”

リイのあの台詞が、耳をよぎった。
そして、ハッと気付いた。

——嗚呼。

俺は、理解した。
今なら、その答えが言える気がする。
俺は——

突如、ぴろろろろ、と机が震えだす。

椅子からひっくり返りそうになるのをなんとか堪え、すっかり古くなったスマホを俺は手に取り、画面を確認した。

『メールが到着しています 送信者…野村先輩』

一気に現実に戻される感覚が、全身を襲った。
身体から、体温がすうっと引いていく。

震える自分の指を操作し、メールの中身を表示させた。

『送信者…野村先輩

題…明日

内容…明日の部活前なんだけど、前みたくジュース四つでよろしく。

金は、今までのと合わせて返すから。

あと、部活前の準備も。頼りにしてるよ』

「……は。ははははは」

自然と笑いがこみあげてくる。

手に持っていたそいつを、ベットに向かって投げ捨てる。ぽす、と間の抜けた音。

バカみたいな笑い声が出るたびに、椅子がきいきいと唸る。

——やっぱり、リアルなんて、こんなもんなんだ。

喉に重石が引つかかるのを感じ、口を閉じた。

何かが吐きだされるのを、必死で堪える。

盛大に椅子が悲鳴を上げるのを無視して、天上の一番深い闇の部分を見上げた。

そこは、やはり何も見えない。見えるはずがない。

なあ、リリイ。

俺は、今頃ベットの中で眠りにについているであろう、遠いプレイヤーへ向かって、問いかけていた。

「俺は、ゲームに逃げてるだけなのかな……」

Log 7 タウン↓意気投合する者たちが語り合うカフェ

「おねえさーん、ウチはカシスオレンジでー」

「あ、僕はジントニック」

「あたし、カルピスソーダで！」

「おじさんは普通にコーヒー」

「あたち、日本酒」

「はい、かしこまりました」

あたしたちの注文を全て手元の機械に入力すると、ウェイトレスさんは一礼し、そそくさとカウンターへ向かって歩いて行った。びしっと背筋が伸びて揺るぎのないその後ろ姿を、格好いいなあと思いながら見送っていたら、横から肘で突かれた。

「ちょっとアサ、カルピスソーダはないでしょ。子供すぎい」

金髪の頭を可愛くカールさせ、身体を重厚な鎧に固めた剣士、クル☆ミンがそう言って、にやりと口元を歪ませた。

「えー、んなことないでしょー」ぶすっと頬を膨らませながら反論した。

「あんたいつつもソレばっかじゃーん。

たまにゃ、お酒飲んだらどーよ」

「だってあたし、未成年だもーん」

「ぐはっ」クル☆ミンは、椅子を引きずり、あたしから距離を取る。「いやあ、こんなところで優等生ぶってる子がいるう！」

「べ、べっつに優等生ぶってないし！ ただなんとなく遠慮しちゃうってだけだし！」

あたしが、バン、とテーブルを叩きながら抗議した。

「でも、その心がけは非常に大事だと、僕は思うなあ」

あたしの目の前に座っていたひよろりとした男が、腕組みをしてうんうんと頷きながら、助け舟を出してくれた。

青っぽい髪で細い眼鏡を掛けたその顔は、まさに万人受けの好青年という感じ。

どっかの魔法学校に通っていますと主張してそうな制服を、黒のローブで隠している。

「だよな、さすがエルリック。分かってるわあ」

あたしがエルリックに向けて笑顔で親指を立てると、彼は、ふふふ、と不敵に笑いながら、

「いつか僕と二人きりになった時のために、アルコールはとっておくって寸法なんだよね？」と、さらりと言う。

「……あのさ。いっつも軽々しくナンパ発言すんの、やめてくれない?」

あたしは少し肩を滑らせながらも、軽く睨みつけてやる。あはは、と笑うエルリック。

くう。ナンパなとこがなきゃ、良い男だと思うのに。

「でもな、お嬢さん。人生には、羽目を外しておかないと、後々後悔することもあるんだよ」

エルリックの隣に座る、長い髭を垂らした老人が言った。

えー、と思わず気の抜けた声が出た。

「あ、それ、あたちも思うウ」

今度はテーブルの角に座っている、ちっさな身体に幼稚な顔したミサが、にっぱりと微笑ませながらその小さな手をハイッと挙げた。あたしはそいつら二人を軽く睨みつけた後に、「意味わかんない

っ」と、フンと鼻を鳴らして明後日の方角へ向いた。

※

ここは、ギルドの集会の時など、人が大勢集まる時に使われることが多い、タウンという名の喫茶店。

全体的に樹で造られた建物は、所々に鉢植えが置かれていたり、天井には草の蔓が垂れ下がっていたりと、自然の温もりが感じられる。

あたしは今、ギルド『ラヴあんどピース♪』の集会の為に、ここを訪れていた。

このギルドでは、毎週日曜日にこうした集会が行われ、ギルド内の友好を深めている。

加入者五百人の内、この集会に来るのはいつも五十人ほどしか居ない。辺りを見ても、いつも見かけるメンバーばかり。

まったく、参加しない奴らは何のためにギルドに入っているのか、と疑いたくなる。

そして、がやがやと賑やかな声で埋め尽くされているこのカフェの、一番隅にある五人テーブルに座るあたしたちも、いつも集会に参加している馴染みのメンバーだった。

「人生はな、色んなことを経験したらええんじやよ。

それは何も、ええことばっかでなくとも良い。たまには間違いも犯しながら、一歩ずつ進んでいけばええんじや」

白い髭をさすりながら、じいさんは淡々と説いていく。

でたよ。じいさん自慢の人生論が。

ちなみに、プレイヤー名は、そのまま「じいさん」であったりする。あたしはため息をついた。

「あのさ、間違いを犯すとかそんなんじゃないくてさ、あたしはただ、

カルピスソーダ好きだから頼んだだけじゃん。

なんでそんな展開になるわけ？」

じいさんに軽く指差しながら言うのと、横にいたクル☆ミンが、ガハハ、と愉快に笑った。

「カルピスソーダ好きとか！ やっぱこつどもお！」

「人の嗜好にケチつけんなっ」

あたしがテーブルをもう一度、バン、と叩くと、「まあまあ」とエルリックが苦笑いしながら言った。

「良いじゃん。アサだって、今度から僕とカシスオレンジ頼めばいいだけの話なんだし」

「だから頼まないっちゅーの！ てか、そんなにあたしとお酒飲みたいんかいっ」

ふ、と不敵に笑うエルリック。あたしは大げさに、一步身を引いてやった。

「きやははははっ」横で傍観者のように見ていたミサが、子供のように手を叩きながら笑い声を立てた。

そんな女二人の煩い笑い声に囲まれながら、あたしは、ぐあああ、と頭を抱えた。

でも、皆に見えないところで、思わず笑っていた。

「お待たせいたしました」

頭上から、あのウエイトレスさんの声が聞こえてきた。そして鮮やかな手つきで、あたしたちが頼んだ飲み物をテーブルの片隅に置いていく。

それらをそれぞれ配り終えた後、飲み物を片手に持って、あたしたちは乾杯した。

「いやー、良いねえ。うっまいわあ。さいっこー」

クル☆ミンが、カシスオレンジを一気飲みしながら、ぶはあ、とおやじのように息を吐き出した。

あたしは、カルピスソーダの中に入れたストローをくるくるかき混ぜながら、クル☆ミンににやりと笑いかけた。

「一気飲みなんてしちゃっていいわけー？ アル中になってもしらんぞ」

「ばっかねえ。飲む感覚はあっても、実際に飲んでるわけじゃないんだから。」

『ここ』しか出来ないことなんだから」

「それが癖になって、現実でも同じことしちゃったりしてね」と言っていると、「んなアホなこと、しませーん」とクル☆ミンは陽気に笑った。

ストローに口を咥え、中にある液体を吸い込んだ。口の中に冷たい感覚と甘い香りが広がり、喉を鳴らすと、食道を通る感覚まできちんと伝わってくる。

でも、これは”感覚”だけであって、実際に飲んでいるわけではない。

だって、栄養を補給する作業は、脳だけじゃ出来ないわけだし。実際の身体は、眠りに任せてたまま。

隣で、クル☆ミンとエルリック、じいさんまでもが「カシスオレンジの美味しさ」について議論しているのを横目に、そういえば、とあることを思いだした。

この”感覚”を利用して、「あるダイエット」が一年ぐらい前ほどに流行ったことがあった。

それは、「『ワールド』で食べてる気になって、リアルで実際に食べる量を減らしてしまおう」、なんていう無謀なダイエット。

ネットを通じて瞬く間に広がったその方法は、全国の女子生徒がこぞって試した。

けれど、段々それは酷くなる一方で、ついには「『ワールド』で全部食事済ませた気になって、リアルじゃ一切食事しない」なんて子が急増。

衰弱死寸前までいった子もいて、社会問題にもなったっけ。

一般社会から益々、『ワールド』は「危険なゲーム」というレッテルが貼られた。

最初は「世界初の画期的なゲームで、日本の最先端技術の誇り」、とか嬉しそうに報道していたっていうのに。今じゃ世間的にあまり歓迎されていないだなんて。

ま。最先端の技術と言えども、ここは結局、「ゲーム」の世界でしかないんだから。

と、そこでふと、あたしは思った。

——「ゲーム」の世界。

前に、リアルで松原君に会った時、彼から言われた台詞を思い出してしまった。

” なんて、亀田は『ワールド』をプレイしているんだ？ ”

「なんで、ねえ……」

「あん？ アサ、なんか言った？」

つい言葉に出して呟いてしまった。隣から奇怪な視線を向けられる。

あたしは慌てて、あははと笑いながら手を振った。

「あ。いやごめん。なんでもない」

「てかアサ、あたしらの話聞いてたー？」

カシスオレンジの美味さは、半端ないだからっ」

「そうじゃ。筆紙に尽しがたい味なのじゃ」じいさんは一人、うむうむと頷く。

「僕も、実は昔よく頼んでたんだよねー。なんか、病みつきになるよねえ」不敵に笑いながらこちらを見るエルリック。もちろん無視。三人が口ぐちにそう言った後に、お子様のミサが、「あたちも良

く飲む」なんて口にしながら日本酒を飲んでいる。

だから。何故あたしはいじられなくてはならんのだ。

あたしは「ほっ」といてよねえ」とムスっと言い放った後、頬杖をついた。

——こんな馬鹿なやりとりの中にいながらも、あたしの心は、ふわふわ浮き立っている。

そう。それは、すごく楽しいっていう、なによりの証拠だ。

横からクル☆ミンにしっこく背中を叩かれながら、前にいるエリックが爽やかに笑うのを見ながら。

隣のじいさんがうむうむと一人アホみたいに頷くのを笑いながら、ミサが体格に似合わない飲み物を口につけるのをちよつと馬鹿にしながら。

こんな雰囲気、とても安心しているんだ。

リアルじゃ、きっと嫌な思いしか湧かないっていうのに。

不思議だ。

※

「……ねえ」

カシスオレンジ論争が落ち着いて、テーブルにしばらくの静寂が訪れた後に、あたしは皆に問いかけていた。

「皆は、さ。なんで『ワールド』にハマったの？」

途端に、あたしたちの間だけに濃密な沈黙が降りた。

……え。なんで。

あたし、アホな質問、しちゃった？

きょとんとする皆の顔を伺うように、キョロキョロと視線を往復させた。

やがて、隣から馬鹿笑いが大きく響いた。

「え、なにに。ついに頭までもがカルピスソーダあ？」

「ちよっ。それどーゆう意味！」

あたしがクル☆ミンの肩を思いっきり叩いてやると、「うはっ、やったなコイツう」と叩き返そうとしてきたので、さっと身を引いてかわした。

そんなあたしとクル☆ミンの攻防がしばらく続いた後に、低くて穏やかな声が聞こえた。

「……そりゃ、やっぱり『楽しいから』だろうねえ」

エルリックだった。

人差し指を立てながら、彼は真面目な顔で言う。

「だって、実際に体感しながらオンラインゲームが出来るんだからね。」

まるで、自分が本当にファンタジーな世界に身を置いてるような感覚で、『ここ』に居れるんだし。

僕、人生で一回くらい、魔法使いになりたいと本気で思ってたことがあったんだ。

可笑しな話かも知れど、なんか、嬉しいんだ。

” 実際になれてるんだ ” って気がして

意外にまともな返事が返ってきて、あたしは口を半分開けてぽかんとしてしまった。

隣のクル☆ミンが口に手をあてながら、うししと笑った。

「へー。なんかエルリックって、予想してたより子供お」

そう言われた彼は少し恥ずかしそうに頭を掻きながら、「そうかもね」とはにかんだ。

「でも、あたちも、分かるよお」

びし、と片手を一直線に天井に挙げながら、ミサはにかりと笑った。

「あたち、ぶっちゃけ、子供に戻りたかったんだあ。」

だから、今、すっごい、”子供”に戻れてる気がして、うれちい「……いつも思ってたけどさ、ミサって、実年齢いくつなわけ」

あたしがつい声に出して問うと、ミサは屈託なく笑いながら「それはあ、ひ・み・つう」と言った。

これは、そうとう年を食っている証拠なんだと思う。

「うむ。ならおじさんは、その逆、じゃな」

今度は、じいさんがこくりと頷いた。

けれど、その伏せがちになった目は、なんだか少し寂しそうに見えた。

「おじさんの場合、はよ”老人”になりたかったんじゃないよ。」

——ここだけ話、おじさん、リアルじゃすごく辛いことばかりでなあ。

世の中の正しい動きに従っているだけなのに、あちこちから文句言われたり、叱咤されたり……。

老人なら、そんな社会の縛りから或る程度抜け出せるし、自由に振る舞えると思った。

だから、キャラ選択の時も、ついこの年齢にしたわけなんだが……」

そこまで言っ、て、じいさんはそのしわくちな顔を、更にくしゃくしゃにさせた。

「『ここ』はええなあ。」

自分の好きなように振る舞えるし、リアルと違って、周りから特別に制約されることもない。

ホントに、自由で安心するわい」

「……そう、だね」

じいさんのゆったりとした言葉を心にしまいこみながら、あたしはゆっくりと頷いた。

——自由で、安心出来る。

それは、あたしも同じなのかもしれない。

「ふーん。なんか、それなりに事情ってやつがあるもんなんだねえ。たかがゲームなのに」

クル☆ミンはそんなことを言い放ち、頬杖をつきながら、グラスに少しだけ残っていたカシスオレンジをぐいっと飲みこんだ。

「そういうあんたはどーなのよ」

ちよっとだけむっとしながら、カシスオレンジ女に問いかけてやると、その顔面がにやり、と歪んだ。

「え？ そんなの、決まってんじゃない。

ただの暇つぶし」

「あそ」

盛大にため息をついてやると、「なんだその反応ー！」とクル☆ミンにばかりと叩かれた。

「なにをお！」あたしが、やりかえそうと席を立った時だった。

マイクを通したようなエコーのかかった声が、カフェ内に響いた。

「ギルド『ラヴあんどピース♪』のみなさーん。

時間になりましたので、席替えしましゅーう」

ギルドリーダーの声だった。

それを合図に、カフェ内にいたギルドメンバーが、一斉に席を立った。

Log 8 『自分だけは偉いんだぞ』みたいなオーラ

それから、二回ほど席替えをした。

入れ替わるギルドメンバーと一緒に馬鹿騒ぎをしたり、時には腕相撲なんかしたりして。

あたしは、これでもかと腹を抱えて笑い転げた。

それこそ、一週間分の笑いを吐き出すくらいに。

けれど、こういう楽しい時間というのは、気付けばすぐに経ってしまうというのが、すごく虚しい。

ふと気付いてリアルの時刻を見れば、三時間が経とうとしていた。その後、ギルドリーダーが「お開きにしましょう」と叫びだす。

最後にテーブルで一緒になったメンバーに、軽くお別れの挨拶をする。また会おうね、なんてお決まりの台詞を言いつつ。

そしてあたしがタウンを出ようと、カフェの出入り口にあるワープ装置に向かおうとした時だった。

あのカシスオレンジ女―クル☆ミンが、背後から抱きついてきた。

あたしは驚いて、「離せー」なんて抗議したけど、クル☆ミンはきやあきやあはしやいで、離さなかった。

ついにアルコールでおかしくなったのかコイツ、と思ったら、つい吹きだしてしまった。

彼女とは、あたしがこのギルドに入った時、一番初めに知り合った子で、よく一緒にお喋りしていた。同じ年ということもあって、すごく親近感もある。

ねえ今度一緒に依頼やろうよー、と言ってきたので、あたしは、仕方ないなあそこまで言うなら付き合ってやるよー、なんて笑いながら言い返した。

よっしゃあ、と喜ぶクル☆ミンに、馬鹿みたい、と私はまたお腹を抱えた。

そしてタウンから転送する際に、こちらに向かって大きく手をふるクル☆ミンに向かって、あたしも大きく手を振り返した。

――彼女が、リアルでも近くに居てくれたらいいのに。

別れ際に、あたしの脳裏に何度も巡ってしまう、この思い。その度に、頭を強く振る。そんなの、ありえない。それでも、あたしはやっぱ、思ってしまう。

リアルでも、こんな楽しい時間があればいいのに。

※

きーんこーん、と今日一日の授業の終わりを告げる鐘が、教室中に響き渡る。

日直の合図で、恒例儀式のようにクラスメイト全員が起立。適当に礼をしながら、どたどたと座る。

途端、むわっとした熱気が私の体中にまわりついてきた。あたしは急いで机に置いてあるハンドタオルを取って、眼鏡を机の上に置き顔の汗を拭った。

睨みつけるように窓の外を見やれば、そこには鬱陶しいぐらいの鮮やかな蒼が広がっている。

最近の学校は、最近気温がぐんぐん上がって行って、息苦しい。しかも、この教室の場合、三分の二ぐらいが筋肉の盛った男子が占拠しているから、余計にむさ苦しい。

理系だから男子が多いのは仕方ないとしても、体育会系男子ばかりのクラスに当たったというのは、本当についてないと思う。

ざわつき始めた教室に散らばる筋肉男たちを見渡しながら、あたしはため息をついた。

まあとりあえず、担任が姿を現す前に課題となっている問題集を少しでもこなしておこう。

電子パッドを仕舞い、掌サイズのノートパソコンを鞆の奥から取り出す。

眼鏡を掛け直し、さっそくノーパソの電源を入れ、問題集のソフトを立ち上げた。

えっと。今日の課題は二十八番だっけ、と思い出しながら、あたしは画面に表示された数字の羅列から、「28」と書かれたボタンをクリックした。

と、その時だった。

教壇方面から、ばん、と大きな音が聞こえてきた。

「さあてさて、皆さん！ お知らせです！

もう御存知かもしれませんが、もうすぐ、大事な大事なイベントがあります！

さて。それは一体、なんなのでしょーか！」

一人の男子が、喜々とした様子で教壇に立っている。

半袖からのぞく、強靱な筋肉を誇る黒い腕が、みきつと盛り上がった。

うわ。キモチワルイ。

あたしはすぐにそいつから目を逸らし、再度、はあと盛大にため息をついた。

別の男子が、教室の後ろから「はい！」と大きな声を上げて立ち

上がり、教壇に立つ男子へびしっと指差しながら言った。

「それは……『夏の球技大会』です！」

「そのとおり！」

ばしん、と背後にある白い電子黒板を叩きながら、教壇の男子が吠えた。

「この夏の球技大会！ 俺たちのクラスは、なんとしてもトップを目指さなきゃならない！」

何故なら！ この大会で稼げるポイント数は、絶大だからである！

ざわり、と教室の半分くらいが、その熱気に動かされた。それらはほぼ、例の体育会系の男子であるわけだけど。

あたしの学校では、何故かイベントの成績ごとに、クラス単位でポイントが付加される制度がある。

その累計でクラスごとに争い、三学期の終わり頃、朝会で学年三位までが表彰される。

入賞したクラスには、図書券みたいなささやかな景品もある。

——まあ、どうだって良いんだけど。面倒臭いし。

あたしはとにかく、手元にあるノーパソに表示されている、数学の問題を解き始めた。

けれど、いくら問題に集中しようとしても、教卓の男子が放つ低くて地の通った声が、あたしの脳内に殴りこむようにして入ってくる。

「いいか！ 俺たちのクラスは、なんとしてでも！ 理系ナンバーワン、いや、学年ナンバーワンを目指さなければならぬ！」

分かったか、諸君！特にヤル気のなさそうな女子！

お前らも俺らと同じチームメイトなのだから、全力で大会に打ち込むように！」

背後から、十人程度の女子たちが一斉に、「えー」と面倒くさそうな声を上げるのが聞こえた。

続いて、ばしん、と教壇を叩くようなでかい音が教室に響く。どすんと重い響きが、お腹にまで伝わってくる。

……ああ、マジで耳栓が欲しい。

「『えー』、じゃない！これは俺たちクラスの命運がかかっているんだぞ！嫌でも全力投球してもらおう！

というわけだから！今から、球技大会でどの球技をするか決めたいと思う！

まずは男子諸君、前に集まれ！誰がどの競技に適任か、協議するぞ！」

どたどたと床を行進しながら前へと移動していく複数の足が、床を振動させていく。椅子や足の裏が、小刻みに震える。

ああ、お願いだから、静かにしてよっ！

つい、キーボードを打ちこむ手に力が入りすぎてしまい、全く違う答えが画面に入力されてしまった。

ちっ、と思わず舌打ちする。

急いでクリアキーで消し、正しい答えを打ち込んだ。

「……嫌だよね。

うちの理系クラスだけ、こんなに体育会系男子が集まっちゃってさあ」

「ホント。こういう行事の時だけ、めっちゃ張り切りだすんだもん。むさくるしいし、なんか嫌あ」

「だよねえ。ウチ、こういう行事好きじゃないんだけどなあ」
「私もー。暑いしだるいしやってらんないー」

背後から、複数の女子生徒が、ひそひそと話合うのが聞こえてきた。

その言葉、直接あいつらに言ってやってよ。
そう思いながら、あたしは目の前の問題に、意識を傾ける。

答えを入力すると、ぴこん、と正解を告げる音が鳴った。間をおかずに、次の問題が表示されていく。
あたしはその作業を、機械のように淡々とこなす。余計なことは、なるべく考えないように。

「ねえ、亀田さん。
そう思わない？」

ふいに、女子の一人に問いかけられた。
ぴくりと、手を止めた。

「ああいうの、男子だけで盛り上がってほしいって感じだよねえ」
あたしは振り向かず、画面左上にちょこんと表示されている数字を見た。

「15」から「14」、そして「13」と、刻々と減っていく。
問題を解く制限時間だった。

それを睨みつけながら、あたしは言った。

「――どうでもいい」

だよねー、と別の女子から声が上がった。
「どーでもいいよねえ。」

あーあ、マジやってらんないって感じ」

「ホントホント。やる気なんて全然出てこないってーの」

数字が「8」になった。女子たちの黄色い笑い声が、耳をつんざく。

胃の辺りが、段々とむかむかしてくるのを感じた。

「ねえねえ、こうなったらいつそさ、うちら女子だけで適当にチーム組んで、適当に球技大会終わらせない？」

「あ、それいいかもー」

「ついでだからさ、うちのクラスの女子だけで結束しちゃおうよ」
「うわ、何ソレいいねえ」

数字が「3」に変わり、赤く変色する。時間がないよ。そう知らせている。

「ねー、亀田さんも一緒にどうよ？」

「あ、それ良いんじゃないー？」

あははは。背後で、勝手に盛り上がる女子たち。

あたしは、目の前の問題を睨みつける。

この問題の答えは、もう分かっている。でも、打ち込まなかった。違う——打ち込めなかった。

胃のむかむかが手の先にまで伝播して、ガタガタと大きく震えてきたからだった。

一文字に結んだ口の中で、舌を思いっきり噛んだ。

お願いだから。

あたしに、関わらないで。

「ねえ亀田さん。ちょっとお、聞こえてた——」

女子の誰かが、そう発言した瞬間。

あたしは、大きな音を立てて立ち上がった。

ガタリ、と爽快なほど大きな音が教室中に響き渡る。

教壇付近で協議していた男子たちが、一斉にこちらを見たのが分かった。

あたしは、作業していたノーパーソを閉じ、黙々と鞆に仕舞う。足で適当に、椅子を机の中に戻す。

「あの……、亀田、さん？」

最初に意気揚々と騒ぎ立てていた筋肉男子が弱々しく声を掛けてきた。あたしはキッと睨みつけた。ひっ、と短く悲鳴を上げて、そいつは身を縮めた。

そいつを横目に流しながら、教室のドアまで真っ直ぐに歩き、その取っ手に手を掛けた時だった。

「ちょっと待てよ」

ぐいっと、思いつきり肩を掴まれた。

あたしは、左手にある鞆の取っ手を強く握りしめながら、振り返った。

鬼の形相でこちらを見る、金髪的女子が居た。

「あんた、どこ行く気」

真っ直ぐに、あたしを睨みつけながら凜とした声で言い放つ女子。

その声は、一気に静かになった教室に鋭く響く。

その声の感じからして、一番始めにあたしに話しかけてきた女子だな、と思った。

あたしは、窓の外を軽く睨みつけながら言った。

「どこだって良いじゃん」

「はあ？」ぐっ、とその手が肩に強く食い込んでくる。「良くねえんだよ。テメえ、人がせっかく誘ってやってんのに。あっさりシカトしやがって」

「ちよっとお、やめなよ香奈あ」

近くにいた女子が、わざとらしいような甘い声を出した。

あたしは、香奈と呼ばれた目の前の女子の制服を、睨みつけた。

「香奈」の名前があるクラスメイトは——確か、伊藤香奈だったか。

このクラスの女子の中で、ボス的な存在だったように思う。

「……じゃあ、あたし、興味ないから。放ってもらって良いよ」

棒読みでそう言って、肩に掴まれている手をどけようとした。

そしたら今度は、その払おうとした右手首を、ぐっと掴まれた。

先ほどよりも強い力だったので、思わず顔をしかめた。

「一体、何様きどってるつもり？」

鼻と口の先から、どす黒い声が飛んでくる。

それはあたしの鼓膜を、激しく揺さぶる。

「テメえさ、四月の時からそうだよな。」

なんか、『自分だけは偉いんだぞ』みたいなオーラ放ってて、あたしらのこと全然引きつけないっていうか。

一人で行動して格好良いとか、痛いこと思っちゃってるわけえ？はっ、傑作だわ。

あんたのさ、そういうところ、見ててすっげえムカついてたんだけど」

教壇付近にいた男子の一人が、「あの……」と声を掛けた。

瞬間、伊藤香奈が「うっさい!!」と叫ぶ。声を掛けたそいつは竦み上がって、身を更に縮こませる。

そいつを横目に見ながら、あたしはつい、鼻で笑ってしまった。

「——そういう風に見えた？」

「……テメえ」

ぎりぎりと言が聞こえそうなほどに、相手の手があたしの手に食い込んでくる。

痛みで引きつりそうになる顔をなんとか保ちながら、あたしは足で踏ん張った。

こちらにも負けじと、眼鏡のレンズを通してそいつの顔を睨みつけたが、場違いなぐらい陽気な陽の光を背後に受けている伊藤香奈の顔は、全体が大きな影に隠れていた。

そのデコボコな形だけが、浮き彫りにされている。

そして、その黒く塗りつぶれながら不気味に光る唇が、動いた。

「そんなに、一人になりてえのかよ。

だったら、一生一人でいればいいよ」

真っ黒な凹凸がそう言葉を発した瞬間。

心の底から、真っ赤に燃えたぎる何かが、ぶわ、と湧きあがった。あたしは、思いつきりそいつの手を振りほどいた。ばちん、と鋭く響く音。黒く塗りつぶされた顔を、これでもかと睨みつけた。

相手が突っ掛かってくる前に、あたしは鞆を抱え、ドアを思いっきり開け放って教室を飛び出した。

後ろ手に思いつきり締めたドアの、ピシヤリ、と鳴る音はとても

清々しかった。

背後から、「うぜえんだよテメえ」と投げ捨てるような声が聞こえてくる。

もちろん聞かなかったふりをして、あたしは廊下を歩きだす。ばくばくと唸る心臓を抱え込みながら。

※

いつも、こうだった。

中学二年の時、友達だと思っていた子たちから、軽いイジメを受けた時から。

それ以来、あたしは人と安易に繋がることを避けた。避け続けた。ただ、例外が一人、いたけれど。

でも、結局はその例外だと思っていた子にも、見放されてしまった。

それ以降も、あたしはずっと、人を避け続けた。すると逆に、一人の方が居心地が良いと感じるようになっていた。

自然に、周りに誰も近づかせないオーラを発するようになっていた。やがて、周りの生徒たちが嫌に思えて、仕方なくなった。

辛かったのは、最初だけだ。

今じゃ、別にどうでもいい出来事として処理できる。

『ワールド』に、出会ってから。

そこでは、あたしは自由に振る舞うことが出来るから。ネット上の、プレイヤー名だけしか知らない仲間とだけ通じあっ

て楽しく過ごすことで、リアルのことなんか、忘れることが出来るから。

それが、あたしの唯一の救いだ、と思っている。

両手で鞆を抱え、あたしは一人、階段を上って図書館へと向かった。

陽がてっぺんから差し込む廊下を渡り、突き当りにある図書館の扉に手をかけた時に、

「馬鹿みたい」

と、眩きが漏れた。

それは誰に対してなのか、自分でもよく分からなかった。

Log 9 ダンジョン↓淡いオレンジ色を放つ夕日を渡る橋

図書館に着いたのはいいけれど、結局集中出来なかったあたしは、『ワールド』へ行こうと決めた。

周囲の目につかない奥側の席へとこっそり移り、鞆の奥にしこませていた『ワールド』専用ヘッドホンを取り出し、装着する。

ノーパソに『ワールド』のログイン画面を表示させたまま、その蓋を閉じた。

掛けていた眼鏡をケースに入れ、鞆に仕舞う。

そしてあたしは、机の上に組んだ腕の中へ頭を埋め、まるで居眠りしているかのような態勢を作りながら。

その意識を、ゆっくりと『ワールド』内へと沈めていった。

※

目を開けると、いつものように、入り口の街へと転送されていた。その腕に垂れさがる振袖の感覚を確かめる。ふう、と思わずため息が出た。

あたしは確かに今、『ワールド』に居る。

さて、ではいつも通り、電光掲示板でも覗いてくるか。そう思い、広場に向かってあたしは歩き出した。

その掲示板の前でさっそく、あたしは一人で立ち尽くすリュウを見つけた。

そんな偶然に喜んで、つい、「リュウー」と手を振りながら呼びかけ、そのまま近寄っていった。

リュウがその身に纏っている白いマントをひらりと翻しながらこ

ちらに顔を向けた。すると、戸惑ったような表情を彼は作った。

そこで、あたしはハッと気付いた。

前にリアルで会った時、なんか気まずいような雰囲気になってたんだった。

——体育館近くで、会話をした時だ。

そんなつもりはなかったのに、きごちない雰囲気を作ってしまった、あの時。

ホントは優しい言葉をかけて、「辛い時は言ってもいいんだよ」って、言いたかったのに。

でも、リアルのあたしじゃ、上手く言えなくて。

つい、いつもみたいに、ぶっきらぼうになってしまつて。

それを思い出したら、つい先ほど教室で伊藤香奈と揉めたことが、頭の中をよぎった。

——そんなに、一人になりてえのかよ。

だったら、一生一人でいればいいよ。

その言葉がナイフとなって、あたしの心を切り刻んでいく。思わずあたしは立ち止り、胸を抱えた。

どくどくと、不気味なぐらい大きな音を立てているのが、手から伝わってくる。息が苦しくなる。

……いけない。それは、リアルの話だ。

ここは、『ワールド』の中。

関係、ないじゃない。

ぶんぶんと思いつき頭をふって、あたしは何事もなかったかのようにニコリと笑いかけ、戸惑うリュウに話しかけた。

「今日はインすんの早いんだね」と。

しばらくしてから、リュウも緊張の糸を解いてくれて、「今日は、部活の顧問が休んだから早く帰れたんだ」と教えてくれた。

今から一人で依頼でもすんの？ と聞くと、ああ、と頷いたリュウに、あたしは即、一緒にパーティ組まない？ と口に出していた。

少し驚いた表情になって、リュウは、遠慮がちに頭を掻いた。

あ。もしかしたら、断られるかも？

あたしがそう思った後、彼はゆっくりと苦笑した。

「アサって、ホント、突然突っ掛かってくるよな」と。

そして、「一緒に行こうぜ」と言ってくれたリュウの言葉が、あたしの心を、きゅんと跳ねあがらせた。

※

ダンジョン↓淡いオレンジ色を放つ夕陽を渡る橋

「にしたって、ここの橋渡る時って、あまり良い気分じゃないよな」「ん？ そう？」

人一人通るのがやっとな吊り橋をゆっくりと渡りながら、前を行くリュウが言った。

足を一步踏み出す度に、ぎい、ぎいと音を立てて吊り橋が揺れる。向こう岸までは、まだ半分ぐらいある。

「でも、ここのダンジョン選んだの、リュウでしょ」

「そりゃ……まあ、そうなんだけど。」

たまたま、簡単そうな依頼の場所がこのダンジョンだったんだよ」あたしは足元を見た。遥か下の方で、崖に挟まれながら流れる細い川は、ごうごうと音を立てて勢いよく流れている。

空で宙ぶらりんにぶらさがっている夕陽の色を、淡く映しだしながら。

視線を前に戻すと、その夕陽に照らされて半分がオレンジに染まっているリュウが、おっかなびっくりといった様子で一步一步進んでいる。

あたしはつい、吹きだした。

「もしかしてリュウって、高所恐怖症とか？」

「うっ。それは……」と言いかけて、口を噤んでしまうリュウ。

その様子がなんだか可笑しくなって、あたしはわざと、橋を揺らしてあげた。

「おいっ！」とものすごい形相でリュウが振り向いてきたので、あたしは、あはは、と声を出して笑った。

オレンジ色に染まる周りの景色は、なんだか少しだけ、眩しく見えた。

「……ところで、『祭壇』までこの道で合ってたっけ」

向こう岸にたどり着くと、リュウはマップを目の前に表示させ、まじまじとそれを見つめた。

あたしも、目の前にマップウインドウを表示させた。

今回のあたしたちの依頼は、『目的のアイテムを祭壇にささげよ』。

目的のアイテムは既にリュウが手に入れていたので、あとは祭壇を見つけて、それを置いていくだけ。

その祭壇は、依頼を受けたものにしか見えないシンボルとして、このダンジョンのどこかに設置される。

ただ届けるだけ、と考えれば簡単なんだけど。
ダンジョンの構図が、それを許してはくれない。

「むー……。多分、この先右」あたしは言った。

「でも、それ遠回りだろ？」

この左の橋渡って、右、右、上、左じゃないか？」

「えー？ 違うってば。」

ほら良くみてよ、小さいけどここに橋掛かってるじゃんか。こっち行ったらほうが近道だよ」

このダンジョンは、いくつかの橋が複数の崖を複雑に繋げている構図。

だから、目的地までの道順をしっかりと把握しておかないと、最悪行き止まりにぶち当たったりして、結構手間取ってしまう。

「ああ、そうか。じゃあこっちで良いのか」リュウが納得したように頷いた。

「そうそう」チラ、とリュウを見て、「ま、でも別に、橋を沢山歩きたいのなら、左行ってもいいけどねー」

「や。右行こう右」

きっぱりと言い切ったリュウに向かって、あたしはうししと笑った。

ほっとけ、と言いたそうにリュウがそっぽを向いた。

「そういや、さっきからモンスター全然出てこないね」

あたしは、マップ表示を仕舞いながら、ぐるりとダンジョンを見回した。

確か、普通なら各崖の上で何体か出現してくるようなものだけだ。ど。

「そういや、そうだな。」

こういう依頼の時は、出てこない仕組みなんじゃないか？」

「うーん。……それか、何か仕組みがあったりしてね。」

例えば、一匹だけ巨大なヤツを最後にしこませておくとか、帰ろうとしたときに襲ってくる、とかさ」

なんだよそれ、とリュウが笑いながら突っ込んだ。
冗談だって、とあたしはまた笑った。

そんな調子で、二人で雑談しながら進んでいた時。
頭上から、ぴこん、と音が鳴った。

あたしとリュウは、同時に歩みを止めた。

「お、と。ようやく目的地に着いたみたいだな」

「ホントだ」

あたしたちは、ちょうど最後の橋を渡り終え、終点の崖の上へと立っていた。

崖の先端には、四角いコンクリートの塊が一つ。

リュウが、ふう、と額の汗をぬぐった。

「あれが祭壇っばいな」

「ふーん……。なんか、思ってたよりシンプルだね」

「だな」

二人で顔を見合せながら、そんな率直な感想を言い合った。

四角いコンクリートは冷たい光を辺りに漂わせていて、その中央には「これは祭壇です」と、御丁寧にも字が彫り込まれていた。

変なの、と笑いあいながら、あたしが一步足を踏み出した時だった。

※

一瞬にして、崖の周りが光の壁で覆われた。

それと同時に、小さなヒヨコがどこからともなく、わんさかと湧いてきた。

「ちょ、何これ！」あたしは思わず叫んだ。

「……どうやら、アサの言ってたからくりって、こういうことだっ

たみたいだな」

隣のリュウは既に剣を構えていて、ヒヨコたちを見据えていた。

「ちょ……。何それ。冗談だったのに……」

何なのよ、この面倒臭い展開。

ちよつと嫌気がさしながらも、脳内でこの子たちのステータスを表示するように指令を出す。

見ると、レベルは三十。弱点は特になし。

まあ、平均的な中雑魚と言ったところ、かな。数は、ざっとみて五十匹ほど。

ヒヨコたちは、頭に触角みたいなものが生えていて、目がぎらぎらと輝いていた。

でも、毛がふさふさで、触ると柔らかそうだなあなんて想像すると、ちよつとキュンとしてしまった。

「広範囲で一気に仕掛けたほうが良いな。

アサ、バックアップ頼むよ」

剣を一薙ぎしながら、リュウはそう言った。

そして彼が飛び出してしまう前に、あたしは「待って!」と引きとめた。

「あたしも参戦する!」

目を丸くしながらこちらを見るリュウに向かって、あたしはちろりと舌を出した。

「あたしだって、広範囲攻撃出来るんだし。

それに二人で突っ込んだ方が早いっしょ」

「でも、弓矢の職業って防御力低いんじゃない……」

その言葉に、ちよつとむっときた。

「馬鹿にしないでよねえ! レベル、こっちのが上なんだし! あ

たしの実力、なめてるでしよう！」

と話している間にも、ヒヨコたちはこちらに向かって距離を縮めてくる。

あたしは、その子達をキッと睨みつけた。

「見ててよねえ！」

いけえ、私の必殺奥義！」

あたしは上空に向かって、光を纏った矢を発射する。

ある一定の高さに辿りついた時、それは強い光を発する。

そして複数に分裂した後に地上に降り注がれ、そこに溢れるヒヨコたちを確実に仕留めていく。

隣でリュウが、「おお」と漏らすのが聞こえた。へへん、とあたしは威張ってみせた。

「状態異常技が豊富だけが、弓矢使いの特権だと思わないでよ？ 距離を一定に保ったまま、広範囲攻撃だって出来るんだから」すると、ふ、と笑みをこぼしたリュウ。

そして、「そういうことなら」と言いながら、リュウは一步踏み出し、あたしの背後に向かって剣を振るった。

驚いて背後を見ると、そこでヒヨコ三匹が消えていくところだった。――いつの間に。

「俺がアサをバックアップする。その間、アサは広範囲攻撃を仕掛ければ良い。」

それで、文句ないだろ？」

ニつと笑いかけるリュウに、あたしの心臓が十センチくらいとび跳ねた。

……ううん、十センチなんてもんじゃない。

あの夕陽に届くぐらいとび跳ねたといっても、過言じゃない気が

した。

どきんと高鳴る心臓の前で、弓を持った手を握り締めながら、あたしは笑顔で頷いた。

「うん、オーケー！」

それからしばらく、あたしとリュウの二人の攻撃は続いた。

あたしは上空に向かって矢を放つ。リュウはあたしの周りで、華麗に舞いながらヒヨコたちを薙いでいく。

一気に消えていくヒヨコたちはなんだか可哀想に思えたけど、清々しいのも確かだった。

すぐ隣には、リュウがいる。

そう思うと、ドキドキが止まらなくなる。頭がぼうつとして熱くなる。

そういえば、こんなふう二人でパーティ組んで依頼やるなんて、久しぶりだなあと思った。

一年の時、以来だった。

良かった、とあたしは思った。

彼と一緒に、冒険出来て。

去年——図書委員で同じになった時、思わずあたしの『ワールド』アドレスを教えてしまった動機が、今ならはっきりと分かる。

一目見かけた時から気になっていたリュウに——松原君に、知ってほしかったんだ。

あたしの、本当の姿を。

※

あたしが矢を放つと、最後の一匹が消滅していった。
崖を取り囲んでいた光の壁も同時に消えて、残されたのはあの簡素な祭壇のみになった。

「はあ……やっと終わったあ」あたしは、思いつきり肩をぐるぐると回した。

「お、結構経験値はいったな」リュウは、変化ステータスを見て嬉しそうに言った。

リュウは、そのまま祭壇の方へ歩いて行って、手に現れたアイテムをその上に乗せた。

ぴこーん、と間の抜けた音が聞こえてきた。

続いて、『イライ、クリア、オメデトウ』と機械の声。

「よっし。これで依頼達成だな」

「うん！」

久しぶりに二人でモンスター退治出来た嬉しさと高揚感で、なんだか気持ちがとつても軽くなった。

ふわふわとどこかへ飛んでいっちゃいそうだった。顔が思わずにやけてしまう。

「ねえリュウ。掌、出して」

あたしは、リュウが不思議そうに差し出してきた手に、ぱん、と思いつきり手を打ちたたいてあげた。

リュウは「いってえ！」と叫んで両手をばたばたと振りまわした。

あたしはそれを見て、くの字に身体を曲げて思いつき笑い転じた。

「おまつ……やるならもうちょっと手加減しろよっ」

「はははっ、だって普通にやったら面白くないと思って」

「なんだよそれっ」

お腹を抱えながら、あたしは笑い声を立て続けた。

そしたらリュウも、諦めたように笑い始めた。

二人分の笑い声が、夕空に響いた。

しばらくして。

リュウが静かに、「なあ」と呼びかけてきた。

ん？　　と言いながら、あたしはそちらへ視線をやる。

リュウは少しだけ、躊躇いがちな笑顔を作っていた。

そして、言った。

「お前、リアルでもそうして明るくしてればいいのに」

——どくん。

心臓が今までと違う方向に跳ねて、あたしの顔が途端に引き攣るのを感じた。

そんなあたしの変化を察知してか、リュウが咄嗟に視線を逸らし、頭を掻きながら慌てて言った。

「あ、いや、なんというか……」

俺も、人のことあんま言えた立場じゃないんだけど。
でも……すぐもったいないなって、思ったんだ」

あたしは、ごつごつとした地面を見つめながら、黙り込む。
地面の先に、鎧のブーツを履いたリュウの足があった。

「なんつーか……」

こっちにいる『亀田』のほうで、すごく生き生きしてるっていうか。

すごく楽しそう、ていうか」

ぎゅっ。

両手の拳を、思いっきり握りしめた。

かちやり、と、リュウが一步、こちらに近づいてくる。

「――いや、ごめん。悪かった。なんか急に、変なこと言って。

俺だって、お前の気持ち、分からなくもない――ていうかなんとか
なく分かるけど」

心臓が途端に、どくどくと不穏な音を立てて、冷たくなった血が
全身を駆け巡っていく。

足が、がくがくと震えて動かない。

また一步、リュウが近づいてくる。

ヤメテ。

あたしは心の中で叫んだ。

あたしに、近寄って来ないで――

そして。
リュウは、言った。

「俺、『ワールド』にいるアサの方が、好きだから」

あたしの中の時が、一瞬にして止まった。

心臓もストップしてしまったかのようで、息が出来なくなる。
思わず顔を上げて、リュウのことを直視した。

しばらく経ってから、リュウがハッと気付いた様子で、「あ」と
呟いた。

かあああ、とその顔が徐々に紅葉していく。

「あ——あ、いや！

その、す、『好き』って、そ、そういう意味じゃなくて……」

なんて言って、あたふたと慌てだし、不思議な動きを繰り返す目の前のリュウ。

あたしの頭の中が、途端にふわりと浮きあがり出した。
凍りついた心臓が、とくん、と優しく脈を打ち始める。
まるで適度なぬるま湯につかっているような安心感が、あたしの
身体を包み込んでいく。

——嗚呼。

あたしは。

思わず、唇にそっと手をあて、くすりと笑った。

「……何言っちゃってんだか」

「へ？」

くるり、とリュウに背を向けた。

不思議なくらい、その動きはとても軽かった。

さっきまでの足の震えは、すっかりどこかへ飛んで、消えていた。宙に浮かんでいる柔らかな夕陽を眩しく見つめながら、あたしは言った。

「――ありがとね、リュウ」

「……アサ」

あたしは、先ほど渡ってきた吊り橋へ向かって、ゆっくりと歩き出した。

スキップしてしまいそうにはやる気持ちをなんとか宥めながら、歌うように言った。

「さあほら。早くタウンに行って、報酬もらってきなよ。」

あ、報酬は全部リュウが持っていていいよ。あたしは、リュウと一緒にバトル出来ただけで、十分だしさ。

さてと。もう疲れたから、あたし、先にワープ装置行ってアウトするね。

帰り、吊り橋渡る時に気をつけなよー。あまりビビリすぎて、落ちないようにさ。

また、機会あったら一緒にパーティ組もうよ。そっちから誘ってくれて、全然良いから。

そんじゃね」

それだけ一気に言うと、あたしは振り向かず、一気に吊り橋を駆け抜けた。

目の前で、指標のように優しく輝く夕陽を見つめながら。

※

目が覚めた瞬間に、あたしはバツと顔を上げて周囲を見た。

若干薄暗くなった図書館の周辺には誰もおらず、カウンターに座っている委員の子の姿を遠くで確認すると、大人しく本を読んでいた。

あたしは、素早くヘッドホンを外して鞆に仕舞い、ノーパソの電源を落とした。

ほうっと、柔らかな溜息が洩れた。

「――好き」

その言葉を、自然と口にしていた。

急に恥ずかしくなってきた、あたしは熱の上がった両頬を、慌てて両手で包み込んだ。

――好き。

確かに、リュウが――松原君が、そう言ってくれた。

心臓が、とくんととくんとさつきより早いリズムを打ちながら、あたしの浮いた気持ちをコロコロと転がす。

「……うはあ」

気持ちは今にもはち切れてしまいそうで、あたしはまた机の上で腕を組んで、その中にすぽっと顔を埋めた。

――好き。

何度も、何度も、その言葉だけがあたしの脳内に響いてきて。

たった一言の呪文に、あたしはすうつと身体が楽になるのを感じて。

そして。

あたしは、自分の腕の中で、

ひっそりと、泣いた。

Log 10 一番恨むべきなのは、自分

翌日、あたしはいつもより十分ほど遅く起きて、朝食もそこそこに家を出た。

学校へ行く足は若干重かった。でも、心だけはちよつとだけ浮いている。そんな奇妙な感覚を抱えながら、校門を抜けていく。

そして、靴箱で自分のスリッパを手にとった途端、これからクラスに向かうのだ、と気付いてしまった。

浮いた気持ちだが、ずうんと沈んでいくのが分かった。

それは、あの女と――伊藤香奈と、嫌でも顔を会わせなければならないことだから。

まあ、存在丸ごと無視して、一日を過ごせばいいだけだ。いつものように。

でも、そう思って心を真っ黒に塗りつぶそうとする時に、昨日のリユウの台詞が蘇ってきて、待ったをかける。

『お前、リアルでもそうして明るくしてればいいのに』
『俺、『ワールド』にいるアサの方が、好きだから』

その度に、あたしはいちいち動きを止めてしまう。
どくん、と心臓が大きく脈拍を打つ。

――リアルでも、明るく。

それは、あたしが昔、強く願っていたことだった。
でも。

高校になって、中学三年の時にずっと傍にいてくれた例外と――由梨と別々のクラスになったことに失望し、この状況に慣れてきてからは一切考えてこなかった。

新しい世界である『ワールド』で、楽しく過ごせればそれで良いと思ってきたから。

けれど。

本当に、あたしは「それで良い」と、思ってきたのだろうか。

履いていたローファーを適当に靴箱に突っ込み、スリッパを足に引っ掛けながら、廊下を渡っていく。

そこに響く「おはよー」の合唱を耳にしながら、あたしは自分のクラスへ向かい、ゆっくりと歩いていった。

そっと目を閉じて、心の奥を覗いていく。

そこに一つ、鍵がかけられたまま固く閉ざされている扉を見つけた。

それは、何をしても動かないぞいう、強い気配を見せながら。

あたしはそれを――その扉の中に眠っている”思い”を、多分、知っている。

知っているけれど、ずっと気付かないようにして、今まで過ごしてきたのかもしれない。

ゆっくりと、階段を一步一步踏み出していく。

すると、あたしの横をやるちゃんな声を上げながら女子生徒が駆け下りていった。

足を止め、その子を見送る。

階段を降りた彼女は、廊下で待っていた一人の女子に向かって、子供みたいに抱きついた。

抱きつかれた子は、なによお、なんて言い合いながらきゅきゅ

とはしゃいでいる。

いつもなら、無視していた光景だった。

でも、今は少しだけ、彼女たちが眩しく見えた。

いつかの時の、あたしとクル☆ミンみたいだ。

階段の手すりを、ぎゅっと握りしめた。

今なら。

今なら、心の奥にあるその扉を、そっと開けられるような気がした。

でも、覗いてしまうのが、恐くもあった。

それと同時に、きっと、自分自身が崩れてしまいそうな気がしたから。

ふう、と軽く息を吐き出してから、あたしは軽く頭を振り、階段を上り始めた。

あたしの教室は、階段を上って左に曲がれば、すぐだった。

※

前方にある教室のドアを開けると、目の前に女子生徒が立っていた。

伊藤香奈、だった。

あたしは思わず、持っていた鞆を落とした。

相手も、予想もしなかった突然の出来事に、目を丸くさせていた。

まさか、一番始めに遭遇してしまうだなんて。

あたし達二人は、ドアの向かい側と外側で、お互いに睨みあう形になった。

何かが触れただけでも爆発しそうな空気が、辺りに漂う。

伊藤香奈の周辺には、お喋りしていたであろう女子グループがちらりと見える。彼女たちも、あたしに対して、冷たい視線をよこしてくる。

周りを真っ黒にした伊藤香奈の目を睨みつける。

だけどあたしの心臓は、何かを訴えるかのように、ばくばくと胸を叩いていた。

——あたしから言うべき言葉が、あるはずだ。

けれど、それは形にならず、心の中でぐるぐると渦を巻いてしまふ。

その間に、あたしの眉間に入る力が、強くなっていった。

相手も徐々に顎を持ち上げながら、こちらを見下してくる。

やがて、ふっと口元を歪ませながら、言った。

「あたしら、話で忙しいんだ。あんた、あっちから入れよ」

遠い方のドアを親指で示しながら、伊藤香奈は笑った。

途端に、カッと顔が赤くなるのを感じ、あたしは落ちた鞆をすぐさま拾い、ぷいっと反対側のドアへ向かって歩いていった。

ドアを開けて教室に一步踏み込むと、女子グループがこちらを見て、あははと笑うのが見えた。

鞆を持つ手に力を込めながら、あたしは窓側の、前から二列目の席へどすんと腰を下ろした。

鞆から電子パッドを乱暴に取り出しながら、あたしは大きく長く、息を吐き出した。

途端に胸がからっぽになって気がして、さっきより楽になった。

けれど、すぐに虚しくなった。胸が、ちくりと痛む。思わず叫び出しそうな衝動に、襲われた。

こんなの、いつもの調子なら、軽くやりすごすことのできた筈なのに。

今のあたしは、脆い。

それはきつと、松原君のせいだ。

松原君が、あんなこと言うから。
でも。

彼を責めることは、出来なかった。

一番怨むべきなのは、自分なのだ知っているから。

ようやく、お昼を告げる鐘の音が響いた。一番休息出来る時。

あたしは、弁当を片手に教室中をウロウロしだしたクラスメイトたちを横目に流しながら、床に置いてある自分の弁当箱へと、手を伸ばした。

今日はいっそ一人で校庭にでも出ようかな。所々雲が浮かんでいる曖昧な空でも眺めながら、外の空気を思い切り吸いつつ食べるのも、良い気がする。

そんな想像を巡らせた時だった。
後ろから、ふいに声を掛けられた。

「ねえ、亀田さん。」

今からうちら女子で球技大会の練習すんだけどさ。
付き合ってよ」

そう告げた伊藤香奈の口元は、醜いぐらいひん曲がっていた。

※

「じゃあ、うちらで輪になって、トス練習しようか。
ここら辺で丸くなれば良いんじゃない？」

伊藤香奈は、運動場と校舎の間にある、やや広まったこのコンクリート道路で、手に持っている大きなソフトバレーボールをバウンドさせた。

ボスの声に動かされるように、彼女に付いてきたクラスメイトの女子四人が、円を描くように広がっていく。

あたしもしぶしぶ足を動かしながら、そいつらの顔をちらりと見た。

全員、あたしを見て不吉に笑っているように見えた。

こいつら、絶対何か図ってる。

そう思わざるを得なかった。

あたしのクラス的女子が担当する球技大会種目は、バレーとバスケット。

クラスに女子は十二人いたから、半分ずつ、六人が一つの種目をやることになっているはずだ。

その担当分けを、あの日――あたしと伊藤香奈が口論になったあの日、あたしが出て行った後に、こいつらが勝手に決めたらしい。

そして今、この場にあたしと伊藤香奈が、一緒に居る。

つまり、バレーを一緒にやる、ということ。

どう考えたって、それは何か企みがあるに違いない。

そいつらの顔を順に一瞥しながら、手をぐっと握りしめた。

伊藤香奈は、あたしの二つ左隣に立っている。

「よし、大体円になったね。そんじゃ、行くよー」

伊藤香奈はそう言って、手で弄んでいたそのボールを、ひょいと真上へ投げた。

それがちょうど手元の高さまで落ちて来た時に、彼女は掲げた両手の手首をくいと曲げて、直線上にいる女子ヘトスした。

トスを受けた子は喜々とした表情で、「絵里、パス！」と言いな
がら、右隣の子ヘ向かってトスしていく。

絵里と呼ばれた子もまた、午後のうらかな陽に顔を照らされな
がら、「ほいよっ」と伊藤香奈ヘボールを戻した。

彼女はそれを、左隣の子ヘと、トスする。

……嗚呼、そういうことか。

あんなたちの企みは、こうして、あたしにボールを永遠に回さな
いことで、あたしをのけものにする事なのか。

あたしを見世物にすることだったのか。

拳を一層、きつく結ぶ。

馬鹿みたいだ。

あたしは心の中で、毒づいた。

その間にも、ボールは軽々と宙を舞っている。

——良いじゃない。もう、勝手にすればいい。企みだろうがもう、
なんでも良くなってきた。

もう、どうだっていい。

やっぱりあたしには、リアルで明るくなんて、無理な話だったん
だ。

そう思い、運動場で同じように球技大会の練習をしている連中を、
眼鏡のレンズを通して睨みつけていた時だった。
ぽん、と。

頭に、何かが落ちてきた感覚がした。驚いて、視界を足元に落とす。

そこには、大きなバレーボールが転がっていた。

「ちょっとお、亀田さん。」

ちゃんとトスしてくんなきゃ、練習にならないじゃーん」

伊藤香奈が、陽気な声を上げるのが聞こえてきた。あたしは戸惑いつつも、その顔を見た。

彼女は、「ほらほら、早くトスしてよお」と甘ったるい声を出して、あたしに陽気に笑いかけていた。

「……え？」

慌てて、周囲の女子たちの顔を見た。

そこには、先ほどのような何か企みを持ったような含みの笑みはまるで無く、本当に楽しそうに笑っているように見えた。

あたしは呆然とした頭の中で、ゆったりとした動作で転がったボールを拾い、腕の中に収めた。

——どうなってるの？

「ちよっと亀田さん。トストス」

隣から明るい声で言われて、あたしは慌てて、どぎまぎとした動作ながらも、ボールを適当に上空へとトスした。

それは綺麗な放物線を描いて、直線上にいる女子の元へと飛んでいった。

その直線上の子は、あたしの投げたボールを避けるようなことなく、ちゃんとトスして隣の子へとボールを回していく。

——最初だけ油断させて、後から無視してくる戦法、とか？

心の中で、少しだけそう疑った。けれど、数分する内にそれは消え去っていった。

伊藤香奈は変わらずに明るい笑顔を向けてくるし、周囲の女子たちも、楽しそうにボールをあたしへトスしてくれる。

あたしも、ぎこちないながらもトスを返す。

それはまさに、仲の良いクラスメイトたちが、楽しく練習している光景だった。

……あたしの、考えすぎ、だったのだろうか。

純粹な笑い声が広がっていく空気に吞まれながら、そう思った。全部、あたしの思い込みすぎで。

実は、伊藤香奈たちはあの時のことを悪いと思ってくれていて。そして、あたしも――。

気付けばあたしの頬は緩んでいて、しっかり相手にボールを届けようと、トスに集中するようになった。

※

そんなトス練習が、十分ほど続いた時。

隣の子から回されたボールを、あたしが力を込めて、伊藤香奈へとトスした。

ボールは、正確な機軸を描いて彼女の元へと飛んでいく。そして、彼女は。

そのボールを、上空に掲げた両手で、しっかりとキャッチした。

「……ちょ」

何やってるの、とあたしが言おうとした時だった。

伊藤香奈は、ゆっくりとその視線を、あたしに向けた。

その視線に、あたしの心臓は一瞬にして竦み上がった。

こちらを冷たく見放すような、こちらの心を抉るかのような、鋭

い視線が、あたしを捕えてくる。

無意識の内に、足がぐぐくと小さく震えだす。拳を、ぎゅ、と結んだ。

やがて彼女は、今日最初に話しかけてきたような醜い口元で、言った。

「……ねえ、亀田。

あんた、なんでうちらと一緒にいるわけ？」

「――へ」

途端に喉元が縮こまって、上手く声が出なかった。息をすることさえ、難くなる。

あたしは何も言えず、周囲の女子たちを慌てて見た。

いつの間にか、彼女たちもまた、伊藤香奈と同じ笑みを作っていた。

ふ、と伊藤香奈の方から、息が漏れる音が聞こえてきた。

「やっぱり、ね。

ウチが狙った通りだったっしょ」

くすくすと、周囲から笑いが漏れる。

――何が。

そう詰問したかった。今すぐに。怒鳴り散らしたってかまわない程に。

でも、喉からはひゅーひゅーと鳴るか細い息しか出てこなくて、口の中が、途端にからからに乾いていく。

心が、崩れかけのジェンガのように、大きく傾いていく。

やがて、伊藤香奈が。

止めの一言を放った。

「亀田ってさ。」

やっぱり、一人で居ることが恐いんじゃないの？」

途端、全身から力が抜けていく。

視界がぐらりと大きく揺らぐ。

必死に、足を踏ん張った。

次第に、周囲から声が重なってきた。

それらは容赦なく、あたしを押しつぶしていく。

「何、亀田って結局、一人で格好つけてたってことお？」 「うわ、なにそれ」 「きもちわるー」 「てか、ださい」 「どこのガキだよって感じじゃね？」 「ホントホント」 「うけるー」

やめて。

あたしはそんな言葉の渦の中で、思わず耳を塞いだ。

やめてやめてやめてやめてやめてやめてやめて———

「てゆーか、なんか、かわいそおー」

その最後の一言で。

ついに、何かが音を立てて崩れたのが、分かった。

きっと、心の中の、ジェンガが。

ふ、と目の前の気色が、一瞬にして、透明になった。

「……勝手に、言ってるよ」

「――は？」

「あんたたちに、あたしの何が分かるっていうのよっ!!」

精一杯叫んだ。これでもかと叫んだ。

叫ぶことしか、出来なかった。

あたしはくると背を向け、校舎に向かって走り出した。

水たまりの中みたいにゆらゆらと揺れている視界の中を、感覚の無くなった足で、前に前に押し出しながら進んでいく。

もう、嫌だ。

今度は心の中で、あたしは叫んだ。

もう、こんなの、嫌だ。

※

階段を一段飛ばしで駆け抜け、教室のドアを思いっきり開く。

誰もいない空っぽの教室に並ぶ机たちをかき分けながら、自分の机へ真っ直ぐに向かう。その横に掛っている鞆をひったくるように取って、踵を返す。

とにかく、早く、一秒でも早く、この場所から――この「世界」から、出たかった。

鞆をしっかりと抱きかかえ、階段を降りるときに足元を見て、そういうば靴のままだったと今更のように気付いて、でもすぐにそんなのどうでも良いじゃないかと思い直し、靴箱へ続く廊下をあたしはまるで誰かに急かされているかのように足を小刻みに動かし、ようやく出口が見えてきたところで――

「あ、麻子ちゃんっ！」

あたしは、立ち止った。

目の前に、由梨が立っていた。その両手に、電子パッドを抱えながら。

何も知らない由梨は、あたしにえへへ、と笑いかけてくる。

その黒くて長い髪を、昇降口から吹いてきた穏やかな風になびかせながら。

「良かったあ。」

丁度今、麻子ちゃんに会って勉強教えてもらおうかなと――」

そこまで言いかけ、あたしの顔を見た由梨は瞬間、息を呑んだようにその表情を強張らせた。

あたしは、今まで動けたのが嘘のように、すっかり固まってしまった。

何故だか身体の制御が停止してしまったかのように、動けなくなる。

頬に、何かが次々と伝っていくのを感じながら。

「――麻子……ちゃん……？」

由梨が、目をこれでもかと大きく見開かせた。

そして、恐る恐るといった感じで、あたしに一步、近づいてくる。

「……一体……どう、したの……？」

その白くて細い腕を、あたしに向かってそっと伸ばしてくる。

そして、その指先が、あたしの頬に触れた瞬間。

「――やめてえ!!」

あたしは思いっきり、言葉に出して叫んでいた。
そして、外に向かって走り出した。

校門を抜け、街路樹が立ち並ぶ歩道を、あたしは両腕で鞆を必死に握りしめながら、足がちぎれんばかりに動かした。

頭の中には、あの時――こちらに向けてとても悲しそうな表情を見せた由梨の顔が、べったりとこびりついていた。

Log 11 ダンジョン↓海原や蒼空に呑みこまれた砂浜（上）

「――もしもし」

『もしもし？ えと……アサちゃん？』

あの……ご、ごめんね。突然連絡しちやって。

ねえ、今、どこに居る？』

「どこって。入り口の街だけ」

『あ、本当？ 私も今、そのワープ装置近くに居るんだあ。

てことは、あの大きな掲示板の近く、とか？』

「まあ、そうだけど」

『――ねえ。

今から、アサちゃんに、会っても良い？』

「……………」

『あのね、久しぶりに二人でパーティ組んで、依頼やりたいな、て、思ってた。

ほら、いつもリュウくん入れて三人でやってたでしょう？ だか

ら……。

あ、でも別にリュウくんを邪魔者扱いしてるわけじゃないんだよ
っ。

三人も三人で楽しいけど、二人でやるのも良いんじゃないかなっ
て思っただけで。

駄目、かな。

……あ。もしかしてアサちゃん、今は他の人たちとパーティ組ん
でる時だったり？

それなら私、邪魔だったかな。ごめんね、私、タイミングとかい
つとも悪くて』

「良いよ」

『……へ？』

「パーティ、組みたいんですよ。良いよ。」

あたし、別に今、何もしてないし。街ん中ぶらぶら歩いてただけだし」

『本当？』

「嘘ついてどーすんのよ」

『……そっか、そうだね、うん。ありがとうアサちゃん！』

それじゃあ、私、今からそっち向かうね！』

「ならあたし、依頼登録の方ちゃっちゃと済ませてくるよ。簡単なやつでも」

『良いの？　ありがとう！』

それじゃあ、お願いしまあす』

「じゃ、切るよ」

『え？　あ、うん。』

それじゃあ、また後でね！』

「うん。……じゃ」

リリースとの『ボイスチャット』を切断するように念じると、頭の中でぶつんと何かが切れる音がした。

あたしは大きく息を吐き出しながら、煉瓦の建物にかたどられた空を見上げた。

それはとても狭くて、窮屈そうだった。

あの後——学校を飛び出して真っ直ぐに家に帰ってきたあたしは、そのまま『ワールド』の世界に閉じこもった。

何をするでもなく、ただ、この入り口の街をぶらぶら歩きながら。多分、三時間ぐらい。

最初は、ギルドメンバーで馴染みの奴等でも呼び出して、一緒にパーティ組もうかと考えた。

けれど呼び出そうとする度に、あの伊藤香奈が放った台詞が、耳元で蘇る。

『亀田ってさ。やっぱり、一人で居ることが恐いんじゃないの?』

途端に、やる気が失せた。やることが、無くなる。

でも、リアルに戻るのも嫌だから、結局ここで、あたしはぼーつと彷徨っていた。

あたし、何やってるんだろう、本当に。

何度も自分に問いかける。憂鬱なため息が次々と漏れる。

でも、今は取りあえず、リリィと約束してしまったんだ。

何か適当に、依頼登録しなければ。

ふらふらと縛れる足に、内側から鞭を叩き込みながら、案内所へ向かって歩いていく。

ゆっくりとその足を踏み出し、両手の掌を呆然と見つめ、靄がかかったように動きが鈍い脳みそで、思った。

——あたし、どうして『ワールド』なんか、プレイしてるんだっけ。

※

ダンジョン↓海原や蒼空に呑み込まれた砂浜

「すごい、見て見てアサちゃん！ 海と空の境界線、くっきりと見えるよ！」

ダンジョンに着くや否や、リリィはその方角を指差してはしゃいだ。

あたしは適当にその方角に視線を遣り、「そうだね」と頷いていた。

そこはもう、白いビーチみたいな場所だった。

向こう側では、海の先端が砂浜を何度も洗い流しているのが見えて、遙か遠くには、リリイが喜んでいた青の境界線が、くつきりと見えた。

海には、他のプレイヤーたちがぼつぼつと泳いでいるのが見えた。今日はなんだか人が少ない。

そんなプレイヤーたちの頭を、真上で輝く灼熱の太陽が、ぎらぎらと照りつけていた。

反対側へ視線を遣れば、そこにはヤシの実やら、南国の島に生えるのが相応しいと思える木々たちが、ずらりと並んでいた。

まるで、ここから先には行かせませんよと、通せんぼしているかのように。

「うわ、すごいねこの砂。サラサラしてるよ」

リリイはあたしの少し先でしゃがみ込んでいて、その両手を砂の中に埋めていた。

お腕の形を作りながら持ち上げられた両手から、白い砂が、ざー、と流れていった。

一つ一つの粒がきらきら輝いているのが、すごく眩しい。

全ての砂が地面に落ちていくのを見届けた後に、リリイは立ち上がって、軽い足取りで海の先端へ向かって走っていった。

本当に、子供みたいだ。

その背中を、あたしは突っ立ちながら見送った。

——ホントに、羨ましいぐらいに、明るくて、素直で、優しい子だ。

両手の拳を、ぐっ、と握りしめた。

「ねえ、リリイ。」

あたしら、別に遊びにきたわけじゃないでしょ。

早く『宝箱』を見つけ出して、依頼終わらせよう」

リリイがぴたりと立ち止り、躊躇いがちにこちらへ振り返った。

その顔は、きつく叱られた子供みたいに、悲しく歪んでいた。

やがて、えへへ、と苦笑いしながら「ごめんね、アサちゃん」と言ってきた。

あたしはぷいと顔を逸らし、海辺にそって砂浜を歩き出した。

胸がぎゅっと締め付けられるような感覚は、もううんざりだった。

ずんずんと先を行っても、辺りの気色は、何の変化も見せてくれない。

左手には、相変わらず南国の木々たちが圧迫するように並んでいる。

右手には、まるで全てを呑みこもうと企んでいるかのように広がる青がある。

黙々と、あたしはその中を歩き続ける。

リリイはずっと黙り込みながら、あたしのすぐ後ろに付いてきていた。

ちなみに今回あたしを選んだ依頼は、『隠された宝箱を見つけ出せ』というもの。

これなら適当に歩きまわっていれば、その内宝箱を見つけ出して、すぐに終わることが出来るだろう、と考えたのだ。

とにかく、ちゃっちゃと終わらせてしまおう。

一定の間隔で砂を洗っていく海の音だけが、耳元に聞こえてくる。ざー、ざー、とゆったりとしたテンポで鳴っている。なんとなく心地よかった。

そんな穏やかな音に身を委ねながら、あたしは目を閉じた。

何やってるの、あたし。

リリィは多分……いや絶対、あたしのことを気遣って、依頼に誘ってくれたっていうのに。

今日初めて会った時から、ずっと適当に会話に合わせているだけで、その度にリリィを困らせていた。

最初に謝らなければならないのは、あたしの筈なのに。

これじゃ、リアルと全く同じだった。

相手に冷たく接してしまふ、心の狭いあたし。

なんでだろう。

いつもなら、この『世界』に入れば気持ちが軽くなって、思う存分行動することが出来たのに。

何コレ。どうして。

ねえ、なんで、なんでよ。

途端に、悔しさが次々と心の底から湧きあがってきて、あたしの心臓をぎゅうっと圧迫してきた。息苦しくなる。

あたしは黙々と歩き続けながら、海に洗い流されている白い砂浜を睨みつけた。

目から溢れだそうとする何かを必死に抑えつけ、唇を引きつらせて思った。

どうして、この『世界』にまで、”泣く”なんてことが出来てし

まうの……？

※

ふと、あたしの横をリリイが駆け抜けていった。
突然のことに驚いて、あたしは立ち止った。

リリイはそのままあたしの目の前を走っていき、数メートル先の砂浜で、しゃがみ込む。

やがて、くると振り向いた。淡色の髪が、ひらりと舞う。

その手に、小さな星型をかたどった物を持っていて、あたしにそれを見せびらかしていた。

「見て、アサちゃん！　これ、可愛いよっ！」

無邪気に笑いながらそう言うリリイ。

太陽の光を斜め上から浴びて、きらきらと輝いていた。

それを見た瞬間、あたしの心の中で、何かがぷちんと弾けた。
全身の冷え切っていた血が、途端にぐつぐつと煮え始める。

——何も知らない癖に。

そんな、無邪気な顔で——

あたしに、話しかけんな。

精一杯、その大きな瞳を睨みつけようと、目に力を込めた時だった。

リリイの手に掲げられていた星型の物体が、ぴくり、と動いたように見えた。

そして次の瞬間、そいつに付いていたらしい二つの目が、カッと開かれた。

あたしはハッと息を呑み、そして、叫んだ。

「――リリィ！ 早くそれを離してっ！」

「……え？」

きょとんとこちらを見たまま、何も気付いていないリリィ。

あたしは駆けだした。そいつが、大きくその身体を震わせる。そこでようやくリリィが異変に気付き、手からそいつを手放した途端。

そいつは――ヒトデは、巨大化した。

人の二倍程の大きさになったそいつは、側にぺたりと座りこんだまま動かないリリィを、じっと睨みつけている。

にひひ、とそいつが奇妙な笑い声を発した次の瞬間、その身体にびっちりとは細かな針が生えた。身体の輪郭が分からなくなるほどに逃げてリリィ。あたしは叫んだ。

けれどリリィは、腰を抜かしてしまったかのように動かない。ただ、巨大化したヒトデを、恐怖の表情で見上げているだけだった。歯を食いしばりながら、更に足を速める。

やがてそいつが、ぐらりと身体を揺らして、リリィに向かって倒れていく。

――ヤバいつ！

射程距離内に入るや否や、あたしは急ブレーキをかけ、呼び出しておいた弓矢を構えてすぐさま矢を放った。

まっすぐに飛んだそれは、見事真ん中に的中。

そいつは、矢の飛んだ流れと同じ方向へと倒れた。

再びあたしは走りだし、へたり込むリリィの腕を掴んで、ぐいっと持ち上げた。

ふらつきながらも立ち上がったリリイに向かって、あたしは叫んだ。

「馬鹿っ！ 何やってるのよ！

あんた、あのまま不意打ちされてたらどーするつもりだったわけ！ 危なかったじゃんっ」

「――ご、ごめんなさ」

「それより大丈夫！？ 何か、あいつに攻撃されてない！？」

「う、うん、だ、だいじょう、ぶ」

すっかり竦み上がったリリイの瞳に、必死の形相で口を開いているあたしの姿を見つけた。

そこでようやく、あたしは我に返った。

気恥かしさが途端に込み上げてくる。あたしはリリイの腕から強く握りしめていた手をぱっと放し、慌てて一步距離を取って視線を逸らした。

と、その時、横に倒れたヒトデが、ぴくりと動くのが見えた。

すぐに危険を察知したあたしは、とにかく、頭の中であいつのステータスを調べるように念じた。すぐにウインドウがそいつの側に表示される。

レベルは――大したことない。あたしより五くらい下だ。さっきの攻撃で、HPも半分くらい削っている。

とにかく、今はあいつを何とかしよう。

あたしは、そいつに向かって再び弓矢を構え、標準を定めた。

「リリイ、あんたはとにかく、後方で待機して！

こんな奴、あたしがすぐに終わらせるから」

「で、でも――」

「早くっ」

びっくりと肩を震わせたリリィは、その引きつった表情のままこくりと頷き、ヒトデと反対方向へ走っていった。

あたしは、星形のそいつを、キッと睨みつける。

そいつもまた、あたしの方の方へ光る双眸を向けてきた。

「――さっさと死んでっ」

そう叫び、構えていた矢を放とうとした時だった。

ヒトデが全身を震わせたかと思ったら、何かがこちらへ目掛けて飛んできた。

複数の鋭いものが、鋭い光を放ちながらひゅんひゅんと飛んでくる。

咄嗟の事に対処できなかったあたしは、腕で顔を覆うことしか出来なかった。

全身に鋭い痛みが走る。あたしは短く叫び声を上げながら、地面に倒れた。

「アサちゃんっ！」

「ぐう……」

ゆっくりと上半身を起こして見ると、身体の所々に針が刺さっていた。

舌打ちしてそいつを見た。すっかりつるつるになったヒトデにひひ、とまた笑った。その笑い声が耳にこびりつく。

鬱陶しい。

その、馬鹿にするような笑いが。

あの女を――伊藤香奈を、思い出してしまうから。

胃の中がむかむかして、途端に気持ち悪くなった。

馬鹿にしやがって。

「――舐めんなよっ！」

お腹の底から声を出した。心の奥に潜んでいたエネルギーが、一気に爆発した。

あたしは立ち上がる。もう一度弓矢を構え、そいつを見た。こちらへ真っ直ぐに近づいてくる。

矢を持つ手に力を込めた。途端に、矢が光り始める。目を閉じ、何度も何度も頭の中で、強く念じた。

……もつと、もつと強く！

ヒトデがあと一メートルという所まで迫って来た気配を感じた瞬間。

あたしは、目をカッと開いた。

「いっけえええ」

渾身の思いを込めて、強い光を纏った矢を放った。

矢を包み込んでいた光は、一瞬にして竜の姿へと変化する。そのまま真っ直ぐ、標的の元へと飛んでいく。

ヒトデは、身体の真ん中を射抜かれたのと同時に、光の竜に食われた。きいい、と甲高い悲鳴。そいつの姿は、一瞬にして光に埋め尽くされる。

その光が和らいだ時には、すでに跡かたもなく、ヒトデは消え去っていた。

後に残されたのは、今回の依頼の達成でもある、小さな宝箱。

気付けば、あたしの全身から力が抜けていて、白い砂浜に、崩れ落ちていた。

Log 12 ダンジョン↓海原や蒼空に呑みこまれた砂浜（下）

「見て、アサちゃん。」

宝箱の中身、これだったよ」

リリイははにかみながら、両手に宝箱の中身を乗せて、あたしに見せてくれた。

それは、一枚の金貨だった。

「これ、アサちゃんの報酬、だよね。」

だって私、何もしてないから。

はい、コレ」

あたしは、その差し出された金貨を、未だに白い砂浜に座りこみながら、ただじっと見つめた。

灼熱の太陽光を浴び、強烈な程に輝いている。

思わず、目を細めた。

「……アサちゃん、大丈夫？　もしかして、まだどこか痛いのか？」

リリイがしゃがみ込み、こちらを心配そうに覗きこみながらまた杖を取り出して、あたしに回復魔法をかけた。

もう、とつくに痛みなんてなかったし、体力だって満タンだった。でも何故か、心だけが、回復してくれなかった。

あたしの心は、色んなものを放出しすぎたせいで、すでにぐたぐただった。

多分、もう、限界だった。

「……アサちゃん……」

目の前のリリイの顔が、途端に、悲しげになった。
ぼやける視界の中でその顔を見ながら。

そう言えば、前にこんな表情見たことあるな、と思った。

ああそう、それは確か、リリイと——由梨と、初めて会った時。
中学三年の時だ。

授業を終えて、誰も居なくなった教室で、ただぼつんと一人残されたあたしに、突然はにかみながら話しかけてきた、由梨。

そんな初対面の由梨に対して、あたしは冷たい言葉を放ったような記憶がある。

そう。

きつと、その時の顔だ。

目の前の由梨は、ゆっくりとその手を動かし、あたしの両手をぎゅつと握りしめた。

あたしはただ、その暖かな温もりを、感じるこゝししか出来なかった。

やがて由梨は、ゆっくりと口を開いた。

「——ありがとう、アサちゃん。」

私、いっつもアサちゃんに、助けられてばかりだね。

『ここ』でも、リアルでも」

由梨が、優しい瞳をしながら、あたしを見ている。

「中学校でアサちゃんと——麻子ちゃんと同じクラスになれて、お

友達になれて、私、すごく嬉しかったんだよ？

ほら……私、例のあの”病氣”だったから、三年生になって学校に復帰した時、皆と普通になじめるか、すごく不安だったんだけど。でもね、麻子ちゃんがいつも私の隣に居てくれたから、とっても安心出来たんだよ。

それが何よりも、すごく、嬉しくて」

そこまで言うと、由梨の顔からふっと笑顔が消えて、伏し目がちになった。

その口から発せられる言葉が、ゆっくりになっていく。

「なのに……。

私、麻子ちゃんに対して、いつだって、何も出来ていなかったよね」

あたしの目の前で、由梨がそんなことを言っている。

あたしはただ、ぼうつとその顔を見つめる。

やがて。

今にも涙がこぼれてしまいそうな瞳を細めながら、由梨は、ゆっくりと笑った。

「だから、私、少しでも……麻子ちゃんの力になりたいって、思ったの。

今日、学校で、麻子ちゃんが辛そうに泣いたの、見てから。私も、すっごく苦しくなって」

ねえ、麻子ちゃん。

由梨は、言った。

「私なんて、何も出来ないって分かってるけど、でも……。」

お願いだよ、麻子ちゃん。

何か辛いことあったら、私に遠慮なく言って。

それで何か解決出来るかって言われたら、なんとも言えないけど。

でも、気持ちを吐き出してもらうことで、少しでも麻子ちゃんの気持ちが出来になってくれたら、嬉しいの。

私が、麻子ちゃんに私の”病氣”について、愚痴こぼしちゃった時みたいに」

肩を震わせ、溢れだそうとする何かを必死に抑え込むような様子で、由梨は言う。

あたしは、そっと、目を閉じた。

脳裏に、当時の記憶が、まるで昨日の映像のように蘇ってくる。

※

一人になることが、とても辛かった、あの頃。

いじめを受けてから、人と接するのが怖いと思いつつも、心は寂しいと叫んでいた、あの頃。

同じクラスで、同じようにぼつんと一人で座る女の子――由梨が話しかけて来た時も、どうせいじめてきたあの子と同じように接してくるんだろうと決めつけて、警戒していた。

でも、本当に悲しそうなその表情を見て、あたしはずきんと、胸が苦しくなった。

きっとこの子も、あたしと同じなんだ。

そう思い、気付けばあたしは、その子に手を伸ばしていた。救いを求めるように。

しばらくしてから、由梨と仲良くなった。

といっても、由梨から一方的に話しかけてきて、あたしはそれにそっけなく答える、なんていう関係だったけれど。

それでも楽しかった。

一人じゃないって思うことが、出来たから。

しばらくしてから由梨が、特別な”病氣”のことについて教えてくれた時は――驚いたのと同時に、嬉しかった。

あたしだけに打ち明かしてくれたその「秘密」は、あたしと由梨が本当に友達で、繋がっている証明のように思えたから。

あたしはその時、由梨にこう言っていた気がする。

大丈夫、あたしが傍にいる。って。

中学卒業して、あたしたちは同じ高校へ進学することが出来た。でも、クラスは別々になった。

クラスになかなか馴染めないことに、あたしは息苦しさを感じていた。

だから、あたしはそこで初めて、自分から由梨の所へ行こうと思った。

ちよつとだけ足を軽くさせながら、由梨が居るクラスを覗いたら。

由梨は、そのクラスの女子たちに囲まれ、楽しそうにお喋りをしていた。

その姿を見て、あたしはずきんと心が疼いたのを覚えている。

ああ、ついに、あたしは取り残されたんだ、て思った。
別に、由梨を恨んだわけじゃない。

時々あたしのクラスまで未だに来てくれるあの子は、悪くない。
でも、すごく、羨ましかった。

途端に学校がモノクロの世界になって、周りの生徒たちがのっぺらぼうになって、一人教室の片隅で座っている自分が――ひどく悔しくなった。

それからだ。

あたしが、『ワールド』の世界に入り込んだのは。
勢いだけで潜りこんだあたしは、最初は恐る恐るプレイしていた。
けれど、次第に『ワールド』上の知り合いが増え、プレイのコツがつかめてきた時。

その『世界』は、”あたしの世界”になった。

そこでは、あたしは「リアルのあたし」という殻を抜け出すことが出来る。

とても自由で、気楽で、素敵で。

何よりも、何時でも繋がりがあえる、仲間がいてくれる。

その事実が、何よりもあたしを支えてくれ、安心させてくれた。

それからあたしは、リアルの自分に――

鍵を、かけたんだ。

※

あたしは、目の前の由梨に、しがみついた。

その細い肩を両手で掴み、顔を砂浜へ向けながら、ぼろぼろと泣

いた。

自分でも情けないと思うほどに、嗚咽が、涙が、溢れ出てくる。と同時に、心の底で、がちりと何かが開く音と、何かが崩れる音が、重ねて聞こえてきた。

どうしたの、とリリィが優しく問いかけてくる。

その心地良い声が、あたしのしわしわになった心に、すうっと沁み込んできて――。

あたしは、叫んだ。

本当は、あたし、一人になんかなりたくない。

リアルでも、『ここ』みたいに、明るく素直な自分になって、友達と普通に遊んだりしたい。

『ここ』にいつまでも逃げ込んでいる自分なんて、キライ。大嫌い。

嫌だ、辛い、苦しい、限界、もうイヤ、お願い、お願い……

助けて。

わああ、なんて自分が喚くのが、意識の遠くで聞こえてくる。

目の前には、白い砂浜。その上に、小さな水たまりがぼつぼつと広がっていた。

ああ、綺麗だな、と思った。

それはまるで、無限の砂漠の中に唯一潤いを与えている、オアシスのように見えて。

ふと、肩に何かが優しく触れるのを感じた。

あたしが顔を上げた時、それは全身に広がっていった。

由梨が、あたしを優しく、抱いてくれた。

あたしは喉から声にならない声を洩らし続けながら、その胸の中に顔を埋めた。

すると、その身体から、声が振動として伝わってきた。

大丈夫。私が傍にいる。

その言葉を耳にした時。

どくんと、心臓が縮こまった気がした。

それは、あたしが昔——由梨に向かって、あたしが言った台詞。

結局、守ることが出来なかった、あたしの嘘の台詞。

——ぴこん。

突然、あたしの頭の中で警告音が鳴り、あたしはびくつと身体を強張らせた。

あと少しでタイムアウト——四時間が経過し、強制ログアウトの時間になることを、告げる音だった。

もうすぐ、終わってしまう。

あたしは、この『世界』から、強制的に排除されてしまう。

目を閉じて、頭の中で確認すれば、そこに退場までのカウントダウンが示されていた。

『残り、30秒です』。

冷たくその時を知らせる、無機質な数字がそこにあった。

これがゼロになった時、あたしはリアルの世界に戻ってしまう——。

ずきんと胸が疼いた。

……いやだ。

いつまでも、この『世界』の中に留まっていたいのに。

あんなリアルの世界なんか、帰りたくななんてないのに――。

数字は容赦なく、その時を刻んでいく。

『25』、『24』、『23』……。

早くここから出ていけど、『ワールド』から言われているかのようだった。

その時。

どくん、と、あたしは気付いた。

途端、強烈なほどの虚しさに、あたしは襲われた

ああ、そう、そうじゃない。

ここは結局、『ワールド』。

ただの、オンラインゲームの、世界。

架空の世界。偽物の世界。

何もかも、作り物の世界。

あたしは手に力を込めて、そっと由梨から――リリイから離れた。リリイは、少しだけ驚いた表情をして、問いかけてきた。どうしたの、と。

最後に目を閉じて、カウントを確認する。

『残り、10秒です』。

そしてまた、ゆっくりと目を開けて、リリイを見た。

段々と薄まっていく視界の中で見るリリィは、やっぱり、とても作りもののように見えた。

当たり前だ。だってそれは偽物。

本物では——リアルではないのだから。

今この出来事も。リリィが言った台詞も。前に松原君が言ってくれた台詞も。ギルドメンバーも——

今、ここにいる、あたしも。

そんな作り物の世界で。

あたしは一体、何をしてきて、何を信じてきたのだろうか。

そして、カウントが『3』になって、いよいよ身体力が尽き果てようとした時。

あたしは、リリィに向かって、ばいばい、と小さく手を振った。

視界は、完全にブラックアウトした。

Log 13 結局は、私も同じ気持ちで、抱えているんだ

『私は、目の前にある、小さな丘の上を歩いていました。

よいしょ、と一歩ずつ上っていきます。その度に、足の裏がじんと痛くなるのを感じて、私は笑い声を立てました。

頂上に着くと、そこには、一面のお花畑が広がっていました。

赤、黄色、白、橙色などの様々な色があって、とても綺麗です。風が一つ吹き、私にその花達の優しい香りを運んでくれました。

私は、深呼吸をします。すー、はー。その優しい香りを身体の中に仕舞うことが出来たので、私はもう上機嫌！

嬉しくなって、るるんとスキップしながらそのお花畑を進んでいたら、あるお花を見つけました。

私は、びっくりしました。なんと、その花卉の中心には、リンゴがあったのです！

すぐにしゃがみ込んで、そのリンゴを近くで眺めました。

すると、いつの間にか近くに飛んできた白い蜂さんが、私に言いました。

「そいつ、食べてもらうのが一番嬉しいみたいなんだ。是非とも、食べてやってくれないか」

私は少し戸惑いながらも、結局は、そのリンゴを手に取りました。

ずっしりとした重みを感じた途端に、お腹がぐうと鳴りました。耐えきれずに、私は一口齧りつきます。がぶり。

すると、見る見るうちに口の中にその甘い汁が広がっていきます。それはなんと、甘くて優しい味なのでしょうか！

私は思わず、とっても甘くて、美味しいと言っていました。

白い蜂さんは、私の周りを飛び回りながら、ぶうぶうと笑いました。

私も、リングを片手に、声を立てて笑いました。
やがて――』

※

そこまでタイピングし終わった時に、きーンこーんとチャイムが鳴り響いた。

私はびっくりして、顔を上げた。

先生はとくに自分の持ち物を鞆の中に仕舞い終わっていて、ほとんど電子黒板を叩き、そこに書かれていた文字を削除する。

そして、「ちゃんと復習しとけよお」と言いながら、教室を出ていった。

なんとなく私がほっとしてため息をつく。

すると今度は、「ねえねえ」と後ろから声をかけられて、またもや私はびっくりして振り向いた。

「いやだあ。由梨ったら、授業中に何書いてたの？」

同じクラスの友達の優奈ちゃんだった。

私は、急いで掌サイズのノートパソコンを閉じて、笑顔でなんとかごまかす。

「別に、何も書いてないよ？」

「隠そうとしたって無駄だよお。後ろからめっちゃ見えてたもーん」「え、本当に？」

そんなに、何か書いてたって、分かりやすかったのかなあ。

私がそう呟いて首をひねったら、優奈ちゃんは笑った。

「うん、必死にタイピングしてる後ろ姿が」

くすくすと笑う優奈ちゃんの隣で、私はえへへ、と誤魔化すように笑った。

「ねえ。それよりさ、早く一緒にお弁当、食べようよ」

優奈ちゃんは、片手に持っていたお弁当を振りかざした。

私は思わずそのまま「うん」と言いそうになったけれど、途中でハッと気づき、慌てて首を横に振った。

「あ、あの、ごめんね優奈ちゃん。今日はちょっと、他の子と食べようかなあと思ってて」

「え、そうなの？」

「うん。別のクラスの子、なんだけどね」

私は机の横に掛けてあったお弁当箱のバックを持って、立ち上がった。

ちよっぴり寂しそうな表情を見せた優奈ちゃんに、本当にごめんね、と頭を下げた。

優奈ちゃんは頭を掻きながら、ふう、とため息を漏らした。

「ま、良いよ。そんじゃわたしは、みいこと一緒に食べてるからさ」

「ごめんね」

「良いよ、気にしないで。」

そんじゃね、由梨」

ばいばい、とお互いに手を振り返した。

優奈ちゃんはそのまま、教室の隅で固まっていたみいちゃんたちのグループへと行ってしまふ。

私はしばらくその姿を見送ってから、閉じていたノートパソコンを開いた。そこに書きかけの文章が表示されていて、私はそれを上書き保存した後、電源を落とした。

このお話は、誰かに向けて書いているわけじゃ、なかった。ほとんど、私の為に。

色んなことを頭の中で想像しながら書くことで、私のこの虚しい

気持ち、なんとか紛らわせるために。

中学からの――正確には、あの事故以来の、私の癖だった。

と、そんなことをぼんやり考えている自分に気付いて、慌てて頭を振った。今は、こんなことを考えてる場合じゃない。

早く、麻子ちゃんのクラスへ行かなくちゃ。

机に置いてあったお弁当のバックをもう一度手にとって、私は教室から廊下へ出た。

※

「は？ ……亀田？」

私とそのクラスの女の子に話しかけると、その子は途端に顔を歪めて私を見下ろした。

その小さな目の周りに塗りつぶされている真っ黒な輪郭が、なんだか恐かった。

私はびくりと、一歩身を引いてしまう。

「あ、あの……はい。麻子ちゃん、なんですけど……」

「いないって」

その子は、大きなため息をつきながら言った。「亀田なんて、来てない」

え、と私は思わず漏らしていた。

――麻子ちゃん、今日、学校に来てないの？

風邪でも引いちゃったのかな。それとも……。

「えっとさ。もしかして、なんだけど。」

あんた、亀田の友達？」

その子が、後ろ手にあるドアにもたれて腕組みしながら、そう尋ねてきた。強気なオーラが放たれている。

私は、ゆっくりと頷いた。

しばらくして、その子が、あはは、と甲高い声で笑った。

びくっと身体が跳ね上がった時に、思わずお弁当を落としそうになった。

マジでかよ、なんて言いながら、その子は笑い続けた。そして、びしっと私を指差した。

「あんたさ、悪いことは言わないよ。あいつの友達なんか、やめときなうって」

思わぬ言葉に、私は息が詰まった。

ぶら下げていたバックを、ぎゅっと握り締めた。

——どうして、そんな、酷い台詞を。

その子は、甲高い声で笑いながら言った。

「だってさ、あいつ、超陰気じゃね？」

それに、ヤワな性格しといて、ガキみたいに強がっててさ。

ああいうの、めっちゃ笑えるし、めっちゃムカつくし。

傍にいて何の得にもならないと思うけどお？」

あははははは。その子の笑い声が、狭い廊下に反響していく。

それはクラスの中からも聞こえてきて、見てみると、同じクラスの女の子たちも、同じようにくすくすと笑っていた。

これが麻子ちゃんの過ごしてきたクラスなのかと思うと、途端に悔しさが込み上げて来た。

——酷い。こんなの、酷すぎる。

昨日、『ワールド』で会った麻子ちゃんの顔が、思い浮かんだ。
今にもはち切れてしまいそうなぐらいに悲しい表情をした、麻子ちゃん。

泣き叫びながら、私に辛い思いを吐き出してくれた、麻子ちゃん。
私は、笑い声に負けないぐらい、精一杯叫んだ。

「そんなことないっ！ 麻子ちゃんは……麻子ちゃんはそんなんじゃないっ！」

「じゃあ、何だって言うわけ？」

「麻子ちゃんは、すっごく、優しいんだからっ！」

今度は、ぎやははは、なんて言う汚い笑い声が廊下に響いていく。
その馬鹿にされたような笑いに、私はぎゅっと目を瞑りながら俯いた。お弁当箱を、両手で抱きしめながら。

頭上から、その子の冷たい声が聞こえてきた。

「あんたさ。」

それって、あいつに騙されてるんじゃないの？」

手に持っていたお弁当を落とし、空いた両手でその子の肩を、力を込めて掴んだ。

その子は、別に驚いた様子もなく、ふふん、と鼻で笑っていた。

「……何？ うちと喧嘩でもしたいの？」

「その言葉、取り消してよ」泣きそうな声になりながら、私は必死に訴えた。「ねえ、取り消してよっ！」

相手の肩を、激しく前後に揺らした。私は目に溜まりだした涙で、

視界がぐにやりと曲がるのが見えた。

その子はしばらく身体をぐらぐらとさせながら、にやりとした顔で私を見ていた。

そして後に、ぱん、と私の両手を振り払った。

その勢いで、私はぐらりと身体のバランスを失い、尻もちをついてしまった。

見上げれば、その子はさっきよりも汚い笑みになっていた。

やがて、くるり、と私に背を向け、最後に言葉を放ちながら、そのドアをぴしゃりと閉めた。

「もう来ないでくれない？ 多分、亀田だって二度と来ないと思うし」

※

——ばいばい。

麻子ちゃんがログアウトする前に言ったその言葉は、とても悲しかった。

私は、校舎と校舎を繋ぐ渡り廊下をとぼとぼと歩きながら、手に持ったお弁当箱を見た。

今日、帰ったら、すぐに連絡してみよう。

……ううん、今からだって、出来る。私は、腕時計型のスマホを、片手でぎゅっと握りしめた。

ああ、でも、通話中なのを学校内で見られたら、先生から怒られてしまう。

そうだ、だったら人目につかないところ——屋上にでも行けばいいんだ。

そう思って、私は急いで渡り廊下を渡り、上へ通じる階段へ行こうと、突き当りを曲がった時だった。

「うわっ」

「きゃっ」

曲がり角の視界に人が居たのに気付かず、私は思いっきりぶつかってしまった。

また、尻もちをつく。向こうで、どさ、と誰かが倒れる音がした。慌てて、「ご、ごめんなさいっ!」と謝り、顔を上げた。

そこに、龍介君が私と同じように、尻もちをついていた。

「つてえ……て、藤川っ」龍介君は私を見つけて、目を丸くさせた。

「ご、ごめんね龍介君! 私、前見てなかったから……!」

私は慌てて立ち上がり、龍介君の傍へと近寄った。

「お、俺は大丈夫。平気。藤川は?」

「私も平気だよ。本当に、ごめんね」

龍介君はそそくさと立ち上がり、「いいいいよ」と苦笑いしながら、側に落ちた私のお弁当箱と、龍介君のものだと思っ焼きそばパンを、拾った。

「ほらこれ」と龍介君はお弁当箱を私に差し出してくれた。私は「ありがとう」とお礼を言いながら、受け取った。

そこで、あれ、と私は思い、龍介君に聞いてみた。

「その焼きそばパン、お昼の? まだ食べてないの?」

すると少しだけ戸惑った様子で、龍介君は言った。

「あ、ああ。ちよっと、な。部活の用があって、それで食べるのが遅くなった、ていうか……」

「それならっ」

私は、受け取ったお弁当箱を掲げながら、言った。

「今から一緒に、食べても良い? ちよっと、龍介君だけにお話したいことがあるから」

「なっ」

龍介君は何故か途端に、顔を赤く染めながら、視線を彷徨わせた。不思議に思っただけで私が首を傾げると、龍介君はごほん一つ咳払いし、窓の外を見ながら、「良いよ」と小さく答えてくれた。

私は、ありがとう、とお礼を言っただけで、天井を指差しながら「屋上、行こう」と言った。

龍介君は、こくんこくんと、二回も頷いた。それがなんだか可笑しくて、私は小さく笑った。

龍介君だって——リュウくんだって、立派なアサちゃんのパーティ仲間なんだから。

だから、アサちゃんのことを話しても、きっと大丈夫だよ——？

※

「駄目、繋がらない」

私は三回目の通話を切って、ため息をしながらスマホを着けた腕を下ろした。

そっか、と隣で座る龍介君が、寂しそうに言った。

私は、膝の腕にあるお弁当箱を見つめながら、ぽつりと言った。

「……私、どうしたらいいんだろう」

——助けて。

麻子ちゃんの言葉が、ぐるぐると私の頭の中で巡っている。

どうしようも出来ない自分の歯痒さに、私は苦しくなった。

麻子ちゃんの家に行っただけで、お見舞いに行った方が良いのかもしれない。何度もそう思った。

でも、いきなり家を訪ねて行ったら、麻子ちゃん、困っちゃうかな。

そもそも、麻子ちゃんの家住所を、私は知らない。
連絡もちっともつかないし。

……だとしたら、残された手段は、『ワールド』なんだけど。

麻子ちゃん、ログインしているかなあ……。

私はため息をもらしながら、空を見上げた。

そこにはぼつぼつと白い綿雲が浮かんでいて、亀みたいにゆつくりと、一面の青い海を泳いでいた。

「――難しいな」

ふと隣を見れば、龍介君は焼きそばパンを片手で食べながら、あの青い空を見上げていた。

とても、悲しそうな目で。

「……俺さ、前にあいつと一緒にパーティ組んだことがあるんだよ。確か、あいつから誘われて。」

まあそこで、ちょっと色々話したりしたけど」

頭を恥ずかしそうに掻いて、しばらくしてから龍介君は口を開いた。

「最後にログアウトしていく時のあいつの背中、なんか寂しそうに見えた」

「そう、なんだ」

私は、そっと、目を閉じた。

記憶の中の麻子ちゃんが、ぼろぼろと涙を流している。

辛かった。

あんな表情の麻子ちゃんを見るのは、初めてだったから。

もしかして、麻子ちゃんはずっと、あんな寂しい思いを一人で抱えてきたのかな。

息苦しさを感じながらも、私はお弁当の卵焼きを箸で挟んで、口の中に入れた。

何の味も、感じられなかった。
いつものことだけれど。

私は卵焼きを無理やり飲み込んだ後、お弁当に蓋をして箸を仕舞った。

同時に、隣から声が聞こえて来た。

「藤川、もう良いのか？」

「うん。なんか、あんまりお腹空いてなくて」

私は笑いかけたけれど、上手く笑えたかどうかは、分からなかった。

龍介君は心配そうな目でこちらを見ていたけれど、やがて「俺もあんま空いてない」と言って、半分ほど残した焼きそばパンを、側に捨ててあったビニール袋の中へと突っ込んだ。

そして、そのビニール袋をじっと見つめながら、龍介君は言った。

「こういうのって、やっぱ、その人個人の問題だと思う。」

だから、俺たちには、どうしようも出来ないのかもしれないな」

私は龍介君の横顔を、まじまじと見た。

それは、寂しくなるくらいやり切れなさで溢れていて、見ているこちらが苦しくなるほどに、辛そうだった。

「――俺も、なんとなく分かっちゃうんだよ。亀田の辛さ」

ぽつり、と龍介君は言った。

私は、胸がどきんと鳴って、たちまちに息が出来なくなった。

「……え？」

「あ、いや」ハッと気付いた様子の龍介君は、私を見て慌てて笑いかけた。「何でもない、気にすんな」

やがて、何かの着信音が聞こえてきた。龍介君が、あたふたしながらポケットに手をつ込んだ。

そこから、持ち型スマホを取り出して、画面を見る。

瞬間、龍介君の顔にとっても苦々しい表情が走ったのを、私は見逃さなかった。

——あの時の、麻子ちゃんと同じ雰囲気を感じた、辛そうな表情。

私はつい、龍介君へと迫った。

「何か、嫌なことでもあったの？」

私が問いかけると、龍介君は慌ててその手にあったスマホをポケットにねじ込んで「なんでもねえから！」と立ち上がった。

そして横目で、ああそっかや俺、授業始まる前にやらなきゃいけないことがあったんだって、とわざとらしく言った。

「ねえ龍介君。さっきのメール、何か辛いことでも書いてあったの？」

私は引かなかった。嫌な感じが、私の心にまとわりついてくる。どくどくと脈が波立つ。

——もしかしたら龍介君も、麻子ちゃんと同じような辛さを、抱えているんじゃないの？

ねえ、お願いだよ。

私はもう——大事な友達が一人で悲しんで、一人で苦しむ姿なんて、見たくない。

「いや、そんなんじゃないってっ」

不自然に慌てる龍介君。やっぱりそうなんだ。私は確信した。私がその手にあるスマホに、手を伸ばした時だった。

逆に、私の手を、龍介君が掴んできた。

びっくりして龍介君の顔を見れば、私の伸ばした手の手首辺りを見つめながら、目を丸くさせていた。

「藤川、お前、これ……。怪我してるじゃないか」

急いで手首を見た。

いつの間にか、そこにはうつすらと血がにじんで、青みがかった色になっていた。ちっとも気付かなかった。

きっと、二回尻もちついた時、廊下ですりむいてしまったんだ。

「大丈夫か？」慌てながら、龍介君は言った。「悪い、俺とぶつかった時だよなきっと」

「う、ううん平気、大丈夫！全然痛くないから大丈夫だよっ」

今度は私は慌てる番だった。その手首をさっと背中に隠して、私は笑った。

龍介君はまだ、心配そうに私を見ていた。

「変色してるし、早く消毒とかしてもらったほうが……あ、ちょっと待てよ、俺、傷口の痛みどめの薬を――」

「そ、そんな、大丈夫だよ！

私、痛みなんてこれっぽっちも――」

そこで、私はハッと気付いた。

そうだ。

龍介君は、知らない。

私の、“病氣”のことを。

慌てて口を噤んだ。途端に息苦しくなって、この場にいるのが耐えがたくなってしまった。

「大丈夫だよ」なんて適当なことを私は早口に言いながら、そのまま龍介君に背を向け、屋上の出入り口へと走っていった。背後から、私の声を呼ぶ、龍介君の声が聞こえてきた。

何故か一番下まで階段を駆け降りた私は、はあはあと荒い息を押さえて、ばくばくと暴れる心臓に手を当てながら、廊下の壁にぴたりと額を寄せた。

「……そうだった……私は……」

私は、一人で、呟いた。

私はさっき、人が一人で悲しみを背負うのは見たくない、と思っていたけれど。

結局は、私も同じ気持ちを、抱えているんだ――。

Log 14 タウン↓多い茂る木々たちが寄り添う森

「あら、由梨。お帰り」

家の玄関を開けると、お母さんがリビングから顔を出して、お玉を片手に持ちながら笑顔で迎えてくれた。

私もなんとか笑顔で、「ただいま」と返した。

そして、靴を脱ごうと手を下に伸ばした時だった。

「ちょっと、由梨！ どうしたのその手っ！」

お母さんが、慌てた様子で玄関までやってきた。

びっくりして、私は湿布が貼られた手首を見た。

そういえば怪我をしていたんだっけ、てことに今更気付いて、慌てて「大したことないよ、すりむいただけ」と言った。

あの後、龍介君と別れてから、私は一応保健室へと立ち寄って、怪我の具合を見てもらっていた。先生は、「軽くすりむいただけね」と笑ってくれた。

でもお母さんは、深刻な表情をしたまま、私の手首を掴んだ。

湿布をしげしげと眺めながら、「本当に大丈夫なの？」と何度も聞いてくる。

途端、私は罪悪感に押しつぶされそうになって、本当に大丈夫だよ、と訴えた。

お母さんはあの事故以来、私の怪我に対しては、敏感になっていた。

それが嬉しくもあったし——辛くもあった。

やがて、はあ、とため息をつきながらお母さんは肩を落とした。

「もう……。びっくりさせないでよねえ」

「うん。ごめんね、お母さん」私は伏し目がちに謝った。

「……まあ、良いわ。なるべく気をつけなさいよ。」

それより由梨、喜びなさいっ！」

私はお母さんの方を見た。お玉を肩でぽんぽんとやりながら、キツチンへと踵を返す背中があった。

「今日の夕飯は、食べやすいものにしてあるから。」

どんっどん食べてくれちゃって、構わないわよお」

「……うん、ありがとう」

私はその背中にそっとお礼を告げて、スリッパを履いて急いで自分の部屋がある二階へと上がっていった。

※

やっぱり、麻子ちゃんはログインしていなかった。

入り口の街に踏み入れてから、慌ててログイン状況を確認してみたけれど、そこには虚しく「ログアウト」の字しか表示されていなかった。

私は肩を落としながら、街の道路の途中にぽつりと置いてあるベンチに、ぐったりと腰かけた。

これで、完全に麻子ちゃんとの連絡が、途絶えてしまった。

私は、自分の両手を眺めた。何をすることも出来ない、ちっぽけな両手を。

ふと気付いた。片方の手首には、湿布が貼られていない。

まあ、当たり前と言えば当たり前なのだけれど。

その部分をもう一方の手でさすり、その摩擦の熱を感じながら、私は思った。

この『世界』で怪我したら、きっと痛かったのかな。

どんな感じだったんだろう。

……って、いけない。今は、そんなことを考えている場合じゃないのに。

私はぶんぶんと一人頭を振り、とにかくどうすれば麻子ちゃんと接触出来るか、考えてみた。

でも、何も浮かんではこなかった。だって、手段は全部、断ち切られちゃったんだから。

はあ、と大きいため息をつきながら、空を見上げた。

今頃、麻子ちゃんは何をしているんだろう。

もしかしたら部屋の中で、一人寂しく泣いているのかもしれない――。

その姿を想像したら、ぎゅ、と胸が締め付けられた。

とにかく早く、麻子ちゃんに会いたかった。

会って、もう一度、励ましの言葉をかけてあげたかった。

でも――でも――

「……ああ、もう駄目だあ！」

私はつい一人でそう叫びながら、頭を抱えた。

焦りが積もっていくばかりで、もどかしくなっていくだけだった。

私は、長い息を吐き出しながら、通りを眺めた。

いつものように、そこには多くの人が行き交っている。ワンピース装置へ向かって歩く人の流れと、広場へ向かって歩く人の流れが主に出来ている。

その中に、立ち止りながら話し合いをしているグループも居れば、はしゃぎながら走りまわっている人もいた。

あ、今、その隣を歩いた男の子が転んだのが見えた。その近くで、

ぼうっと立っていた女の人が転んだ子に気付いて、起こしてあげている。良かった。

男の子はぺこりと頭を下げた後に、また走っていった。女の手を振った後、さっきまで立っていた定位置でまたぼうっとし始めた。

誰か、待っているのかな？ 待ち合わせ、とか。
そう思った時、私はあることに気付いた。

——そうか。

今の私にはきつと、麻子ちゃんが戻ってくることを信じて、待つことしか出来ないんじゃないのかな。

こちらから無理に会おうとしても、きつと——うん、絶対、麻子ちゃんは困るはずだ。

だったら、麻子ちゃんがいつか立ち直って戻ってきたときに、私はそれを暖かく迎えてあげるしかないんだ。

私のお母さんが、「おかえり」と言ってくれたように。

……うん、きつとそうだよ！

そのことに気付くと、なんだか私は心が軽くなった気分で、思わず立ち上がって「よし！」とガッツポーズしていた。

——でも。

どうやって迎えてあげよう？

頭の中に、新たな疑問が浮かび上がってきた。私はまたまた、うん、と唸ってしまった。

何かパーティーするとか？ ……でも、それってなんだか大げさすぎる。

なら、小さなクラッカーでも鳴らして、「おかえり」と言っ
てあげる、とか！

……それもなんか、パーティと変わらない気がする。
そして、私がうんうん唸りながら、ベンチの前で立ち尽くしていた時に。

通りの向こう側から、大きな声が聞こえてきた。

「えー……ただいまあ、我々のギルドお、『世界旅行し隊！』はあ、ギルドメンバーをお、募集しておりますあす！

みなさまあ、是非ともお、宜しくお願いいたしまああす！」

私は不思議に思っ、そちらの方向へと顔を向けた。

大きな人の流れを挟んだ向こう側、建物と建物の間の隙間辺りで、その声を張り上げている男の人が見えた。

金髪の頭が激しく揺れているのが、とても目立っている。

その金髪の人は、卵型に形作った両手を口に当てながら、またもや叫び出した。

「我々のギルドはあ、さきほど出来たばかりのお、新しいギルドですのでえ、ご安心くださあい！」

そしてえ、我々ギルドの目的はあ、この『ワールド』の世界のお、ほとんどのプレイヤーが知らないような素敵な場所をお、巡り歩くことでございますう！

なのでえ、戦闘キライなかたもお、是非ともお立ち寄りくださいー！」

『ほとんどのプレイヤーが知らないような素敵な場所を、巡り歩

く。』

そのフレーズに、私はとても魅かれた。心がぐいと引っ張られるように。

そして、ぴん、と頭の中で何かが閃いた。

——そうだ。

そんな、「素敵な場所」という所を、麻子ちゃんに——アサちゃんに案内してあげる、ていうのはどうかな？

私はいつも、リアルや『ワールド』二つの世界で、色々と助けてもらったり、教えてもらってばかりだから。

今度は私が、案内してあげるんだ。

それで、少しでも元気になったり、感動してもらえれば。

それは、アサちゃんだけじゃない。リュウくんにも。

リュウくんにだって、色々とお世話になっているんだし。それに、今日のあの様子だと、何か悩み事とか抱えているかもしれない、と思ったから。

二人が、元気になってもらえれば——。

うん。そうだよ。

それが、一番良いかもっ！

私は急いで、通りに流れる人の流れを横切った。

必死にそれらを掻き分けながら、こちらと逆の方向へ顔を向けて叫ぶ男の人に、私は大きく手を振りながら、負けじと叫んだ。

「すみませーん。私、そのギルドに入りたいですーっ！」

※

タウン↓多い茂る木々たちが寄り添う森

ワープ装置を抜けた時、目の前に広がる光景を見て、私は思わず「うわぁ」と声を上げていた。

そこは本当に、深い森の中。

左右どちらを見渡しても、青々とした葉っぱを頭上に抱えた木々たちが立っていて、奥の方までずうっと続いている。

ワープ装置を中心に、半径三メートルほど雑草だけが多い茂る場所に私は立ちながら、思いつき深呼吸を試みた。

自然の匂いをたっぷり含んだ、懐かしい香り。

嬉しくなって、まるで誰かにくすぐられたように、一人で笑ってしまった。

「さあさあ、どーですか皆さん。ここ、素敵な所でしょー？」

私の後ろにいた金髪の男の人——ギルドリーダーさんが、えっへん、と胸を逸らした。

周囲が緑に囲まれている中で、その金髪に輝く髪と、蛇みたいな模様に覆われたちよつと赤っぽい服装は、ここでもすぐ目立っていた。

「うっひょー！ すっげえ！」

「へえー。これは凄いわねえ……」

リーダーさんの両隣りにいた、ちよつと小太りの男の人と、赤色の髪をくるくるとカールさせ、少し化粧の濃い女の人が、同時に呟いた。

「はい、これは、すごいです」

今度は小さくて可憐な声が、すぐ隣で聞こえた。

見ると、青色のセミロングの髪をした、私より五センチぐらい背の低い女の子が、目をきらきらさせながら首を巡らせていた。

「実は実はあ。このタウン、特定のプレイヤーしか立ち寄ることが出来ない、貴重な場所なのです！」

リーダーさんは、人差し指を立てながら言った。

「なんと、ある特定の依頼を制限時間内にクリアし、その後入手したパズワードを、入り口の街のどこかに隠されている宝箱に入力し、その中に入っている宝玉を、これまた制限時間以内に特定のダンジョンの最深部に置くことで、ようやくたどり着ける場所なのさ！」

「うわ、めんどくさっ。あなた、良くそれクリア出来たわねえ」

化粧の濃い女の人が、目を丸くさせながらリーダーさんを見た。

リーダーさんは、あはは、と豪快に笑った。

「めっちゃ苦労したんだぜえ？ 他にも、こういう所知ってるんだ。凄いだろお！」

……でもさ、そんな素敵な場所、俺だけ一人見に来て、つまらないと思って。だから、このギルドを立ち上げたのさ」

あ、そうそう。リーダーさんは、ほんと手を叩きながら、にこりと言った。

「さてさて。目的地に着いたことだし、ようやく自己紹介と行きましょうか！ まず、俺からね」

ごほん、と咳払いした後、リーダーさんはぺこりと頭を下げた。

「本日出来たギルド、『世界旅行し隊!』のリーダー、セバスチャンです。」

実はギルド作るの初めてで、色々至らないところあるかもだけど、そんなとき宜しくな!」

「セバスチャンっ」小太りの男の人が、からからと笑った。「おもしろー名前っ。サイコー」

「んじゃ次、あなたね」

リーダーさんは、隣にいた赤髪の女の人を指した。

指名されたその人は、ふふん、と片手で髪を掻きあげた。

身にまとったチャイナ服に刺繍された金色の糸が、きらりと光ったように見えた。

「皆様、初めまして。あたくし、セレスティーヌと申します。」

このギルドに入る前にあるギルドに入っていたのですが、つまらないので辞めました。

そこで、このギルドの紹介文見て、なんだか楽しそうと思って参加させて頂きましたわ。以後、お見知りおきを。

ちなみに、前のギルドでは”セレス”やら”チャイティー”やら呼ばれていたけれど、まあ、任せるわ」

「うん、じゃ、キミはこのギルド内では”セレス”と呼ぼう!」と、リーダーさんは楽しそうに言った。

「チャイティーっ」また、小太りの男の人が笑った。「可笑しな名前っ。わははっ」

「ちよつとあなた! さっきから人の名前で笑うの、ヤメて下さない!?!」

セレスさんが頬を赤らめながら怒ると、その人は一層大きな笑い声を立てた。

リーダーさんが呆れたように肩を竦めながら、「んじゃ今度キミ、

紹介いってみよっか」と促した。

「あ、オレー？ オレかあ、えっと、名前こう書くんだぜええ」

その人は、身につけているワイシャツの胸元に描かれている文字を、指差した。

「……は？」 「何コレ？」 セレスさんとリーダーさんが、その部分をまじまじと見つめながら、首を傾げている。

私も、その後ろから覗いてみた。

そこには、” e e 漢 G ー！” と書いてある。

「……」 良い感じ”？」 と、私が思ったまま口にしたら、「おお、そうそう、それー！」 と私を指差して、また愉快に笑った。

その姿はなんだか、昔に流行った「踊るサンタクロース人形」みたいな人だなあ、と思った。思わず笑ってしまう。

「……うーん、呼びにくいなあ……」

じゃあ、キミのこと、『いーくん』、でも良い？」

リーダーさんが、むむうと唸りながら尋ねると、「わははっ、いーくん、いいねえ、面白っ」と、いーくんは笑った。

そして自己紹介の番が、私にまわってきた。私はぺこりと頭を下げながら、

「リリィと申します。私、ギルド入るの初めてなので、どうぞよろしくお願いします」

と、短く挨拶した。

顔を上げると、リーダーさんとセレスさんが優しい眼差しで「よろしく」と言ってくれた。

いーくんは相変わらず、「リリィ！ 可愛い名前っ。わははっ」と笑ってくれた。私も、つられて照れ笑いした。

ふと皆の視線が、私の隣に向けられた。

私もそちらに視線を遣った。

皆の視線を向けられた青髪の女の子は、その大きくて青い瞳をきよとんとさせた後に、事情をようやく察したのか、私たちをぐるりと見渡しながら微笑んだ。

「えと。私、ロロ、います。」

実は、アメリカのサーバーから、こちらに來ています。どうぞ、よろしく」

——アメリカ!?

私はびっくりして、「アメリカあ!」と言いながら飛び上がってしまった。

ロロちゃんがそんな私を見て、にこり、と小さく微笑んだ。

「はい、そうです。日本のサーバー、興味があつて、やってきました。」

同時翻訳モード、なんで、聞き取りにくいと思いますが、どうぞ宜しくお願いします」

「へえー。アメリカからのお客様だなんて、珍しいわね」セレスさんが、感心したようにロロちゃんを見ている。

「うっひょー。アメリカ。すげえ」相変わらずいーくんは、からからと一人楽しそうに笑っている。

「サーバー跨ぐのに、結構お金かったんじゃないの?」リーダーさんは目を丸くさせながら、ロロちゃんに尋ねた。

「お金、かかりました。でも、『ここ』の世界をもっともっと、知りたい思つて、飛んできました」

にこり、と可愛らしく微笑むロロちゃんを見て、私は息をするのも忘れるぐらいに、心が跳ね上がっているのを感じた。

アメリカ。アメリカだなんて。

海のずっとずっと向こうの、言葉が違う世界からやってきた女の子。

そんな子が、目の前に居るだなんて。

とても信じられないし――何より、凄いつ！

そう思うと居ても経ってもいられなくなって、ロロちゃんの両手を、ぎゅっと握りしめた。

「あの、宜しくね、ロロちゃんっ！」

「え、あ、は、はい」

ちよっと戸惑ったロロちゃんの顔。

そこで、私が必死になってぶんぶんとその腕を上下に振っていたことに気付いて、慌てて「ご、ごめんねっ」と手を離れた。

「ちよつとあなた、何をやっているのよ」と、セレスさんが呆れたように笑いながら、言った。

急に恥ずかしくなってきた、ぱつと顔を地面に伏せたら、今度は私の手に、ロロちゃんの手が重なった。

「ありがとう。すごく、嬉しいよ」

その一言で胸がいっぱいになって、私は照れ隠しのようにな、てへへ、と笑った。

「さーて。皆さん、自己紹介が済んだことだし、このタウンの中を、優雅にお散歩でもしようじゃありませんかっ！」

リーダーさんが、拳を上突き上げながら、元気の良い声を張り上げた。

私たちも、「おーっ」と明るい返事を返した。

その後に、いーくんが一人からからと笑う声が、森の中に響いていった。

※

私たちのギルド『世界旅行し隊!』は、ほのかに明るい森の中を、
わいわいとお散歩した。

最初の方は、リーダーさんが先頭を歩きながら、秘境を探すのに
どれほど苦労したか、という自慢話をしていただけれど、その内
セレスさんやいーくんがちよっかいを出して、いつしか三人ではし
やぎまわっていた。

その後ろで、私とロロちゃんは、お互いのことを話し合った。

いつ『ワールド』をやりはじめたのか、とか、アメリカの『ワー
ルド』はどんな感じなのか、とか。ほとんどは『ワールド』に関連
する話だった。

ロロちゃんは、『ワールド』自体を始めたのは一年ほど前で、こ
うやって異国のサーバーに踏み込んだのも今回が――日本が十数カ
国目だってことを、教えてくれた。

どこの国の『ワールド』もそこまで変わらない、という話を聞いた
時、私が「もっと色んなバージョンがあるかと思ってたよ」と言
ったら、くすくすと笑ってくれた。

ともかく、ロロちゃんとお喋りしている間、私はもう胸のどきど
きが止まらなくて、何度も何度も笑い声を立てた。

初めてのギルド。初めてのネット上でのお友達。

初めての、外国のお友達。

笑い声を立てる度に、葉っぱや土の匂いが鼻をくすぐってくる。
一步一步進むごとに伝わる草の柔らかい踏み心地も、まるで私を
大きく迎えてくれているようだった。

私はもう、胸がはちきれそうだった。

『ワールド』は、やっぱり、すごく楽しい！

Log 15 ダンジョン↓天までその命を輝かせる火山

「さすがに……あ、暑いな……」

「うへえ……」

前を歩いていくリーダーさんといーくんの背中が、おじいちゃんみたいに曲がっている。

両手をだらんと垂らしながらよぼよぼと歩くその姿は、なんだかそっくりだった。可笑しくてつい頬を緩めると、額から一筋の汗が落ちてきた。

「もー！　なんで今度はこんな暑苦しい場所にしたのよ！」

ふいに、私の隣にいたセレスさんが叫んだ。リーダーさんは、振り返った。

「だって、昨日は寒すぎるところだったから、『今度は暑いところが良い』って言ったの、キミじゃないか」

「あなたねえ！」セレスさんは頬を膨らませた。「だからって、暑すぎる場所選んでどうするのよ！」

「いやだって――」

「あああ、もう、ちゃんと考えなさいよっ」

そう叫ぶセレスさんの頬から、また一つ、汗が流れおちた。

――暑い。

そう思うと、途端に肌にまとわりつく熱を感じて、ぶわっと全身から汗が噴き出てきた。

私は、顔から流れ出た汗を、手の甲で拭った。

確かに、暑いけれど。

でも、やっぱりそれが、嬉しかった。

※

森のお散歩があった日から、私たちギルドメンバーは、色んな場所へ行った。

オーロラのような幻想的な場所だったり、ちょっとお化けが出てきそうな不気味なお城の中だったり。

新たな場所に一步踏み込む度に、私は一々感動していた。こんな素敵な場所が、『ワールド』にあったなんて。

二人が知ったら、どう思うかな？

ちなみに昨日は、一面が氷漬けになったような氷山の中を歩いた。そこで皆寄り添いあいながら、進んでいった。

しばらくしてから、セレスさんが「こんな寒いのにやー！」と駄々を捏ねてしまって、すぐお開きになってしまったけれど。

そして今日も、リーダーさんから集合メールが送られてきた。

私はもちろん、意気揚々と集合場所へ向かった。

その時には既にメンバー全員揃っていて、私が着くなり、リーダーさんは嬉しそうに言った。

「本日は、とってもダイナミックな場所へ行こう」と。

私は「ダイナミック」の言葉に、とってもわくわくしていた。

セレスさんが「寒くない所？」と聞いたら、リーダーさんは自信たっぷりに頷いた。

セレスさんは胸をなで下ろして、いーくんは「だいなみつぅ」とはしゃぎまわって、ロロちゃんは「楽しみです」と笑った。

そして着いた場所が、ここだった。

ワープ装置からどこかへ繋がる一本道がずっと奥まで続いている、その両側が火の海に囲まれた、立派な火山の中。

火の海は、時々ぼこぼこ音を立てながら、火の噴水を出していた。

私たちは今、この道を真っ直ぐに突き進んでいる。

※

「まったくもー……。何が『ダイナミック』なのよ……」

私のすぐ隣にいたセレスさんが、両手を扇のようにパタパタと仰ぎながら、辛そうに言った。

「あの、大丈夫ですか？ セレスさん」

「……全然大丈夫じゃないわ」

ふう、とため息をつきながら私を見るセレスさん。

「リリィ、あなたはどーなのよ？」

「私は、なんとか大丈夫です」

笑顔で返すと、信じられない、といった様子でセレスさんが口をぽかんと開けた。

その後に、「若いっていいわね」と言いながら、ぷいと顔をそむけてしまった。

「ロロちゃんは……大丈夫？」

私は後ろへ振り向きながら、一步後ろで歩いているロロちゃんに尋ねた。

キョロキョロさせていたその視線を私へ向けたロロちゃんは、にこりと微笑んだ。「はい、大丈夫」

「うへああ……オレもう限界」

その声で前を見れば、いーくんが一本道の上で、ぱたりと倒れてしまっていた。

「ちよ……そこで行き倒れるな、いーくんっ」

隣にいたリーダーさんが、慌てて言った。

「俺は、キミたちをこの奥にある『ダイナミック』な場所を案内しようとしているんだ。そこで倒れられては困るんだ！」

それでもいーくんは動く様子がなくて、うーんうーんと唸りながらばたばたと手足を動かしている。

それがなんだか子供みたいで、可愛かった。

「……おっかしいなあ。ここら辺で、何かあった筈なんだけどもなあ」
リーダーさんは、そう呟きながら頭を掻いた。

私が「何かあるんですか？」と聞くと、「うーん」と唸っていた。
「確か、ここら辺で何かイベントみたいなのがあって、それをやった後に、『ダイナミック』な場所へと行けた、と記憶しているんだけど……」

「なによそれえ。その、『イベントみたいなもの』って一体何なの？」

ついにはセレスさんも、足をよろめかせながら前へ倒れそうになったので、慌てて身体を支えてあげた。

「いや、実はさ、俺がここに来たの、一年ぶりで……ほとんど記憶がなかったりして。あはは」と、リーダーさんは笑った。

「『あはは』って……ちょっとあなたねえ、ホント、しっかりしなさいよお！」

セレスさんが急に起き上がったから、あたしはびっくりして支えていた手を離しそうになってしまった。

リーダーさんは、うーんうーんと唸った。

それを見たセレスさんは、呆れたようにぶーぶー文句を言う。

その間、いーくんは相変わらず、地面でばたばたと小さく暴れている。

——このギルドメンバーの人たちは、とても愉快で、楽しい。

「リーちゃん、楽しそう」

いつの間にか私の隣まで来ていたロロちゃんが、柔らかい笑みで、ちよんちよんと私の頬をつついた。

私は、えへへ、と笑った。

と、その時。

何かが唸るような、低い物音が遠くから聞こえてきたような気がした。

私が、その方向――進行方向のずっと奥――に視線を向けた時に、ロロちゃんが同じ場所を指差しながら言った。

「あれ……あそこ。何かいます」

よく目を凝らしてみると、確かにうつすらと黒い影みたいなものがあつた。

それはなんだか、動いているようにも見える。

「うつひょう！　もしかしてもしかして、モンスター！」

地面をクロールしていたいくんが、いきなりエビみたいに飛び上がった。

同時に、「ああそうだ！」とリーダーさんが叫んだ。

「思い出した！　確か、あるモンスターを倒した時に、上まで続く道が出来た筈だ！」

「ええ！　じゃあ、あれ、倒せてこと！？」

「まあそうなるね」

「ちよつとお！　あなた、最初の時に『戦闘しない』て言わなかったあ！？」

「……あれえ？」リーダーさんは、頭を掻きながら、あはは、と笑った。「そんなこと、言ったっけえ？」

「なっ！ あなたねえ！」

と、セレスさんが文句を言っている間に、いーくんとリーダーさんは、先の方まで走って行ってしまった。

私とロロちゃんて苦笑しいいながら、セレスさんの両側を二人で支えてあげて、その後を追った。

※

その影の正体は、やっぱりモンスターだった。

それは、通路の一番奥に出来ている円型の地形の真ん中で、佇んでいた。

最初の印象としては、赤い海の真ん中で漂う、イソギンチャク。

身体全体は薄い青色になっていて、その長くてうにようによさせた複数の触角を、あちらこちらに伸ばしている。まるで青い海を求めているみたいに。

セレスさんは一目見ただけで「き、気持ち悪いわっ！」なんて叫んでいたけれど、私は可愛いなあと思った。

特に、触角の内の二本の先についている、くりくりとした目玉とか。

あれを退治しようという話になった時はちよっぴり悲しかった。

でも、『ダイナミック』な場所に行く為には仕方のないこと。

私も、皆に続いて、自分の武器である杖を取り出した。

リーダーさんの武器は、拳銃。いーくんは、棍棒。セレスさんは、鞭。そしてロロちゃんは、私と同じ杖。

ロロちゃんの杖は、先端に水晶みたいに透き通った玉が乗っていて、左右に小さな羽がついている。

まるで宇宙の全てをそこに閉じ込めたような水晶玉の輝きに、私はつい釘付けになってしまった。

他の皆も、食い入るように見つめた。

これが、アメリカカクオリティー、てやつなのかな？　そう問いかけたら、ロロちゃんはにこりと笑った。

リーダーさんは、皆の武器を確認すると、よし、と頷いた。

「とりあえず接近攻撃の三人で突っ込んで、適当に二人に回復してもらいながら攻略しようか！」

いーくんが「きょーこーとっぱー」と、さっきまで駄々をこねていたのは嘘だったみたいに陽気に笑っていた。

セレスさんは「気持ち悪いから早くやりましょ！」と身体をぶるぶる震わせながら言った。

「オーケー。じゃあ、とっとと突破しちゃいませよーか。

お二人さん、回復、あと補助魔法とかも、宜しくね」

はい、と返事する声が、ロロちゃんと重なった。

その後に、リーダーさんが先頭になって、三人はイソギンチャクへ向かって、走っていった。

「リィちゃん。頑張ろう」

ロロちゃんが、隣からにこりと声をかけてくれた。

私も、うん、と笑顔で頷いた。

「頑張ろうね！」

でも、私、上手く出来なかったらごめんね。実は、あんまり戦闘経験なくて」

えへへ、と頭を掻きながら言ったら、ロロちゃんが「大丈夫」とゆっくり頷いてくれた。

「私、回復やるよ。リイちゃん、補助魔法宜しくね。
コツは、皆の動きを良く見て、『助けてあげたい』て気持ちになること。」

その気持ちがあれば、大丈夫だよ」

『助けてあげたい』という気持ち。

ふと、頭の中に、リュウくんやアサちゃんの顔が思い浮かんだ。
杖をぎゅうっと握りしめて、目を閉じた。そして、私は、ゆっくりと頷いた。

「……うん！　そうだね！」

目を開いて、イソギンチャクに飛びかかる三人を見つめた。
今の私の役目は、あの三人を、助けることだ。

※

「いやー、結構簡単だったねえ」

「サイコーサイコー、気分サイコー」

「全然サイコーじゃないわ、未だに気持ち悪いわ……あの感触。うええ」

イソギンチャクが消えてしまった後、上へと延々と続く階段が、目の前に現れた。

リーダーさんといーくん、セレスさんが先頭に立って、私たちメンバーは、階段を上り始めた。

一段ずつ上がっていくと、火の海から徐々に遠ざかっていって、

同時に肌にまとわりつく熱さからも離れていっているような気がした。

「ロロちゃん、さっきはありがとう」

私は隣で肩を並べるロロちゃんに向かって、私は微笑んだ。

「なんかさっきの戦闘、ほとんどロロちゃんがやってくれた、て感じだったよね。」

ごめんね、私、あんまり役に立ってなくて」

ロロちゃんは、ふるふる、と頭を左右に振った。

「そんなことない。リィちゃん、すごく頑張ってた」

えへへ、と私は照れ隠しみたいに笑った。

優しい眼差しでこちらを見てくるその二つの瞳は、透き通った青色で、やっぱりすごく綺麗だなあ。

「ロロちゃんはさ、結構戦闘慣れしてるんだねえ。すごいなあ」

私は思いついた台詞を、そのまま言葉にした。

そしたら、ロロちゃんは黙ってしまって、俯いてしまった。

あれ？

どうしたんだろう。

「……それしか、私には、楽しみがなかったから、でしょうね……」

「——え？」

ロロちゃんは、立ち止った。

私も、一歩先で同じように止まった。

「私には……今、『ここ』に居ることが、全てだから」

こちらを少し見上げてくるその顔は、下から照りつける赤色に染まりながら、悲しく微笑んでいるように見えた。

私は一瞬にして、胸が苦しくなった。

「……どうしたの？　ロロちゃん」

私は近づいて、その手を握った。

何も言わずに、今にも泣き出しそうな目をしながら優しく微笑むロロちゃん。

先の方で、楽しそうにお喋りする会話が、どんどんと遠くになっていく。

私が三人に向かって、待って、と呼びかけようとした時だった。

「リィちゃん」と、私を小さく呼ぶ声が、聞こえてきた。

「リィちゃんは、なんで、『ワールド』をプレイしていますか？」

どきん、と大きく心臓がとび跳ねるのが分かった。

慌ててロロちゃんを見た。

その表情はやっぱり辛そうで、でも誰かに今すぐにでもすがりつきたいような弱さを、必死で隠しているような瞳が見えた。

——アメリカから、一人で来た女の子。

——お金をかけてまで、外国のサーバーにまでやってきた、小さな女の子。

その姿は突然、儚くて今にも壊れてしまいそうに、見えた。

私は……胸の前に置いた手を、握り締めた。

——きつと、私と同じなんだ。
そう思った。

だって、私は、その言葉を知っているから。

その言葉の重みを、私は、誰よりも一番良く、知っているから。
不安に駆られる気持ちを抑え込みながら、私はそつと、尋ねた。

「何か、辛いことでも、あるの？」

目の前の女の子は、その瞬間、信じられないといった風に目を丸くさせた。

しばらくして、その目が徐々に、潤んでいく。

どうしたの。もう一度、私は優しく尋ねた。

ふ、と目の前の小さな女の子が、悲しそうに笑った。

「——なんででしょう。」

今まで、色んな国のサーバーの、色んな方に会ってきたけれど。

リイちゃんになら、私、全て、話せる気がします」

すると突然、私の左手がその小さな両手に包まれた。

私はその温もりを感じながら、じつと次の言葉が出るのを待った。

やがて。

「ロロちゃんは、泣き出しそうな声で、言った。」

「私……あと半年で、死ぬかもしれないんです」

息をするのを、途端に忘れた。

ロロちゃんはさつきよりも、強く力を込めて私の手を握りしめている。

そして、その顔を伏せながら、ロロちゃんがゆっくりと言葉を繋いでいく。

私は静かに、耳を傾けた。

※

——癌が発覚したのは、一年前のこと。

お医者さんには、もう無理だ、一年半ぐらいしか持たないとはつきり言われ、取りあえず形だけの治療を、今もしているらしい。

そんな入院生活を初めてから一か月続けた時に、ロロちゃんはあることにふと気づき、急に恐くなった、と言った。

このまま、この白くて狭い病室に閉じ込められながら、死んでいくんだ、といったことを。

ロロちゃんには、夢があった。

それは、『世界の色んな景色を見たり、その国の人たちと交流したい』、という夢。

そしてある日、『ワールド』というゲームを知る。

ロロちゃんは、そこでなら、夢を叶えるんじゃないか。
そう思って、すぐに買ってもらい、プレイし始めたという。

狭い病室の中から唯一抜け出せて、色んな場所に行くことが出来て、色んな人に会える。すごく、感動した、と言った。

その内、他の国のサーバーに行けることも知って、親にすがりつくように頼んだ。すぐに、承諾してくれた。

そして、わくわくした気持ちを抱えながら、遊びに行ったこと。

そこには様々な国の人の形があって、場所があって、空気があることを感じた、とロロちゃんは語ってくれた。

それを感じながら、すごい、すごいと言いながら、思わず泣いた、と教えてくれたその顔は、涙でぐちゃぐちゃになっていた。

私は何も言わずに、そっとその小さな体を、優しく抱きしめてあげた。

——“生きている”って感じが、したんです。

その一文が、私の心に一番響いてきた。

”生きている”。

私は、さっきよりも強く、その小さな身体を抱き寄せた。

私の腕の中にある小さな温もりは、確かに今、ここにある。ちゃんと、私にも伝わっている。

ロロちゃんは、確かに今、ここに居る。

——分かるよ。

その気持ち、すごく、分かるよ。

「大丈夫だよ、ロロちゃん。

その気持ち、すごく、良く分かるから。

だってね。

私も、同じ気持ちだから」

ロロちゃんが、そのぐしゃぐしゃになった顔をぱっと上げた。

私は、えへへ、とほほ笑んだ。

同時に頬から、汗が一筋、流れていった。

「私もね。

ある、特殊な”病氣”に罹ってるんだ」

Log 16 『リュウくん・アサちゃんへ』

火山での冒険を終え、入り口の街に着いた。

そこで、私たちは解散することになった。

皆で、ばいばい、またね、と挨拶しながら。

いーくんは「またねえ、今度はもっと楽しい冒険しよーねー」と、からからと笑いながら、走っていった。

セレスさんは「あなたたち、汗だくだと思うから、ちゃんとお風呂入りなさい」と優しく忠告してくれた。

リーダーさんは「皆、お疲れ様。今度はもうちょっと楽なところにするよ。安心してね!」と笑いながら手を振ってくれた。

そして最後に、私とロロちゃん、二人きりになった。

ロロちゃんは、杖を取り出し、それを私に差し出しながら「これ、リイちゃんにあげる」と言ってきた。

私はびっくりして、「そんな、これロロちゃんのだよ、駄目だよ」と手を振りながら断った。

でも、ロロちゃんは力を込めて、私にその杖を押しつけてきた。

「お願い、受け取って」と。仕方なく、私はそれを受け取るしかなかった。

ロロちゃんは、ぺろりと舌を出しながら「大丈夫。他にも杖、持ってるから」とほほ笑んだ。

杖の先端に着いている、きらきら輝く水晶玉を見た。

私はつい見惚れて、「綺麗だね、この杖」と言ったら、「実はレアものなんだよ」と教えてくれた。

それなら余計、もらっちゃうが悪い気がして返そうとすると、やっぱりロロちゃんはふるふると頭を横に振りながら言った。

「今日、私の話、聞いてくれたお礼。
リイちゃんに、どうしても受け取ってほしいの。お願い。

それと、リイちゃんのこと、応援してる。

辛いかもしれないけど。

でも、大丈夫だよ」

その言葉に、私は胸がじいんと熱くなった。

思わず、えへへとほほ笑みながら、「ありがとう」とお礼を言った。

ロロちゃんは、今度はイギリスのサーバーに行こうかな、と小さく言った。

それじゃあ、もう日本のサーバーには来ないの？ と慌てて尋ねたら、また来るよ、絶対、と言ってくれた。

そして二人で、約束を固く誓いあうように、手を握り合った。

それから、私とロロちゃんは、お互いに手を振りながら、またね、と言って別れた。

※

『ワールド』からログアウトして顔を上げた時、パソコンから放つ光がまぶしくて思わず目を細めた。

私の部屋は、すっかり闇に覆われていた。

私は立ち上がって、電気を付ける。ぱちんと乾いた音に、ほのかな光が部屋を満たしていく。

すると、トントンと扉を叩く音が聞こえてきてきたので急いで開けると、そこにお母さんが立っていた。

夕飯の時間、ちよっと過ぎてるわよー、と苦笑しながら言うお母

さんに、ごめんなさい、と謝りながら時計を見た。本当だ、もう七時になってる。

また『ワールド』やってたんでしょ、と聞いてきたので、うん、と頷くと、あんまりやりすぎないようにしなさいよ、と優しく言うてくれた。

私はお母さんに続いて階段を降りながら、気付いたら、ありがとう、と小さく呟いていた。

居間へ向かって、そのテーブルの上にラップして乗せられている料理を見た。

シチューだった。側に、パンとお茶が置いてある。

冷めてるから安心して、とお母さんは言って、自室へ行ってしまった。

私はスプーンを手に取り、シチューを喉へ流し込んだ。

相変わらず、何の味も感じない。――感じられない。

ことり、と食器を注意深くテーブルに置いて、私はふうと息を吐き出しながら、今日の冒険のことを思い出していた。

真っ赤に燃えあがる火山。肌にまとわりつく熱気。ギルドメンバーで協力した初めての戦闘。そして――

胸がどきどきと高鳴って、居てもたってもいられなくなる。

――ああ、早く、早く誰かに、今日あったこの出来事を、伝えたい！

すぐ、頭の中に龍介くんと麻子ちゃんの顔が、思い浮かんだ。すると少しだけ、胸が痛くなった。

麻子ちゃんは、あれから一週間経った今日も、結局姿を見かけることはなかった。

試しに電話してみても、虚しいコール音が続いていくだけ。

本当に、大丈夫なのかな。

ちゃんと、何か食べたりしてるのかな。

龍介くんはなんだか部活の方が忙しいみたいで、屋上で話して以来、あまり会えていなかった。

休み時間も慌てたように出ていく龍介君。無理、してないのかな。今日、教室でちらりと見かけた龍介君の顔は、少し疲れたように見えた。

なんだか、寂しかった。

味のしないパンを噛みながら、ふと、私は思った。

——そうだ。手紙。

手紙を、書いてみようかな。

それなら、時間を気にせず送れるし、この思いを丁寧に、二人に伝えることが出来ると思ったから。

思い立ったらうずうずしてきて、私はついに、夕ご飯もそこそこに残して、急いで部屋へと戻っていった。

心の中で、お母さんごめんね、と謝りながら。

部屋に着いたら早速パソコンを立ち上げ、『ワールド』のマイページを開いた。

そこにある「メーラー」を立ち上げて、私はさっそく、この思いを字に綴っていった。

タイピングする手は、とても軽かった。

※

『題名…リュウくんへ アサちゃんへ

送信者…リリイ

内容…

こんばんは。リリイです。

二人とも、お元気ですか？ 突然、ごめんね。

今日、二人にどうしても伝えたいことがあって、メールを送らせていただきました。

本当は、二人別々に送れば良かったかなと思ったけど。

でも、二人同時に伝えたいことがあるし、私も二回同じことは書けないかなあと思ったから、一気に送っちゃいますね。

(コピーしてペーストする手もあるけど、あまり好きじゃないんだ。なんとなく)

実は私、最近になってギルドに入りました。

そのギルドの名前は、『世界旅行し隊!』。

名前の通り、『ワールド』の色んな所を巡り歩こう、というギルドなんだ。

そのギルドが出来上がった三日前に、同時に私も入りました。

私含めて五人なんだけど、とっても賑やかなギルドなんだ! (笑)

まず、リーダーさんは、とってもお茶目な人なんです。

名前はセバスチャンって言って、礼儀正しいところもあるんだけど、おっちょこちょいなところもあって。優しい人なんだあ。

あと、いーくんという人もいて(本名は”ee漢G!!”なんだけど/笑)、その人は、なんだか子供っぽくて可愛い人。

いつも笑ってるのが特徴的で、素敵だなあと思います。

素敵な人といえば、セレスティヌさんもいます。私たちは「セレスさん」て呼んでる、チャイナ服の女の人なんだけど。

なんだか『大人の女性』って感じのオーラで、いつも周りに気がつかけてくれています。私も、あんな女性になりたいなあ。

そして、メンバーの中で私が一番びっくりした人が、ロロちゃん。なんと、アメリカのサーバーから日本にやってきたそうなんです。二人は、外国のサーバーから来た人と会ったこと、ある？

今のところ、ギルドメンバーの中で一番仲が良い子です。とても優しく、笑顔がかわいい子なんだ。

いつか近い機会に、二人に紹介してあげる。

そして私は今日、ギルドの皆と一緒に、火山の中を冒険しました。その時に、その子と色んなお話をしたんだ。

『ワールド』についてだとか、外国のサーバーについてだとか、ある時は、リアルな状況だとか。

実はね、その子、詳しい話を聞いていくと、重い病気を患っていて、夢をかなえる為に『ワールド』をプレイしているんだって。

（あんまり詳しく書くと、プライバシーに関わっちゃいそうだから、やめとくね）

私、その子の気持ちがすごくよくわかるから、悲しい気分になったんだ。

私も、ある”病気”だから。

麻子ちゃんは、もう知ってるよね。

龍介君には、まだ伝えていないんだよね。

この前、屋上で龍介君とお話したとき、私、びっくりして逃げるように出てちゃって、ごめんね。

あの時はまだ、心の準備が出来ていなかったんです。

私はなるべく、この“病気”について、人には教えないようにしていたから。伝えることで、相手に嫌な思いをさせるのが、辛かったです。

でも、今度、リアルで会ったとき、龍介君にも伝えよう、と思っています。

私の本当のこと、知ってほしいと思ったからです。

話がちょっと逸れてしまいましたが、今日の火山の冒険の話に戻るね。

ごめんね。文章書くの慣れてるつもりだったんだけど、やっぱり下手くそだ。

火山は、とっても暑かったです。て、当たり前だね（笑）。

途中で、モンスターと戦ったりしました。

その時に、ロロちゃんにいろいろとアドバイスをもらいました。ちよっとだけ、回復術を扱う自信がついたよ。

今度三人で冒険した時に、モンスターと戦うことになったら、私、前よりちゃんとサポート出来る気がする。だから、任せて！

それで、イソギンチャクみたいなモンスターを倒した後に、上までずうっと続いている階段が現れたんだ。

途中で私とロロちゃんが立ち止まっちゃったりして、他の三人に迷惑かけたり、なんてこともありながら、一番上の崖まで登り切った時。

私、感動して思わず泣いちゃいそうになったんだ。

ねえ、何があったと思う？

崖の下を見下ろせば、七色の灼熱の海があったんです。

その海からは、時々ふつつつと小さく火柱が上がって、数分の一ぐらいの割合で、私たちが立っている崖の上にまで届きそうなほど、ダイナミックな火柱を立てていたんだよ。

そして、私たちの目の前にあった壁の穴から、七色に輝く水が滝

のように落ちていて、崖下の七色の海に注いでいたんだ。

すごいと思わない？　今まで赤色の海だったのに、そこだけ七色に、まるで虹のように輝いていたんだよ。

しかも、耳を澄ましてみると、ぶくぶくと海が跳ねる音が聞こえて、ごうんごうんと唸る振動が体全体に伝わってきた。

まるで、この火山が”生きている”って主張しているみたいだった。

ううん、違う。火山だけじゃない。

私、その時「『ワールド』は本当に生きていて、ここにいる私も、生きているんだな」って思った。

なんか、大げさかな？

でも、本当に私はそう思ったんだ。

それと同時に、私はほんとうにちっぽけな存在に感じて、何の力を持っていない人間の一人なんだな、なんて思いました。

ちよつとだけ恐かったです。

でも、隣を見れば、ギルドメンバーの人たちがついていてくれて、あ、ちなみにセレスさん以外の皆は「すごい」って言って喜んでただけど、セレスさんは「暑い暑い」言っていました（笑）。

とにかく。

『ワールド』が生きていること、私がそこに居たこと、そして、仲間が近くにいてくれたこと。

そのことに、何よりも感動したんです。

同時に、麻子ちゃんと、龍介君のことを、思い出しました。

麻子ちゃん。

きっと今も、辛い気持ちを抱えながら、毎日を過ごしているんで

しょうか。そう思うと、苦しいです。

私、何もできなくて、ごめんね。頼りなくて、ごめんね。でも、待つことなら出来ます。麻子ちゃんが帰ってきたときに、「おかえり」と手を広げて迎えてあげることなら、出来ます。

ゆっくりで良いから。無理しなくて良いから。

私は、ずっと、待ってます。

龍介君。

改めて、この前はごめんなさい。私、あの時はちょっと踏みこみすぎて、ずうずうしかったよね。反省しています。

ただ、辛そうな龍介君の顔を見るのが、私は何より一番辛かったです。

でも、忘れないで。私、近くにいますよ。力になれることなら、なんだって協力するから。

このメール見たら、教えてください。その時に、私の病気のことについて、言葉でちゃんと伝えようと思うから。

だから、一人で辛い思いを抱え込まないで。

長くなっちゃって、ごめんなさい。

でも、なんかこうやって文字に書いて、ほっとしています。

きつと言葉にしていたら、何がなんだか分からない内容になっちゃってたんだろうから（笑）。

最後に。

私、ギルドの皆と冒険するのも楽しいけれど、リュウくんやアサちゃんと一緒に冒険する方が、もっと楽しいかなあ、て思っています。

また、一緒に依頼やろうね。モンスターとの戦闘も、大丈夫だから！

あ、それと、私が旅したところを、二人に紹介してあげる！だから、楽しみにしてて！

それでは。なんだか取りとめのない内容で、失礼いたしました。

p.s. 返事は良いよ。読んでくれるだけで、十分だから。』

※

どうか、二人に届きますように。

私はそう願いながら、「送信」ボタンを押した。

Log 17 タウン? ↓? ? ? ? ? (前書き)

※ 最後の場面で、一部不快な表現が含まれています。
ご覧になる際は、ご注意ください。 ※

Log 17 タウン? ↓???????

お昼休み、教室で優奈ちゃんとお弁当を食べていた時だった。

「あ、龍介君!」

廊下を歩いていく龍介君の姿を見つけて、私は立ち上がった。

でも、気付かない様子の龍介君は、どんどん先を歩いていって、ついには見えなくなってしまう。

きょとんとした表情でこちらを見る優奈ちゃんに、私は顔の前で両手を合わせた。

「ごめんね、優奈ちゃん。ちょっと待ってて」それだけ言い残し、私は急いで教室を出た。

龍介君が去った方向を見れば、階段の方へ歩いていくのが見えた。私は走ってその姿を追いながら、もう一度声を掛けた。

今度は気付いてくれた龍介君が、びっくりと肩をすくめた後にこちらへ振り返った。

「ふ、藤川?」

ようやく近くまでたどり着いて、私ははあはあと肩で息をした。

そういえば、久しぶりに走ったかもしれないなと思った。

「大丈夫か?」と慌てて声を掛けてくれた龍介君に、私は笑顔で返した。

「ねえ、龍介君、『ワールド』にイン——」と言いかけて、私はハッと気付いた。

私がメールを送ったのは、昨日の夜の話。

しかもちよっと遅い時間だったから、まだあのメールに気付いていないかもしれない。

不思議そうにこちらを見る龍介君が、何よりの証拠だった。

私は、あはは、と笑って誤魔化しながら、言葉を変えた。

「ねえ、今日、『ワールド』やる？」

「ああ……まあ、帰ったらちよこつとやろうかなあとは思ってるけど？」

「なら、また一緒に行こう？」

龍介君の手を握りながら、言った。

きっと次に『ワールド』で会う時は、メールを読んでもらった後。だから、そこでちゃんと、言葉にして伝えるんだ。

龍介君が、ちょっと顔を赤らめながら、「あ、ああ、良いよ」と言ってくれた。

自然と笑みが零れてきた。

「なら、何時頃が丁度良い？」

「え、んと……部活は六時で終わると思うから、その後、とか？」

「じゃあ七時くらいでも大丈夫？」

「あ、うん、良いよ」

龍介君が視線を彷徨わせながら、ゆっくり頷いた時だった。

「あっれえ？」

松原クン、奇遇だねー」

階段を降りてきた男の人が、よう、と手を挙げながらこちらに近づいてきた。

耳に付けている派手なイヤリングが、きらりと光を放っている。

「……せ、先輩」

龍介君の手が、一瞬強張ったのが、分かった。

——バスケ部の先輩、なのかな……？

スリッパの学年カラーは、三年生のものだから、そうなのかも。先輩の顔をまじまじと見ていたら、視線があった。

その人は何故か、にやり、と奇妙な笑いを浮かべた。

「あれ？　もしかして、松原クンの彼女、とか？」

「ち、ちちち、違いますっ！」

ぼっ、と勢いよく手を振りほどいた龍介君。

びっくりして、後ろへ少しよろめいてしまった。

先輩が、くくく、と笑うのが聞こえた。

「いやあ、良いねえ。

青春、てヤツう？」

「い、いや——」

そして先輩は、龍介君の肩をがっちりと掴んだ。

二人はそのまま私に背を向け、二三步遠ざかった。

龍介君の耳元で、先輩が顔を近づけて何か喋っている。

その時、龍介君の両手が、ぐ、ときつく結ばれるのを見た。

ずきん、と心が疼いた。

「……て、わけで、宜しうな松原クン。

あ、あと、いつものジュースもよろしくなあ！」

ぱしん、と龍介君の背中を叩いて、先輩は明るい声を出した。そして私の方へ向き、にやっと笑った後に、階段を降りていった。廊下に残された龍介君の背中は、とても辛そうに見えた。

私は、その背中に、そっと手を伸ばした。

「――龍介、君」

指先がちゃんと触れた時、龍介君が、ぼっ、と思いっきり振りかえった。

そして、無理やり笑おうとするかのように、顔を引き攣らせた。

「わ、悪い、藤川。今日、ちょっと部活の用得、遅くなりそうなんだ。」

だから、七時だちょっと間に合わないかも」

ははは、なんて小さく苦笑いする龍介君。

また、ずきんと私の心が疼いて、苦しくなった。

前に、一緒に屋上に行った時、スマホを見て作った、あの苦い顔にそっくりだったから。

ねえ。

もしかして、龍介君が抱えているものって――

問いかけようかと思った。

――でも、今は止めよう。また、前みたいに困らせてしまうと思ったから。

私も、笑顔を作ってた。

「ううん、良いよ。気にしないで。なら私、待ってるから」

「そんな。待たせちゃ悪いし、また今度で良いだろ？」

「大丈夫。私、タウンで一人遊びながら待ってるから。」

本当に、気にしなくて大丈夫だよ」

うーん、と小さく唸った龍介君が、しばらくしてから、「なら、早めに終わらせるようにするよ」と言ってくれた。

「うん。でも、無理しなくていいよ」

「ああ、サンキュ」

龍介君は、そのまま私に手を振りながら、階段を降りていった。まった。

私が、立ち尽くしたままその背中を見送っていたら、後ろから「由梨い」と声をかけられた。

「ちよっとちよっと。さっき教室から覗いてたけど、あれ、野村先輩じゃなかった？」

知ってるの？ と優奈ちゃんに話しかけると、「当たり前よ！」と答えた。

「バスケットで天才と呼ばれている人よ！ めっちゃ格好良いつて、学校中有名な先輩なの！ 由梨、知らなかったの？」

そうなんだ。あの人、有名な人だったんだ……。

「うん、知らなかった」

「ちよっとお。そこはちゃんと知っておかなきゃ駄目だよー」

もう、と言いながら笑う優奈ちゃんに、私も小さく、えへへ、となんとか笑い返した。

「……でも、裏じゃあんまり良い噂、聞かない人なんだけどねえ」

「え？」

優奈ちゃんは、ちよっと困ったように笑いながら、実はさあ、と話してくれた。

「先輩、部活が終わった後に、男子数人で体育館倉庫に固まって、なんか変な話してるらしいよ。」

そういう目撃情報、知り合いからぼちぼち聞いてたからさあ。そういうところは、なんか不気味だなあと思うけど。

でもバスケットしてる姿は格好良いんだよねえ。そこは惚れちゃう。

由梨も一回、見てみたらいいと思うよ？」

先輩がしていたイヤリングの放った光が、途端に頭の中に蘇ってきた。

今思えば、それはとても冷たくて、恐かった。

龍介君の、きつく握られる手の拳が小さく震えていたのも思い出してしまう。

ぎゅう、と胸が締め付けられた。

「まあいいや、それより由梨、早くお弁当食べようよ！」

ほらほら、と私の腕を引っ張りながら促す優奈ちゃんに続いて、私も教室へ向かって歩き出す。

廊下の窓から、反対側の校舎がちらりと見えた。二階の片隅にある教室に、つい目がいつてしまう。

麻子ちゃんは今日も、学校に来ていなかった。

※

その事件が起きたのは、私が入り口の街の広場にあるベンチで、ぼうっと空を見上げていた時だった。

七時にログインして、三十分ほどが過ぎた頃だったと思う。

とにかく色んなこと——龍介君のことや、麻子ちゃんのこと——を考えていた時、ふいに声を掛けられた。

「ねえ、お嬢さん。お嬢さん」

その声の方を見た。

そこに、黒い肌が目立つ長身の男の人が立っていた。

短いTシャツに黒い短ズボンというラフな格好をした人が、にこり、と私に笑いかけている。

「ちょっと聞きたいんだけどさあ。ワープ装置って、どこにあるか知ってる？」

実はさあ、マップ見ても良く分からないんだよねえ」
陽気に笑う男の人。私も、笑いかけた。

「ワープ装置なら、あの先の向こうですよ。長い橋を渡れば、そこにありますので」

「え、向こう？ 向こうって、あっちだよな？」

「はい、そうです」

ワープ装置のある方へ指差してあげると、その人は、あれえ、と首を傾げた。

「おっかしいなあ。僕、さっきそっちの方へ行ったよ？
でも、見つからなかったんだけど……」

「え、でも、確かにあっちにありますよ？」

「えー？ ……なんでだろ、なんで見つからないのかなあ」
あはは、と困ったように笑う男の人。「約束があるから、早く行かなきゃいけないのになあ」と言って、頭を掻いている。

なんだか、放っておけないな、と思い、私はにこりと笑いかけてから、言った。

「なら、ワープ装置まで案内してあげましょうか？」

「え、本当!？」男の人は、ぴょんととび跳ねた。「うっそー、マジ嬉しい! ありがとうお嬢さん!」

いえいえ、と言いながら、私は立ち上がった。

——多分、龍介君が来るまで、まだ時間はあるんだろうし、大丈夫だよな。

私とその男の人は、一緒に肩を並べてワープ装置へ向かって歩き出した。

男の人は、「ダストです、よろしく」と笑顔で自己紹介した。私

も、「リリイです、お願いします」と挨拶した。

よろしくね、と返してくれた人の笑顔はやっぱり爽やかで、良い人だなあ、とその時は思っていた。

だけど。

ワープ装置へ向かう手前、たくさん建物が左右に並ぶ一本道の外れまで来た時に、その人は突然、私の肩を思い切り掴んできた。びっくりしてダストさんを見た。

その人は、意地汚い笑いを浮かべながら、その顔を私に近づけて、囁いた。

「――どうも、ありがとね。

可愛い子猫ちゃん」

瞬間、私の視界は真っ黒に塗りつぶされた。

※

光が急激に戻ると同時に、全身に感覚が戻ってきた。

私はハッとして周囲を見渡した。

そこは、どこかの白い空間の中。白に塗りつぶされた、四角いボックスの中。

慌てて身を起こした。手元を見てみれば、茶色のふかふかなソファがある。

その上に、私は横たわっていた。

「お、目が覚めた？ お嬢さん」

すぐ近くで声がして、私は飛び上がった。

髪を茶色に染めた男の人が腰に手をあて、こちらを覗きこむよう

に上半身を曲げながら、にやりと笑っている。

その身体は、真っ黒な鱗に覆われていた。

悪寒が背筋を走り抜けた。

「こいつ、リリィちゃん、ていうらしいぜ、ジュン。

可愛いよなあ」

そう言いながら、別の男の人が近づいてくる。

ダストさん、だった。

ダストさんは、さっきまでの爽やかな笑みは消えていて、変わりにこちらを嗜めるような、黒い笑顔を浮かべていた。

「私……一体……なんで、こんな……」

言葉が上手く出てこなかった。

胸に当てた両手が、大きく震えはじめる。

わはは、とその人は——ジュンと呼ばれた茶髪の男の人が、甲高く笑った。

「ちょっと、キミの中の意識を、一時凍結させてもらったただだよ。

あ、大丈夫。大事なデータはいじってないから、安心して。

まあ、一部のデータは、ちよいといじらせてもらったけど」

意識を、一時凍結？ データを、いじった？

訳が分からなかった。

どうやって、そんなことが出来たの？　なんで、そんなことをするの？

なんで私、ここに居るの——？

「おいおい。」

お前ら、いっつもそうだけど、あんま女の子恐がらせるなって」
二人の男の人の背後から、また別の男の人の声が飛んできた。
部屋の片隅に置かれた大きなベットの所で仰向けになりながら、
何かを楽しむかのように、こちらを見ていた。

私はびくりと身を縮こませた。

そういえばこの部屋、このソファーとベットしか、家具が見当たらない。

「かわいそお、てお前なあ」わはは、とまた笑うジュンさん。「おじさん、かわいそおなんて言える資格あるのかよ」

ベットに仰向けになっていた人——おじさん、と呼ばれた男の人は、よいしょ、と言いながら立ち上がった。

顔の髭が濃いのが特徴的なその人は、とても大きな身体で、筋肉が程良く盛り上がっていて——

何の着物も、着けていなかった。

途端、喉から何かが逆流してきそうになって、慌てて白い床に視線を落とした。

なんで……どうして!?

どく、どく、と全身が波立って、不穏なリズムをとっている。

もう自分が震えているのかどうかも、分からなくなった。

また一つ、気味の悪い笑い声が聞こえてきた。

「おっさんって、マジえげつねえよなあ。」

てか、もうこの子のプログラム変更終わった? もう触っても大

丈夫？」

ダストさんは、甲高い声で言った。

裸の人が、にひひ、と笑った。

「ああ、大丈夫だ。ちゃんと、柔らかい所も感触が伝わるよう、いじつといた。

今度のプログラムは、恐らく成功したはずだ」

そして、裸の人が、私を見て、笑った。

慌てて口元を手で押さえた。

視界が揺らいだ、と思った時に、涙が一つ、零れ落ちた。

「あーあ、泣いちゃったじゃないか。かわいそうに……」

ダストさんが、私の髪を、さらりと撫でてきた。

反射的に、私は「いやっ」と叫びながら、距離を取った。

背中に、冷たくて固い感触が伝わってきた。壁だった。

「大丈夫だって。痛いことは、しないからさ」

茶髪の男の人はそう言い、私を見て舌舐めずりをする。

ダストさんが、容赦なく私に手を伸ばしてくる。

裸の人が、にたにた笑いながらこちらに近づいてくる。

胸の動悸が、痛いほど激しくなる。

——いや、いや、なんで、どうして、やめて、来ないで、いや、いや、いや——

ダストさんのごつごつした手が、私の胸を掴んできた。私は叫んだ。思いつき両手を伸ばして、その手を押しのけた。

横から茶髪の人に抱きつかれた。その身体をぴったりと密着させてくる。スカートの間から、するりと何かが入ってくる感覚がした。ぞわ、と全身の毛が逆立つ。容赦なく私の下半身を、まさぐってくる。

いや、いや、いや、いやいやいやいや！

びくりと固まる身体。口から洩れる悲鳴。真っ白になる頭。

裸の人が、すぐ目の前に迫っていた。その下半身に垂れ下がっている何かが、真正面にある。

咄嗟に目をつぶった。いやだ、いやあつ！

手や足をがむしゃらに動かす。とにかく暴れた。次々と迫りくる手を必死に避けようとした。

でも駄目だった。すぐに取り押さえられる。すると額に冷たくて固い感触がした。

ハッとして目を開けると、そこには黒くて光るものがあつた。

拳銃、だった。

そんなに暴れられるともっといじめたくなっちゃうじゃん、なんて声が聞こえてきた。その息が首元にかかる。黒い拳銃だけを見つめた。すでに私の身体は暖かいもので埋め尽くされていて、何が何だか分からなかった。分かりたくなかった。視界が揺れる。ぐらぐら揺れる。白い天井が見える。手を伸ばした。

早く、早く、ここから出たい、逃げたい、誰か、誰か助けて！！

やめて、触らないで、近づかないで、お願い、お願い、ああ、ああ、ログアウトしたい、アウトしなきゃ、もうイヤ、私の身体がぐちゃぐちゃになる、なってしまおう、どうにかなってしまおう、いやもう、どうにでもなれ、なってしまえ、こんなの嫌だ、こんな感触嫌だ、とにかく、逃げたい、逃げたい逃げたい逃げたい……………！！

ああ、ああああ、気持ち悪い、気持ち悪い、キモチワルイ——————！！

「ああああああ————っ！」

気付けば、私は、男の人の手から、拳銃を奪い取っていて、

それを、自分の頭目掛けて、打ち抜いた。

Log 18 ここに居るのは、一体、誰なんだ？（前書き）

※残酷描写（流血など）有り！ 苦手な方、ご注意ください！※

Log 18 ここに居るのは、一体、誰なんだ？

藤川が、学校に来なくなった。

三日前から――最後に、『ワールド』で会おうと約束した日から、だ。

朝のホームルームで、先生がクラスメイトたちの名前を読み上げる間、俺はずっと、藤川の空いた席を見つめ続けた。胸が、ぐっ、と締め付けられた。

あの日、俺は八時頃になってようやく部活の雑用を終え、『ワールド』にインした。

藤川は、「ログアウト」になっていた。

制限の四時間までずっと待ってみたけれど、結局、来なかった。

その間に藤川から送られてきた長文のメールを、何度も何度も読んだ。

その度に俺は、奥歯を噛みしめた。

ぎりぎりと鳴るその音が、更に俺の心臓を、締め付けていく。

俺はなんて、馬鹿なんだろう。

あいつは――藤川は、こんなにも、俺たちのことを考えていてくれて、行動してくれていたのに。

なのに俺は。リアルでも、『ワールド』でも、何かやる前から、全部諦めて。

こんなもんなんだ、としか、考えてこなくて。

結局、何もしてこなかったじゃないか。

亀田の件についてだって、そうだ。

藤川はずっと気にかけていた。心配していた。どうにかしようとしていた。

でも、俺は……俺は……。

とにかく、藤川に会ったら、すぐに謝ろうと思った。ありがとう、とお礼を言おうと思った。

けれど、翌日、藤川の姿は学校になかった。

すぐに、メールした。風邪なのか、大丈夫なのか、昨日は会えなくてごめんな、と。

でも、返事はいつまでたっても、返ってこなかった。

二日目なら、会えると期待した。でも、来なかった。

焦った。何かあったのかと思った。もしかして、例の”病氣”ってやつか……？

その日帰ってすぐ『ワールド』にインしてみた。もちろん藤川の……リリィの表示は「ログアウト」のまま。

返事のこないスマホを握り締め、そわそわと落ち着かない心を必死に落ち着かせながら、俺は思った。

きっと、次の日なら来てくれるはずだ。

でも。

今日になっても、藤川は、来ない。

これは絶対、何かあったに違いない。

そう思わざるを得ない。

俺はぐ、と拳を強く握りしめた。

なあ——藤川。

お前、一体、どうしたんだよ……？

とにかく、すぐにでも藤川の容体を聞こうと思った俺は、朝のホームルームが終わって職員室へと歩いていく担任の後を、急いで追いかけた。

「先生！ 藤川は、藤川はなんで学校に来ないんですか！？」

俺が叫ぶと、先生は驚いてすぐさま立ち止り、振り返った。

「……うーん」先生は戸惑いながら、頭を掻いた。「いや……実はなあ、オレも、よく事情が分からないんだ」

「事情が、分からない？」

慌てて先生に詰問した。

先生は未だに唸りつづけ、天井を見上げながらゆっくりと言った。

「ああ……。親御さんからの話だと、最初は単なる体調不良だったようだが……。今日の電話だと、なんというか、ものすごく慌てたような感じでなあ……」

「どんな感じでしたか？」

とにかく、俺は必死だった。

藤川の様子が、早く知りたい。

俺の問いかけに、またもや先生は、うーん、と唸った。

「なんかなあ……。『あの子があの子じゃない』とか、『おかしい』とか、言っていてなあ。

しばらくしてから落ち付かれたようだったけど。

もしかしたら……」

そこまで先生が言いかけた時、廊下の奥から突然「先生っ！」と

呼びかける、大きな声が響いてきた。

驚いてそちらに視線を遣ると、そこには一人の女性が、ものすごい形相で立っていた。肩で大きく息をしている。

その人はずんずんと大きく足を広げながらこちらに歩いてきて、先生の近くまで来た途端。

その肩を、がしっと掴んだ。

「先生っ！ 由梨は……由梨は学校で、何かあったんですか!？」

あの子、様子が——様子がおかしいんですっ!」

先生の身体が大きく揺さぶられるのを横目に、俺は急いでその人に問いかけた。

「何か、て……。どうしたんですか、何かあったんですか!」

女の人は——恐らく藤川のおばさんは、俺を涙の溜めた目でちらりと見た後に、先生に向かって吠えた。

「あの子、一步も部屋から出てこなくて、閉じこもりつきりで! 最初は風邪かと思って様子みてたんですけど、昨日あたりから、急に変なこと言いだしたり、夜中なんて、

手に——手にカッターなんか持って、ふらふらしてるところを見つけて!

ああ、なんで、なんであの子がまた、あんなことをっ!

学校で……学校で何か嫌なことでも、あったんじゃないんですか!？」

——カッター……。?

その単語が、俺の心臓にぐさりと突き刺さった。

藤川に、カッター、だって？

「お、落ち着いて下さい奥さん」先生が慌てながら言った。「とりあえず落ち着いて。職員室でお話を伺いますから」

「悠長にしてる場合じゃないですよっ！」おばさんが負けじと叫ぶ。「今だって、あの子一人で部屋にひとりぼっちにさせたまま、私、出てきたんですよ！？」

先生、あなたも一緒に着いてきて、見てあげてくださいよ！助けてあげて下さいよっ！！」

「ちょ、待ってください！ あ、あのですね、僕にも仕事というものが――」

「あの子の担任なんでしょう！ 授業なんてどうでもいいから、ほら、あの子の様子、見てあげてっ！」

お婆さんの叫び声が廊下に響くのを聞きながら、俺は、唇を噛みしめた。

やっぱり、何か、あったんだ。

それは、学校の中でじゃない。

タイミング的に――そうだ。恐らく、『ワールド』で。

俺と約束した、あの日に。

俺は、お婆さんに向かって、叫んだ。

「俺を代わりに連れてって下さい！ お願いします！」

俺、あいつと仲良いですから、少しでも力になれるかもしれないからっ！

それに俺、あいつに、どうしても伝えたいことがあるから！

お願いします、マジでお願いします！」

それから、担任の先生が取り計らってくれて、俺は学校を早引きし、おばさんと共に藤川の家へ行くことになった。

校門を出て、おばさんが乗ってきた車で一緒に家へ行こうということになり、急いで駐車場へ向かおうとした時。

亀田に、会った。

俺は、久しぶりに見るその姿に、一瞬固まった。

亀田も、突然出くわした俺の顔を見て、驚いたように短く叫んだ。持っていた鞆を落とす。

しばらく、道路の上で視線を交わした。

やがて亀田が、視線を伏せ、小さく口を動かして「お……おはよう」と言った。

俺は何も言わず、亀田に近づいて、その腕を掴んだ。

そして、ぐい、と引っ張って、駐車場へ向かうおばさんの背中を追っていった。

「ちょ、ちょっと！」と戸惑いつつも足を動かす亀田に向かって、俺は叫んだ。

「亀田、お前も来いっ！」

藤川の、藤川の様子が、おかしいんだ！」

「——え？」

ぽかんと、間拔けたように開く口が、見えた。

※

藤川の家に着くやいなや、俺は玄関を開けて急いで階段を駆け上った。事前に、おばさんから藤川の部屋の位置は聞いていた。

後ろから、未だに状況が掴めていない亀田が、戸惑いつつも走って付いてきた。

藤川の部屋の前に着いてから、俺はゆっくりと、息を整えた。心臓が未だに、ばくばくと不整な音を立てている。

ごくりと鐺を呑み、意を決した後に。

俺は、ゆっくりとした動作でその扉をノックした。

返事は、返ってこなかった。

俺はもう一度強くノックしながら、言った。

「藤川！ 俺だ、松原だ！ 分かるか！？」

しん、と静まる。

中からは、やはり何も聞こえてこない。

俺は背後に立つ亀田に目配せした。亀田は固い表情でこくと頷いた後に、ゆっくりと口を開いた。

「由梨……由梨、そこに居るんでしょう？」

ねえ、私……麻子、だよ。ねえ、お願い、出てきて由梨」

数秒した後に、中から、どすん、と音が聞こえてきた。

そして、ゆっくりとした声が、聞こえてきた。

「龍介、君、麻子、ちゃん——？」

ああ、二人、とも、来て、くれたんだ」

良かった——その声は、いつもの藤川の声の調子に聞こえた。

俺は少しだけ、胸をなでおろす。

「ああ。来たよ。

藤川、ずっと学校休んでたから。心配だったんだぞ。

ほら、亀田だって、ちゃんと学校来てたし。

なあ、藤川。部屋、入っても良いか？」

しばらく経ってから、「良いよ」と返事が聞こえてきた。

俺は安堵のため息をつきながら、亀田と視線を合わせた。亀田もまた、安堵したように頬を少しだけ緩めていた。

俺はドアノブに手を掛け、それをゆっくりと回して、扉を開けていった。

※

部屋の中は、薄暗かった。目の前の小さな窓には、カーテンが掛かっている。

その窓の下に机があって、藤川はその机の椅子に、こちらに背を向けて座っていた。

俺が完全に扉を開けると、藤川は首だけをこちらに動かして、俺たちを見た。

「藤川――」

呼びかけようとして、ハッと気付いた。

藤川は笑っていた。

でもそれは、いつものような、可憐な花を咲かせたような笑みでは、なかった。

花が萎れてしまう寸前のような、影のある笑みだった。

「由梨……?」

亀田が後ろから、恐る恐るといった感じで、藤川に呼び掛ける。藤川は亀田の方へ視線を遣ると、更に一層、その影を深くしてい

った。

「ああ——麻子、ちゃん。
麻子ちゃん、だ」

良かった、とぼつりつぶやいた藤川は、首を折れそうなほどに傾け、口元をゆっくりと歪ませ、その長い髪を垂らした。
ぞく、と、冷たいものが背筋を撫でる感覚が襲う。

——違う。

これは、いつもの藤川なんかじゃ、ない。

俺は急いで、その背中に近づいた。

おい、どうしたんだよ、と呼びかけながら、その机の上に目を遣った時。

息が、止まった。

そこには、机に深く刺したカッターを握った右手と、赤色に塗れた左腕が、あった。

「藤川っ!!」

俺は急いで、その右手からカッターを奪って部屋の隅へと投げ捨て、左手首を掴んだ。

その左腕は、いくつか刺し傷があって、そこからどくどくと、まるで穏やかな噴水のように、血が噴出していた。

いやあつ、とすぐ傍で、短く叫ぶ声が聞こえた。

がくがくと、藤川の掴む俺の手が、震える。

うそ……だろ……これ……藤川、が……？

『咄嗟のことでも、自分の大切な身体傷つけるのを見るのは、もつと嫌だった』

以前、藤川が言った台詞が、耳元をよぎった。

「どうしたの。龍介君、麻子ちゃん」

藤川は俺たちを、ぼうつとした表情で見遣った。

その目は、この世界を見ているような真っ直ぐな目じゃなくて、まるで異次元の世界を覗いているかのように、虚ろだった。

「お、おまえ……なに、を……何をやってるんだよっ!!」

叫びながら、取りあえずこの血をなんとかしなきゃ、止血しなきゃ、と焦った。とにかく、何か、包帯か、タオルか何かを……!

左腕をぐっと握りしめながら、部屋の中を見渡す。すると、目を丸くさせながら、こちらをただただ見遣る亀田の顔が、見えた。

完全に、魂が抜けたような顔になっていた。

「――ああ、コレ？」

藤川は、ふいに自分の左腕に視線をやって、再び俺に、視線を戻した。

そして、ふ、とゆっくり影の笑みを作って、言った。

「大丈夫だよ、龍介君。だって、私、痛くないもん。」

私、”痛み”とか、そういう感覚が無い身体なんだから、平気だよ」

「――は？」

一瞬にして、思考が止まる。

今……何て言った？

感覚が無い身体――？

「だからね、もう、良いんだ。ほら、こうやって、触られても、何も感じないから、良いよね。」

私、初めて、この身体で良かった、て、思った。

何も、感じない。無理やり、触られても、何も思わない。恐くない。

ねえ。

これって、良いよね。素敵だよね。最高だよね」

突然、後ろから盛大な叫び声上がり、俺の耳をつんざいた。

振り返ると、そこにはおばさんが口に手を当てて、扉に身体を預けながら、これでもかと震えていた。

「ゆ……由梨、あんた、あんた、な、なんで、こんな……！ 何してるの！」

部屋に入ってきたおばさんが、その場にいた俺と亀田を、強い力で押しのけた。

その弾みで、俺は尻もちをついた。

おばさんは、藤川の腕を見、更に大きな泣き声を上げながら藤川に抱きついた。

「だ、駄目じゃない！ 何やってるの由梨！
もう自分の身体傷つけないって、約束したでしょうっ！」

お婆さんの腕の中でも、藤川は、
あの不気味なほど暗黒の笑顔で、にたにた笑っていた。

俺の心臓が、どく、と押しつぶされる。

机から、一筋の赤い液体が、ぽとり、と床に落ちる。

ぽとり、と、ぽとり、また、一滴。

早く、救急車、救急車、と叫びながら、お婆さんはものすごい勢いで、階段を降りて行った。

残された藤川は、少し寂しそうな表情をした後に、机へ向き直った。

そして、その引き出しから、何かを取り出す。手に持っているそれが、きらりと不気味に光る。

カッター、だった。

亀田が、「ヤメて由梨！」と叫びながら、背後から藤川に抱きつき、その右手を抑え込んだ。

お願い、こんなこと止めて由梨、ねえどうしちゃったの由梨、と亀田は必死に叫びながら、右手を力いっぱい掴んでいる。

藤川が、また、笑う。

「どうしたの麻子ちゃん、大丈夫だよ私は」なんて言いながら。

俺はもう、完全に力が抜けてしまって、動けなかった。

その間にも、机からまた、ぽと、ぽと、と、鮮明な血が、次々と、爛れていく。

強烈な鉄の匂いが、した。

俺の脳裏にふと、記憶の中の藤川が現れた。

——花を咲かせたように、本当に楽しそうな笑顔でこちらを見る藤川。

——いつも人のことを考えて、こちらが悲しそうな雰囲気を感じると、同じように悲しい表情を作ってくれた藤川。

——明るい言葉を掛けてくれて、こちらを励まそうと努力してくれた、藤川。

俺は、目の前にいる、腕から大量の血を流しながら、友達の手の中で、壊れたような微笑みを作って、虚ろな目をしている人物を見た。

ここに居るのは、一体、誰なんだ——？

しばらくしてから俺の耳元に、遠くから響く救急車の音が、かすかに聞こえてきた。

Log 19 今度は、俺が、藤川を助ける番なんだ。

病院の片隅にある小さな喫茶店で、俺と亀田は向かい合っていた。お互いに何も話さずにしばらく重い沈黙を漂わせていた時、女性のウェイトレスがやってきて俺たちが注文したホットコーヒーを置いていく。

「ごゆっくり」とお決まりの言葉を吐き捨てた後に、女性はそそくさと去っていった。

透明なガラスの机の上で、ほのかに湯気を立たせながら小ぢんまりと佇むコーヒーを、意味もなく見つめる。

するとふいに、それが赤く変色し、先ほどまで見ていたどす黒いものに見えて、俺は咄嗟に視線を逸らした。

藤川はすぐに病院へ運ばれ、緊急手術となった。それは、ほどなくしてから終わった。

担当医の話によると、切り傷が数か所あったが、そこまで深刻なもので大したことはない、ということだった。

だが、念のために、藤川は三日ほど入院することになった。

病室へ運ばれていく藤川を乗せた担架に、俺と亀田とおばさんは一緒に付いていった。

前に行くおばさんからは、絶えずすすり泣く声が聞こえた。

その隣の亀田は、背中を小さく丸めながら、藤川の顔を見ていた。その悲しげに伏せる睫毛が、ひどく濡れていた。

俺も、藤川の顔を、そっと見た。

完全に目を瞑っているその顔は、不気味なほどに白かった。

あの奇妙な笑みの名残のような影が、所々に見られる。

それはまるで、役目を終えくたびれてしまったマネキン人形のよ

うだ、とも思った。

それから、しばらく俺と亀田は、病室で目を覚まさない藤川の顔を見守った後に、退散することにした。

目が腫れてすっかり気力が削がれてしまったおばさんに向け、二人で丁寧にお辞儀して、その場を去った。

バスで帰ろうとしたのだが、まだ時間に余裕があったので、喫茶店でお茶でもしようか、ということになったのだ。

俺は、机の上に乗せた自分の手を、ぐっと握りしめた。

——なんで、どうして。

あんなことに、なったんだ。

顔を伏せ、唇に力を込めた時。

「——由梨ね、”病氣”だったんだよ」

視線を上げ、目の前の顔を見た。

亀田は、今にも泣き出しそうな表情をしながら、言った。

「由梨ね、『感覚の無い身体』なの。

中学一年生の時に、交通事故に遭って。その時の後遺症なんだって。

感触のほかにも、味覚とか、嗅覚とか、そういうの、全く分らないって言ってた。

だから、視覚と聴覚だけで生活しているようなもんだって。治療法は、まだないみたい」

亀田はその両手で、コーヒーカップをゆっくりと包み込んだ。
かたかたと、カップと受け皿が小刻みにぶるかる音が、小さく聞
こえてくる。

「入院中は、酷かったらしいよ。
感覚がない自分が嫌になって、何度か自分を傷つけたこと、ある
んだって。

その度に、周りから心配されて、泣かれて。
そこで由梨、そのことがどんなに悲しいことか、ようやく気付い
て。そこから、自傷行為をパタリとやめた、て、言ってた。

……これ、中学三年で、初めてあたしと友達になった時に、由梨
が教えてくれたの」

俺も、自分にコーヒーカップに手を伸ばそうとしたが、やめた。
亀田のコーヒーカップは、徐々に、その振動を大きくしていった。

「でも、なんか、『ワールド』の中では、感覚が蘇るんだって。
多分、眠りの中の「意識」の中で認識できる”感覚”だから、だ
と思うんだけど。

由梨が始めて『ワールド』始めた時に、あたしに嬉しそうなメー
ル送ってきたの、今でも良く覚えてる。
すっごく嬉しそうな文面だったよ。

『私、生きてるんだね!』なんてことまで、書いてあってさ——」

俺は静かに目を閉じ、もし自分が感覚の無くなった身体になった
ら、と想像してみた。

触られても、何も感じない。何を食べても、何の味もしない。思
いっきり息を吸っても、何の匂いも感じない。

それはとっても、恐ろしいことではないかと、思った。
それじゃまるで、ただの人形に魂が宿っただけ、みたいじゃないか。

ふと、藤川が書いてくれた、あの長文のメールの一文が、頭をよぎった。

『私、その時「『ワールド』は本当に生きていて、ここにいる私も、生きているんだな」って思った』

それはつまり、そういうことだったのか。

『ワールド』内では、ちゃんと感覚が分かるから、ちゃんと触れている感じがあるから。

恐らく、味覚も、嗅覚も。

だから、全てのことが、色鮮やかに見えたんだろう。

だとしたら。

藤川は。

リアルの自分を、まるで『死んでいる』ように、感じていたのかもしれない。

「きっと、こうなったのは、あたしのせいだ」

亀田の涙声が、聞こえてきた。

俺は目を開けて、汚く濁った自分のコーヒーを、見つめた。

「あたしが……あたしが、由梨に、冷たく当たっちゃったから。

由梨は、あたしのこと、本気で心配してくれてたのに。

あたしは……最後まで、信じなかったから」

鼻をすする音が、間近に聞こえてくる。

「由梨から届いたメール、実は昨日の夜に気付いて、読んだんだけど……。」

あたし、その時、なんで由梨を信じなかったんだろう、て、思ったんだ。

あの子、こんなに、私のこととか、心配してくれているのが伝わってきた。

それで、学校行こうって気になったの。

由梨に会って、謝ろうかな、て。

——あたしが学校休む前にね、あの子と一緒に、パーティ組んだことがあるの。

そこで、あたし、リアルで嫌なことあって、心の底に眠ってた思いとか、全部由梨にぶつけて叫んで。

由梨は、そんなあたしに、『大丈夫』って言ってくれたんだけど。でも、それは結局『ワールド』の中での話で、架空の出来事ではないんだ、て気付いたとたん、何もかも、信じられなく、なっちゃって」

馬鹿みたいだね、と静かに告げる亀田。

俺は何も言わずに、ただ、コーヒーに映る惨めな自分の姿だけを、じっと睨みつけた。

「あたし、ホント、何してたんだろう。」

なんで、もっと早くに、素直にならなかったんだろう。

いつまでもいつまでも、自分の殻に閉じこもってばかりで。

『ワールド』ばかりに、逃げ込んで。

結局、あたし、リアルのこととか、本当の気持ちとかから、逃げてただけなんだ——」

亀田のコーヒーに、ぽちゃん、と何かが入る音がした。

それは透明な滴で、一定のリズムを刻みながら、次々にコーヒーへ注がれていく。その度に、亀田の肩が、大きく上下に揺れる。

俺は、自分のコーヒーカップの取っ手を掴み、それをぐい、と呑み込んだ。

熱い刺激が食道を刺激し、一瞬むせそうになった。

それをなんとか堪え、ゆっくりとカップを戻してから、俺は静かに言った。

「俺だって……俺だってそうだよ。」

結局、俺、自分のことしか、考えてなくて。

何か行動する前に、全てを諦めていて。

でも藤川は違った。

あいつ、いつも俺たちのことを考えていたし、行動していたし……」

自虐的な笑みが自然にこぼれたのが、カップに半分残ったコーヒーに映し出された自分の姿で、分かった。

「本当に、俺たちは、今まで何してたんだろうな……」

亀田はついに耐えきれなくなったのか、カップを両手に包み込んだまま、その上に顔を完全に伏せてしまった。

その細い肩が何度も苦しそうに上下する。小さな嗚咽と共に、カップに透明な滴がぽたりぽたりと落ちていく。

俺は何も、掛ける言葉が見つからない。見つかるわけが、ない。

そつと顔を上げて、一面のガラス張りの向こうに見える空を見た。空は薄い灰色になっていた。分厚い雲が、一面にかかっている。目の前に映る病室を見た。恐らく、藤川が眠っているであろう病室辺りを。

また目が覚めたら、藤川はあんなふうに、虚ろな目をしたままなのか――？

そう思うと、息が途端に出来なくなった。

喉からせり上がる苦いものをぐつと堪え、俺はカップに残った黒い液体を、全部胃の中へ流し込んだ。

痛いほどの苦みだけが、舌の上に残った。

――だとしても。

その舌を、俺は負けじと、ぐつと噛みしめた。

今度は、俺が、藤川を助ける番なんだ。

※

その夜、静かな雨がしとしと降りそそいだ。

その音をバックミュージックに、俺は机の上で頭を抱えながら、ずっと俺は藤川に起きたであろう出来事について考えた。

『ワールド』の中で何かあったのは間違いないだろう。それしか可能性はない。

さっそく俺は『ワールド』のログイン画面をパソコンに表示させ、

「リリイ」の最後の行動履歴を見てみた。
タウン、入り口の街で、一時間ほどログインしたことになる。

アウト時間は……俺がインする寸前だ。

少しだけ胸が痛んだ。もう少し、早く来ることが出来ていれば――

ともかく、悔やんでいても仕方ない。パソコンの画面を睨みつけながら、必死に考える。

きっと、タウンの中で、藤川の身に何かあった筈だ。

だけど、藤川にあれだけショックを与えるような出来事って、一体、何なんだ？

……まさか、俺とリリイと一緒に廃墟のダンジョンの時に遭遇したような、プレイヤーキラーにやられた、とか？

いや、でもそれはない。俺は頭を振った。

タウンの中じゃ、そういったプレイヤー同士の戦いは出来ない仕組みになっている。

だったら、何があるっていうんだ……。

駄目だ。分からない、思いつかない。

さ――。

窓の外からは、相変わらず細かな雨の音が聞こえてくる。

俺はうんうんと唸りながら、そのまま雨の音を子守唄に、混沌とした思考の中で眠りに落ちた。

翌朝は鈍い頭を抱えながら、強烈な太陽の照りつきを跳ね返すコンクリートの通学路を歩いた。

電話の音で起こされたので、未だに頭がガンガンする。

朝一番に、俺のスマホに通話が来たのだ。

送信者は、藤川。

驚いて通話をとると、藤川のお婆さんの声がした。恐らく、藤川のスマホから番号を探ったのだろう。

藤川は、予定より一日早く――つまり今日の午後に、退院するところが決まったそうだ。

ただ、精神的状態は悪く、あの虚ろな目のまま、何やらぼうつとすることが多いらしい。

だから、しばらく落ち着くまでは様子を見るそうだ。もちろん、学校も休む。

お婆さんはしきりに「あの時は由梨の傍に居てくれてありがとう」と言っていた。

俺はただ、いえ、俺は何もしてません、と返すだけで精一杯だった。

最後に、帰りにお見舞いに行きます、とだけ言い残し、電話を切った。

――そう、俺はまだ、何もしていない。

所々にある、小さな鏡みたいな水たまりを避けつつ歩いた。

ふと、古いラジカセのスピーカーから音が漏れるように、最後に藤川が言った台詞が脳内に流れてきた。

『だからね、もう、良いんだ。ほら、こうやって、触られても、何も感じないから、良いよね。』

私、初めて、この身体で良かった、て、思った。

何も、感じない。無理やり、触られても、何も思わない。恐くない』

——無理やり、触られても——。

そこで俺はハッと、立ち止った。

或る一つの可能性に、思い至った。

……まさか、でも、そんな……。

俺は急いで、学校への道を走った。

そして、校門付近で、じっと立ち尽くしながら校舎を見上げる女子生徒を見つける。俺は声を掛けた。

亀田はびくつと肩を強張らせながら、こちらへ振り返った。俺の姿を見るや、その表情を幾らか和らげた。

俺はその腕を掴み、何も言わずに体育館裏へと連行していった。

※

「……え？」

俺がついさっき思い付いた可能性を聞き終えた亀田が、目を大きく見開いた。

「多分、それしか考えられないと思うんだ。

藤川は、無理やり身体を触られそうになったんだと、思う」

体育館裏は、昨夜降り注いだ雨の湿気を充満させた空気が漂っていて、むんとしていた。地面のぬかるんでいて、気分が悪い。

額から、汗が徐々に滲んでいくのが分かった。

「——そんなの、酷すぎる……。で、でも待って」

亀田は、口元に手を当て、目を伏せながら言った。

「前に、そんなようなこと、ニュースにならなかった……？」

ある男性が、『ワールド』内で女性の身体を触ろうとして問題になったこと。確か、あったよね？

それ以降、他人の身体に触れて感じられるところに、制限がされていたように思うんだけど……」

そういえば。

俺もそのようなニュースを、知っていた。

一年ぐらい前の話だったと思う。

女性が、男性から無理やり身体を触られたとゲーム会社に通報があり、挙句には警察沙汰にまでなった。

社会問題にまで発展したそのニュースは、たちまち社会から批判を受けた。

それを受け、『ワールド』製作会社は、他人の身体を触って感じられるところに、制限を掛けた——と、聞いている。

うーん、と唸った。

「そうだよな……。制限かかっているとすると、無理だよな……」

でも、藤川は確かに、言っていたんだ。

『無理やり、触られても』と。

その言葉から考える限り、それしか考えられなかったのだけれど――。

しばらくしてから、亀田がふと顔を上げ、俺を見た。

「もしかして、さ。

誰かが……チート使った、とか？」

「チート？」

俺がオウム返しに訊き返すと、「知らない？」と亀田が首を傾げる。

「最近、公式の方で賑わってたじゃん。一部のチートが横行しているから、やめてください、てさ。」

もしかして由梨、そのチートの集団に捕まったんじゃない……」

チートが横行しているのは、なんとなく知っていた、ような気がした。

そうか、それなら辻褃が合う。

「なら――」

そう、俺が言いかけた時だった。

ふと、体育館の奥の方から、誰かがくすくすと笑い声を上げるのが聞こえた。

それは複数の男の声で、その冷たい響きだけが、嫌に耳に残った。悪寒が背筋をなぞる。

俺は口を噤み、そっと耳をそばだてた。近くの亀田が「どうしたの？」と問いかけてきたので、俺は口元に人差し指を当てながら、息を殺した。

しばらくしてから、今度ははっきりと、声が聞こえてきた。

「いやー、昨日も結構な子猫ちゃんたち、ゲットできたよなー」

そう、言っていた。

Log 20 くたびれてしまった美しいマネキン人形

「あ、この女、結構美人だったよなー」

「マジかよ。俺的には、こっちの女の方が好み」

「うっへへへ。やべ、興奮してきたかも」

「おい、やめろよ」

「もう一度、あの女の胸触りてえなあ」

それらの会話は確かに、体育館裏にある倉庫の後ろから、聞こえてくる。

隣から、亀田が息を呑むのが聞こえてきた。その目は大きく開かれていて、奥底でぎらぎらと強烈な光を放っているのが見える。

亀田の腕を、俺は掴んだ。つい力が入ってしまう。

目を閉じ、静かに深呼吸して気持ちを落ち着かせながら、その会話に意識を集中させた。

「にしても、ジュンのおじさん、すげえな。

あんな簡単に、プログラム構成しちゃうなんて」

「プログラム会社に勤めてて、ああいう手のものは得意なんだってさ。俺も、多少いじらせてもらった。

バスケ部引退して時間余ってたし、結構良い暇つぶしになったぜ」
「へー。ジュン、あったまいいなあ」

「だろだろ？ そのおかげでお前ら、こうやって楽しめてるんだから感謝しろよー、特に拓」

「俺も自由にプログラムとか組んで、チートしてみてえ」

「あのなあ。一長一短で出来るようなもんじゃないんだぞ。

俺、基本のプログラム組めるようになるまでも、結構時間かかったんだからよー」

「うわ、マジかー。頭悪い俺には、無理かしんね」

ははは、と今度は複数の笑い声が大きく響いてきた。

俺は――全身に力を込めて、内側から煮え立ち、沸騰してしまい
そんなエネルギーを、なんとか抑えつけた。

俺は、この声を聞いたことがある。

ジュンと呼ばれた、男の声を。

――駄目だ。今ここで、爆発したら。

その人物がやったという証拠が、まだあるわけじゃない。

目を閉じ、必死に自分に言い聞かせた。

ふと、隣から小さく「痛いっ」と声が聞こえ、俺はようやく自分
の手が亀田の腕に強く食い込んでいたことに気付き、慌てて手を離
した。

小さく謝りながら亀田を見ると、その顔は悔しそうに大きく歪め
られ、今にも泣き出してしまいそうだった。噛みしめられた下唇が、
白く変色していた。

松原君、と小さく亀田は言った。低いトーンの中に、何かを必死
で押さえつけているような、悲痛の声。

俺は頭を横に振った。まだ、動かないほうがいい。

するとまた、男たちの声が聞こえてくる。

「そーいやさ、ちよつと前に連れてきた女の子、すっげえ可愛かつ
たことね？」

「あ、もしかして、五人目に連れ去ってきた、あの髪の長い女の子
お？」

その台詞に、俺はぴくりと耳が動くのが分かった。

全意識が、そこに注がれる。

「そうそう！ 他の女と違って、子供っぽさがあってよかったよなあ。前まで大人な美人ばっかだったし」

「ああ。俺、記憶画像、持ってる。この子だろ？」

あの無邪気に抵抗する姿とか、良かったなあ」

「まさに、淡色の髪の乙女、じゃね？」

「上手いっ！ それ上手いぞジュン！」

ははははははは、と鼓膜を劈くほどの笑い声が、この場に響く。

それは、俺の脳を、これでもかと揺さぶってくる。

頭がくらくらした。

喉元がかあつと熱くなって、胃がむかむかし始めて、腹全体がずうんと重くなった。

反吐が出そうだった。呼吸が荒くなる。

ふと右袖が引っ張られたような気がして見ると、そこにぎゅっとしがみ付く手があった。

亀田の手は、赤くなりながら、これでもかと震えていた。

そして、大勢の笑い声が消えた後に、例の男——ジュンは、言った。

「でも、いくら逃げる為につつたって、自殺するこたあないのになあ。

リリイちゃん」

瞬間。

俺の視界が、大きくぐらりと揺れた。

足元から、ばしゃり、という音が聞こえた。地面に溜まった水たまりを踏む音。

俺は歩き出していた。倉庫の裏側へ向かって真っ直ぐと。その度に、びちゃ、びちゃ、と水しぶきが上がっていくのが分かった。盛大にそれを踏みつける。

腹の底で、燃えたぎるものが沸々と湧きあがっていた。沸点を越えたそれは、ぶくぶくと泡を立てていて、今の俺の原動力になる。俺の立てる音に気付かないのか、未だに甲高い笑い声が聞こえてくる。

奥歯を噛んだ。

ぎり、と鈍い音がした。

そして、倉庫にたどり着き、それをくいと曲がった俺は。どんっ！

と、倉庫の壁を強く殴った。

※

倉庫の裏側には、やはり数人の男たちが、近くのコンクリートに座りこんでいた。

その男たちから、鋭い視線が一斉にこちらへ向けられる。

その中に――

俺が一番良く知っている顔が、男たちの中心に、やっぱりあった。

俺を認識するや否や、『なんだ、こいつか』と言いたそうに鼻で笑い、まるで見下すかのように冷たい視線を向けてくる。

その顔を、キッと睨み返しながら、俺は叫んだ。

「あいつに——あいつに、リリィに、何したんですか！
野村先輩っ！！」

そして野村先輩は——
にやり、とその口元を、歪ませた。

「いきなり何？ 松原クン」

その冷たい視線は、容赦なく俺を突き刺してくる。周囲からも、同じように注がれる。

周りの男たちも注意深く見れば、知っている顔ばかりだった。

——バスケ部の、先輩。

いつも、野村先輩の傍で群がっている、先輩たちだった。

すぐ後ろで、荒い息遣いが聞こえてきた。亀田が走って来たのだと分かった。

ははは、と周りに居る男の一人が、大声を出して笑った。

「君さあ、あれだよねえ。

二年のパシリクン？」

顔が急激に、かあっ、と熱くなった。

足を一步踏み出した俺の背中に、くいと逆方向へ引っ張られる力を感じた。

「止めて松原君っ！」なんて叫びながら、俺の制服を背中から亀田が引っ張ってくる。

無意識にその手を退けようとしたら。

す、と男の中の中心にいた先輩が、立ち上がった。

そして、俺の近くまで歩いてきて、その手に持った一枚の紙を、俺に目の前に見せつけてきた。

「もしかして……この子のこと？」

リリイ、だった。

床の上でその身を縮めながら、今にも泣きそうに顔を歪め、助けを求めているかのような瞳で、こちらを見ている。

その身体を探るように、あちこちからごつい腕や足が、その小さい身体を触っていて――

俺は言葉にならない叫び声を上げた。

すかさずに目の前の胸倉辺りを掴んだ。身長は相手の方が上だった。それでも精一杯掴みかかった。

左手で相手の頬を殴ろうとした瞬間に胸の辺りをぐいと引っ張られた。次の瞬間にがつんと顔全体に衝撃が走った。

脳みそが揺れる。右頬が熱くなる。殴られたのだと分かった。

今度はふわりと身体が浮く感覚。視界が一回転。刹那、背中に大きな衝撃が走った。

身を屈めて呻いた。固い地面がすぐそこにあるのを感じた。背中や右頬からずきずきと痛みが走る。

ぐううと情けない声が漏れる。松原君と俺の名前を叫ぶ女子の声が聞こえた。

その瞬間まるでミュートが切れたかのように複数の笑い声がどつと溢れてきた。

「やっぱよえー！」「雑用係君サイコー！」「もっとやっちゃまえジュン！」「はははははっ」

傍にいた女子が俺の背中を支えてくれたおかげで、俺はようやく上半身を起こした。

ぐらりぐらりと揺らいだ視界の先には、勝ち誇ったような笑みを浮かべて、こちらを見下す相手の姿が見えた。

そしてその不健康な紫色の唇が、ゆっくりと開かれる。

「松原君の知り合いの子だったんだ？」

へえ、そんな奇遇なこともあるもんだね。

なんだ。言ってくれりゃ、松原君の為にとっておいても良かったんだぜ？」

はははははははははは……。

エコーをなして俺の耳を侵食する笑い声。

その度に背中や右頬が疼く。

笑う、笑う、笑う——笑いやがって。

何も知らない癖に。藤川が。それによって。一体どんだけ。傷ついたのか。

あれほどまでに。壊れてしまったのか。まるでマネキンのように。カッターなんか持って。そうだ。血。血血血血血っ！

それを。全く。知らない癖に。

よくも、よくも——！

視界が高くなった。自分が立ち上がったんだと気付いた。そんな俺の足に誰かがしがみつくのが分かった。お願いもうやめと悲痛の叫び声の下から聞こえた。

周りの男たちがはやし立て続ける。目の前の相手が姿勢を低くする。固く握られた拳を横に構えている。相手はにやりと笑った。言った。

「かかってこいよ。」

どーせ、俺に勝てる要素なんかどこにもないのによお？」

その、にやりと笑う真っ白い歯をこれでもかと睨みつけながら。

——まるで『勇者』さんみたい、だった。

藤川の台詞が、頭の中に蘇ってきた。

気付けば俺は、真っ白になった頭で、
めいっばい、叫んでいた。

「先輩の、『ワールド』のアドレス、教えて、下さい！

俺と、俺と——

勝負しろおっつー！」

※

藤川の部屋のドアをノックしたのちに、俺はゆっくりと開けた。

初めに目をついたのは、淡いオレンジだ。目の前の窓から、穏やかな夕陽が部屋を照らしていた。そのほのかな光に、いくらか安堵の息が漏れた。

窓の下にある机は、前見た時より綺麗になっていた。閉じられたノートパソコン以外、何も置かれていない机。

おぼさんがあれ以来、全て取り上げたらしい。危ない道具類はもちろん、文房具類、雑誌類に至るまで、全部。

俺は、部屋の右手にあるベッドの方へと、視界を向けた。

その上で、藤川がぼうつとした表情をしながら座っているのが、見えた。

何をするでもなく、ただの抜け殻のように、前を向いて座り続ける藤川。

胸が、疼いた。

この部屋に入る前に、おばさんから藤川の様子は聞いていた。

退院してからは、不可解な行動をとったり、自分を傷つけたりするようなことは、無くなったらしい。あの時はごめんね、と謝りもしたそうだ。

けれど、何かに捕らわれたような虚ろな目は、無くなってなど、いなかった。

現に、今。

ゆっくりと首を巡らせて俺たちを見つめるその瞳は、靄がかかったように、濁っているのだから。

俺はその瞳に捕らわれてしまいそうになるのを堪えながら、静かに、藤川、と呼びかけた。

藤川は――やはり、いつもみたいに微笑んでは、くれなかった。

ただ、俺と、俺の背後にいる亀田を、交互に見るだけだ。

ついに耐えきれなくなつて、俺はその視線から逸らした。

――それほど、ショックだったのだ。

あの、出来事が。当たり前だ。

だって藤川は、『ワールド』の中を、本物のリアルのように、思っていたのだから。

ふと、亀田が一步、足を踏み出した。

「由梨……。」

ほら、近所の美味しいケーキ屋さんから、特製のプリン、買ってきたんだ。

ごめんね。本当は、食べ物じゃない方が良かったって、思ったんだけど。

これしか思いつかなかったし、時間、なかったから。本当に、ごめんね。

ねえ由梨、一緒に、食べない？」

亀田はその手に持った、プリンの入った紙袋を差し出しながら言った。

藤川は、何も言わなかった。

そこにはやはり不気味なほどの闇を湛えた目があるだけ。

それがじっと、俺たちを、捕えてくる。

両こぶしを、きつく握りしめた。

亀田はそのまま由梨の傍のベットに腰掛る。

そして袋から、プラスチックに入れられたプリンを一つ、そしてプラスチックのスプーンを一つ、取り出した。

プリンのプラスチックの蓋を外し、ビニールからスプーンを抜き取る。亀田はそれでプリンを一掬いし、藤川の口元まで運んでいった。

藤川は、スプーンのプリンを見つめたまま動かなかった。

口を動かす気配もない。

ほら、と亀田は言った。呑み込みやすいから大丈夫だよ、と囁く。それでも藤川はぼうっとしたまま動かない。動いて、くれない。

もう。由梨が食べないなら、あたしが食べちゃうぞ。

そう言った亀田は、藤川に寄せていたプラスチックのスプーンを、自分の口の中へと入れた。

その頬から、一筋の涙が、流れた。

藤川は亀田の目から溢れだすものを、見た。その、靄がかかったような目で。

そして、小さく口を動かしながら、藤川は、

「麻子、ちゃん。どう、したの？」

と、言った。

俺はその言葉で、ようやく我に返ることが出来た。そこに一筋の光を見た気がした。

――まだ、藤川は、ここにいるじゃないか。

俺の知っている藤川はまだ、完全にいなくなってしまったわけでは、ないんだ。

すぐに藤川の近くへと寄り、その足元に屈みこんだ。

亀田の足元に置かれた紙袋からプリンを一つ取り出して、ビニールからプラスチックプーンを適当に抜き取り、一掬いしてプリンを口の中に入れた。

口の中ですぐに溶けていくプリン。甘みがとたんに口の中に広がっていく。それこそ舌が痺れてしまうほどに。

俺は笑おうとした。

けど、右頬に貼られている湿布が、それを邪魔する。

おまけに鈍い痛みも走って、思わず引き攣りそうになった。それでもなんとか、頬を緩ませる。

「ほら、藤川。これ、めっちゃ上手いって。すげえよこれ。さすが特製。

口の中に入れた途端、すっげえとろけるんだぜ。俺初めてだわこ

んな感触。

なあ、ほら、藤川も――」

そこまで言って、ハッと気付いた。

「松原君っ」と亀田が短く牽制する声が聞こえた。

――しまった。

一瞬気を抜いてしまい、つい、忘れてしまった。

藤川は……。藤川は……！

持っているプリンから、ぼこ、と嫌な音が聞こえた。

続いて、何かが手にべたりと張り付く感触。

見れば、入れ物のプラスチックが潰れていて、中身の黄色いものが手に零れていた。

床にも、ぼとり、と落ちていく。

――何をやっているんだ、俺は。

慌てて、その潰れたプリンを紙袋に突っ込み、そこから数枚のペーパーを取り出し、馬鹿だ馬鹿だ馬鹿だ、と何度も自分を叱りつけながら、カーペットに落ちたプリンを拾い上げ、ごめん、と謝りながら、ごしごしと力強く拭きとっていた時だった。

右頬の湿布の上から、そっと、何かが触れるのを感じた。

バツと、顔を上げた。

包帯でぐるぐる巻きにされた左腕が、すぐ近くに見えた。

その手が、俺の右頬を、そっと優しく撫でているのも。

藤川の顔を見た。

その顔は、やっぱり、マネキンだった。

そのマネキンに似合わない、赤く色付いた唇が、まるで永遠の時を越えてきたかのように、そうっと動いた。

「龍介、君。

いた、そう。ここ……。

だいじょう、ぶ？」

そう、小さく、囁いた。

———嗚呼。

やめてくれ。

やめてくれよ、藤川。

こんなときでも、お前は

人のことばっか、考えるのかよ。

その小さな左手を両手で包み込みながら。

俺は、泣いた。

これでもかと声を上げて、馬鹿みたいに、身体の中に溜めこんでいる水分を全部放出してしまうほどに、泣いた。

ほどなくして、藤川の近くからも、激しい嗚咽が聞こえてくる。

亀田の声、だった。

それは俺の声とエコーをなして、部屋の中を幾重にも幾重にも埋め尽くす。

両手から伝わる小さなぬくもりが、切なかった。

今日の前にいる、くたびれてしまった美しいマネキン人形を見上げるのが、苦しかった。

今ここにある、このぬくもりは、確かにちゃんと、俺の手の中にあるのに。

心だけは、まるで『ワールド』の中のあの瞬間に、取り残されてしまったかのようにだった。

「――ごめん、ごめん、藤川。

俺……俺、何も……出来なくて……」

俺は、ただひたすら、謝った。

――ごめん――

Log 21 ダンジョン↓天空に浮かぶ孤高の高原 再び(上)

決戦は、今度の日曜日の夜ということになった。

『良いぜ。その勝負、受けてやるよ。』

久しぶりに他の奴と戦うってのも面白いし、『ワールド』の方が派手に暴れられるからな。

あ、チートは使わないでやるよ。それで勝ったとしても味気ねえし、松原クンにとっても不利だろ？

場所はそっちが指定していい。当日までに連絡くれりゃ、構わねえよ。

『そのかわり——』

あの日から日曜日まで、数日ほど猶予があった。

その間、俺はずっと、学校が終われば部活をさぼって『ワールド』に潜りこみ、レベル上げる日々が続いた。

何度も何度もモンスターをなぎ倒し、どんどん経験値を稼ぎ、ついでお金も稼いで防御強化アイテムを入手していきながら。

ただ、どうしようもなく不安で仕方が無かった。

『松原クンがもし勝ったら、もう色々押しつけるのは止めてやるよ。一切、お前に関わることは止める。』

ただし、もし、俺が勝ったら——

『ワールド』でも、同じように働いてもらおうかなあ』

そう言って笑う先輩の声が、今も俺の耳元にこびりついて離れない。

あの日、家に帰るとさっそく、先輩の『ワールド』アドレスがス

マホに送られてきた。

早速知り合いリストに登録し、その詳細を見た。

名前は、ジュン。レベル、八十二。銃使い。

その時俺のレベルは六十ほどで、二十もの開きがあるのに焦った。レベル差は、攻撃力——相手に与える痛みの強さを表わすおおよその数値の差。

プレイヤー同士の対決になると、攻撃力と防御力——相手から受ける痛みの強さを和らげる数値と、あとは職業が要になってくる。

相手が銃使い……となると。

対決するとき、相手と接近戦に持ち込まない限り、こちらに勝利はないだろう。こちらは剣だから遠距離は苦手だけど、相手は接近戦が苦手になってくる。

だが、銃使いは機敏な動きが出来ることが特徴だ。その素早さでこちらの攻撃を軽々とかわされる可能性もあるし、おまけに至近距離で銃を食らうと、結構ダメージがでかい。

それでも、なんとか接近戦にさえ持ち込め、相手の動きを一瞬でも封じることが出来れば。

俺が一気に攻撃を仕掛けることも可能だろう。

とはいうものの。

レベル差などの色んな要素を睨めば、こちらの方が少し分が悪いのは目に見えている。それに。

俺が先輩と戦うことで、一体何の徳になるっていうんだ？

俺が勝てば、先輩は俺との関わりを一切断つと言っていた。それはいいとして。

でも藤川は？ あいつはどうなる？

勝てば、あいつが元に戻るわけじゃないだろう？ それにこういう戦いは、藤川に知られたらとても辛いことじゃないのか。藤川は何よりも、人のことを心配してくるから。

それに、俺が先輩に勝てるという保証は、正直言って、どこにもない。

むしろ、負ける可能性の方が大きいんだから。

そんなような負の思考だけが頭の中を連鎖して、その度に胃をきりきりと締め付ける。

あの時、勢いだけで相手に勝負を申し込んでしまった俺を責める。何故もっと、冷静になれなかったんだ、と。

でも。

もう、俺は先輩と戦うことを決めたんだ。後戻りは、出来ない。やるしかない。やるしかないんだ。

藤川のことは――勝ってから考えればいい。

手を強く握りしめながら、俺はいつしかそう思い込むようにした。

これは、俺自身に決着をつけるための、戦いだ。

※

ダンジョン↓天空に浮かぶ孤高の高原

対戦の五分钟前。

俺は愛用の剣の柄を右手でしっかりと握りしめながら、地面を強

く踏みしめた。

すると柔らかな風がこの高原を駆け抜けた。その風に身を置くように、目を閉じる。遠くで、巨大樹の葉っぱたちがざわりと唸る音が聞こえたような気がした。

どくどくと高鳴る心臓をなんとか落ち着かせようと、もう一度だけ深呼吸をする。自然に満ちた匂いが、俺の肺を満たしていく。

「本当に、勝負するんだね」

近くで、静かな声が聞こえてきた。

俺は地面を睨みつけながら、こくんと頷く。

「もう、決めたんだ。やるって。」

例え感情任せだったんだとしても、自分からそう申し込んだのだから」

「――そう」

聞こえる声は、とても小さくて、悲しげな音色だった。

もう一度、ぐ、と剣の柄を握り締める。

汗がじわりと滲んでるのが分かった。

レベルは、とにかく上げられるだけ上げた。

それでも、七十一。

相手とはまだ、十レベル以上の差が開いてしまっている。

インする前に相手の情報を最終確認した。レベルは変わらず八十一。余裕で勝てると踏んでいいのか知らないが、レベル上げはしていないようだ。

とにかく。やれるだけのことはやった筈だ。

あとは、どれだけ、接近戦に持ち込めるか。

どれだけ、相手に踏み込めるか。それだけだ。

「まあ……リュウが既に気持ち固めてるんなら、良いの。」

本当は戦うの恐くて仕方なくて逃げ出したいんだ、なんて言い出したら、リュウを追いだしてあたしが代わりに戦ってあげようと思

ったんだけど」

「そりゃ、残念だったな」

先ほどよりも少しだけ上向いた声に、俺は少しだけ頬を緩ませながらアサを見た。

アサは、真剣な表情で、こちらを見ていた。

「無理、しないで。」

あたしは……リュウを見守ることぐらいしか、出来ないけれど」

「ああ。サンキュ。それだけでも、十分心強いよ」

俺は、気付けばその頭を、ぽんぽんと軽く叩いていた。

アサは「ちよっ……」と身を強張らせたが、その後に顔を真っ赤に染めて、地面へ伏せた。

と、その時だった。

※

「よう。お待たせ松原クン」

ふいに掛かった声で、俺とアサは同時にそちらを見遣った。

数人の男性プレイヤーの中に、先輩が――プレイヤー・ジュンが、先頭に立っていた。俺は息を呑んだ。

すらりと高い身長。そして、どこかの黒い魚を隙間なく巻きつけているんじゃないかと思えるほどに、身体全体が漆黒の鱗で覆われている。髪の色だけが、妙に浮いている。

そして肩には、見る者を圧迫させるような、黒光りする大きな銃が担がれているのが見えた。

ジュンの口元が、にやり、と曲がる。

「あれ。何々、女の子も一緒なの。もしかしてあの時、松原クンの近くにいた子？」

へー、めっちゃ可愛いじゃん」

ジュンの周りにいる三人の男たちも、にひひと笑う。体育館裏で、野村先輩の周りにいた先輩たちなんだろう。

俺は咄嗟に一步踏み出し、身を強張らせたアサを背後に隠した。そして数歩先にいるジュンと、真正面から対峙する。

相手は見下すようにこちらを睨みつけてくる。その鋭くて底冷えするような視線が、俺を容赦なく突き刺してくる。

それは、リアルと全く同じ目。

途端、胸倉を掴まれた気分になった。頭がくらくらしてくる。

記憶の中に居る先輩の視線に、そして今、目の前にいるジュンの視線に、呑み込まれそうになる。

俺はなんとか両足で踏ん張り、剣の柄をもう一度きつく握りしめた。

駄目だ。ここで負けたら、駄目じゃないか。

勝負はこれからだっていうのに。

頭の中で必死に自分を叱責させた。

そして、俺は言った。

「なんで先輩は、あんなチートみたいなこと、してるんですか」

少しだけ声が裏返った。

しばらく間を置いてから、ジュンの周りから笑い声がどつと湧いてきた。

「なんで、だってよ」「何その単純な質問っ」「う、うけるっ」

それは俺の鼓膜を容赦なく揺るがせ、途端に顔がかあと熱くなるのが分かった。下唇をきつく噛んだ。

しばらくしてからジュンは、『お前馬鹿なんじゃないの』と言

たそうに、ふつと鼻で笑った。

「んなもん、決まってるだろお？ 面白れえからだよ」

「だとしてもっ」俺は叫んでいた。「人に危害を加えるようなこと、止めて下さいっ！」

「……は？」

笑い声が、ぴたりとやんだ。

今度は、痛いほどの重い沈黙が、この場を支配し始めた。

自分の、ごくりと鐺を呑む音が体内で大きく響く。どくどくと心臓が唸る。さわり、と草たちが身を震わせる音が、耳元を掠める。

ジュンは相変わらず、こちらを堂々と睨みつけている。

その目に、先ほどよりも深い闇を湛えながら。

また、俺はその闇に捕らわれそうになる。深い深い井戸の底を覗いている気分で、落ちてしまいそうになった。慌てて全身に力を込める。

そして、ジュンは、その肩に担いでいる大きな銃の口を、こちらにゆっくりと向けてきた。

「――甘ちゃんだねえやっぱり。キミはさあ」

瞬間、その双眸に一筋の鋭い光が走ったのが見えた。

同時に、ぞわ、と俺の全身に戦慄が走る。

俺は背後に向かって「下がれ、アサっ！」と叫んだ。

咄嗟に剣を構え、身を屈めた。足に力を込める。

「んじゃあ、無駄口叩いてないで、とつとと始めようか。松原クン？」

それが、開戦の合図となった。

どどどどと連続して鳴り響く銃声。俺は反射的に左側へ飛んだ。さっきまで立っていた地面から砂埃が上がる。

手にした剣を前に突き出しながら俺は黒い標的目掛けて走った。銃は未だに乱射されている。その口をゆっくりとこちらへ向けながら。左側へ迂回しつつ距離を詰めた。とにかく走った。叫んだ。

標的まであと数歩。銃声が止んだ。途端、目の前にひゅんと飛んでくる黒い物体。避けきれず腹に直撃する。後ろ手に飛んだ。相手の銃だった。

なんとか転びそうになるのを堪えて相手を見た。その手には既に細長い銃。銃口が俺に向けられる。しゃがみながらすぐ右側へ飛んだ。銃声。左足に激痛が走る。音を上げそうになった。歯を食いしばる。

跪きながら剣を地面に沿って薙いだ。軽く舞い上がる砂埃。切っ先から飛んだ砂が相手にかかる。一瞬だがひるむ。その隙を狙って飛び付いた。両手で剣を振り上げた。

瞬間、相手の足が動くのが見えた。横に振られたそれが俺のわき腹に食い込んだ。今度は真横へ吹っ飛んだ。強烈な砂埃が鼻を刺激して咽せた。

俺は地面で腹を抱えてもがいた。息が苦しい。なんとか頭の中で自分のHPを確認する。三分の一ぐらいになっていた。またお腹に激痛が走る。拳を地面に叩きつけた。

くそっ。くそっ……！

「なんで松原クンさ、そんな本気になるわけ？」

頭上から声が降ってきた。

同時に、頭を思いつきり踏みつけられた。

ぐっ、と声が漏れた。

左頬が、徐々に地面にめり込んでいく。

「そうやって本気になっちゃって、恥ずかしいと思わない？」

ぐりぐりと足を動かしながら、じわじわと力を込めてくる。

抵抗しようと両手を地面に着いた時、銃声が鼓膜を揺さぶった。

左腕に強い衝撃が走った。叫んだ。叫ばずにはいられなかった。

そして、ジュンは、言った。

「だってさ。ここ、ただの『ゲームの世界』だろ？」

お遊びの世界じゃん？ リアルと違うじゃん？」

——お遊びの、世界。

ここが……『ワールド』が……ただの……ゲームの世界？

「だから、女の子と遊ぶときだって、わざわざ『ゲームの世界』にしてあげたんだぜ？」

『ここ』で感じられるのは、所詮ただの偽の感覚なんだし。

それなら女の子だって被害にあってもすぐ忘れられるってもんだし、俺たちだってこうした偽の感覚で我慢してあげてるんだからさあ。

これ、普通なら、感謝してほしいぐらいなんだけど」

そう言い放つ先輩の声は。

とても愉快そうに、くくく、と笑っていた。

ああ、そうだ。

『ここ』は——『ワールド』は、只のゲームだ。

体感出来るってだけの、オンラインゲームだ。

その体感も、所詮は疑似的なもんなんだろう。
そんなことは、分かっている。
分かっているんだ。
でも。

俺はもう一度叫んだ。両手に力を込めて今度こそ起き上がる。頭の上にある足が振り払われた。ジュンは後ろへよろめく。

ガラ空きになったその足を両手で掴んだ。そして力を込めて前へ押す。背中から倒れようとする相手の胸元へ飛びかかる。俺の身体が相手の身体に直撃。共に後ろ手に倒れる。

下敷きになった相手。その顔を悔しそうに曲げるのが見えた。両手で剣の柄を持つ。迷いもなく俺が剣を振り上げた瞬間――

銃声と共に、剣が手から吹き飛んだ。

それはくると一回転して数メートル後ろの地面に突き刺さった。ハッとして前を見た。そこにはあのジュンの周りにいた奴らが俺に銃口を向けていた。

そいつの口元が歪む。咄嗟に動けなくなった。

次に気付いた時、鳴り響く銃声の後、身体の数か所から激痛が走るのを感じながら、俺は仰向けに倒れていた。

「ふいー、あつぶねあつぶね」

身体を巡る痛みに耐えながらなんとか目を開く。

ジュンが首に手をあてながら、ゆっくりと立ち上がっていた。

「よ、ダスト、サンキュー」

そしてジュンは、さっき俺を撃ってきた相手に手を挙げる。

そいつも応じるように手を挙げた。

「……な、んで……」

抗議しようとしたが掠れた声しかでなかった。

ジュンはこちらに振りかえり、「あれ、駄目だったあ？」と言った。

「別に、『一対一』ってわけじゃないっしょ？」

俺が、ぐっ、と両こぶしを握り締めた時だった。

「卑怯よっ！」

凜とした声が耳をつんざいた。

——まさか。急いで声の方を見た。

五メートル先に、標的をジュンに定めて矢を構えるアサの姿があった。

「馬鹿っ！ やめろアサ！」

身体を急いで起こそうとした。けれど全身に強烈な電撃が走ったような鋭い感覚に襲われ、またもや地面に倒れた。金縛りにあったように動けなくなる。地面を睨みつけた。頼む、動け……っ！

歯を食いしばりながらなんとか上半身を起こした時、短い悲鳴が聞こえてきた。俺は息を吞んでアサの方へ視線を戻した。

アサは、背後から男に両手を掴まれていた。

ふんどし一丁の男。

ジュンの仲間だった。

「ちよっ……いや……離してえっ！」

頭一つ分背が高い男の腕の中で、アサは必死にもがいている。

俺はもう一度叫ぼうとしたが、身体の痛みがそれを制した。

「やっべ。この子マジで俺のタイプかもしれねえ」なんて、男は言

っている。アサの顔が引き攣るのが見えた。ひゅう、とジュンが軽く口笛を鳴らしたのが聞こえた。

「じゃあさ、松原くんがせっかく連れてきてくれた子だし。この勝負終わったら、一緒に遊んじゃう？」

「なっ……!!」

俺がジュンへ顔を向けた時。

カチャリ、と。

額に、銃口を押しつけられた。

「だからさ、甘いんだってば。松原くん」

その、口元をにったりと歪ませながら、ジュンは言う。
嫌に鋭い悪寒が、背筋を駆け抜けた。

引き攣る口元を必死に動かしながら、俺は言った。

「でも、アサは、アサは関係な——!!」

するとまた、アサの悲鳴が聞こえた。ハッとしてそちらを見た。

アサは、男の腕の中で、ぐったりと抱えられていた。

俺の頭の中で、煮え切ったものが一気に爆発した。

「アサに——アサに何をしたあ!!」

腹の底から声を出した。

目の前の敵を睨みつける。

そいつは、笑った。

「いやだなあ。ちょいと意識凍結させてもらっただけだよ。
だいじょーぶ。データちょいといじったら、すぐに目え覚ますっ

て」

「データ!？」

「ああ、そう。」

感覚を司るデータを、ちょいとね」

——まさか。

アサを見た。いつの間にか男二人に囲まれている。力が抜けたように動かない。

途端、あの日、壊れてしまった藤川の虚ろな目がフラッシュバックした。

やめろ。

やめろ、やめろ、やめろ……………!

「うああああああああ」

また叫び、額に当てられた銃を手でどかし、相手に飛びかかり、相手の胸倉に手を当てた瞬間、その両手を掴まれ、瞬間前が見えなくなつて、身体が倒れるのを感じて、腹にまた強烈な痛みが走つて、大きな音が響いて、次に認識出来た時に俺は、地面に大の字に、伸びていた。

腹には、ジュンの足が、見えた。

「お前さ。悪あがきもいい加減にしろよ。格好悪いって」

上を、見上げた。

太陽の陽をバックに、さらに深い闇に染まった、その身体。

その口元が、ゆっくりと、開く。

「せっかくだからさ、教えてやるよ松原くん。」

この『世界』なら、自分は強くなれる、とか思っちゃってんでしょ。

でもなあ。

リアルでも弱い奴は、結局この『お遊びの世界』でも、弱いままなんだよ」

視界が、薄れていく。

頭の中で自分のHPをもう一度確認する。

もう、一ミリぐらいしか、残っていなかった。

全身が悲鳴を上げている。

もう、動けない……。

やっぱり、俺は……。

「この『偽の世界』で、“偽の自分”に勝手に酔いしれて、勝手な自己妄想抱いて、結局は逃げてるだけだって、いい加減気づけって」の」

——『偽の世界』。本物じゃない、世界。偽物の、世界。リアルじゃない、逃亡の世界——

……本当に、そうなのか？

そう、自分に問いかけた時。

声がした。

違う。

声が、蘇ってきた。

『“生きている” なんだって、思った』

——嗚呼。

そう、なんだよな——

お前は、お前はずっと——

そして。

俺は、気付けば、

「———違うっ！」

と、空に向かって吠えた。

「偽物、でも、逃げているわけでも、ないっ！

確かに、ここは、コンピュータ上の、プログラムで作られた、架空の世界だ。

でも、だけど、そこに居るプレイヤーは正真正銘の、生身の人間のはずだっ！

感覚だって偽物だけど、でもちゃんと確かに伝わってる！ リアルと同じように認識出来る！

俺だって、ここに居る俺だって、そんなプレイヤーの一人だ！

偽の自分なんかじゃない！

それは、藤川も、亀田も、先輩だってっ！

だから、そんな人たちが集まるこの世界は偽物じゃないし、ここに居る俺も偽なんかじゃない！

ここも立派な、リアルの一つだ！」

そこまで叫んだ時に。

俺は、気付いた。

——そうか。そうなんだよ。

ここも、ちゃんとしたリアルの一つだ。

それをずっと前から、藤川が教えてくれていたというのに。

ようやくその認識を、自分の手でしっかりと掴むことが出来る。

だから、あの時、廃墟で相手にきちんと断れたのも、藤川が「格好良い」って言うてくれたのも。

全部、“自分自身”なんだ。

その時、だった。

地面から、光が天に向かって大きく放たれた。

俺の視界が、一瞬にして白く塗りつぶされる。

「なっ！ 何だ、これ！」先輩が短く叫びだす。「おい、てめえら逃げろ！ 体力削られてるぞっ！」

足音が、遠ざかっていくのを聞きながら、俺はやっぱり動けずに、目を閉じた。

——暖かいな、と思った。

その光の粒子の海に吞まれながら、身体が徐々に楽になっていくを感じた。痛みが、潮が引くように無くなっていく。

ようやく上半身を起こすことが出来た。目を細めながら、ゆっくりと辺りを見渡す。地面には光の線が描かれているのに気付いた。その線に沿うように、光がまっすぐ天に伸びている。

それは何メートル先にも続いていた。ああ、これは、巨大な魔法陣だなと理解できた。左に視線をやると、地面にへたりこんで、俺と同じように暖かい光に吞まれているプレイヤーを見つけた。アサだった。驚いたように目を見開いているのが見える。

一体、誰が——？

やがて光が薄れ、地面に展開された魔法陣が小さくなっていく。

あたりは次第に高原の姿を取り戻していく。

そこで俺が、視線を前方に遣った時。

一つの人影が、見えた。

その人物は、大きな杖を両手で持ちながら、天に向かって掲げていた。

杖の先端には、ボウリング玉ほどの大きな水晶玉が見える。まるで、廃墟のダンジョンに散らばっていた星たちを凝縮させたような、透き通った水晶玉。

それを、両端についた大きな羽が、ゆったりと包み込んでいる。

とても、綺麗だった。いや、神秘的だった。

その人物は、ゆっくりと杖を下していく。

長い髪が、さらりと揺れるのが、見えた。

嗚呼。

その、人物は――

Log 22 ダンジョン↓天空に浮かぶ孤高の高原 再び（下）

「藤川っ！」

俺は、目の前に立つ人物を――藤川を見た。

藤川は、泣いていた。

頬から次々と涙を滴らせ、杖を両手で支えながら、ただじっと俺を見て静かに泣いていた。

急いで立ち上がり、藤川の元へ走った。

「なんで……なんで、ここに……！」

肩で息をしながら、その顔を覗きこんだ。

つぶらな瞳には、ちゃんと光が宿っていた。涙の膜が、俺の姿を鏡のように綺麗に映し出している。

藤川は、未だに涙を流しながら言った。

「麻子、ちゃんに……。教えて、もらって」

「え？」

慌てて亀田を見た。

丁度、「由梨っ！」と叫びながら、こちらへ向かって走ってきていた。

亀田に向かって、俺は言った。

「お前、なんで藤川に今日のこと言っただんだよ！」

「えっ。あ……」

ようやくこちらにたどり着いた亀田は、きょとんとした後に、小さく「ごめん」と言っただけで目を伏せた。

「昨日、由梨のお見舞い行った時に……つい、口がすべって」

「口がすべって、て！」

「でもまさか、由梨が本当に来るなんて思わなかったんだもん！」
亀田は肩を怒らせながら叫んだ。「ただ、由梨に、松原君が先輩と決着つける事実だけ知ってもらえれば良いな、て。」

悔しいけど、松原君、由梨のことがきっかけで、頑張ってるんだ
よってこと、知ってほしかったただだよっ」

「な……」

思わず、口ごもった。

そんな俺たちの横で、藤川がつつかえながら泣く声が聞こえてきた。

藤川はずっと、目を固く瞑って肩を大きく震わせながら泣いている。

そんな姿があまりにも痛々しくなって、俺は慌てて藤川に呼び掛けた。

「藤川、だ、大丈夫、か？」

その、急に、プレイなんかして……」

「そうだよ由梨。無理して来なくても良かったのに！」

「だって、だって……」

しゃっくりを上げ、言葉を詰まらせながら、藤川は

「こわ、かった、けど。」

でも、いても、たっても、いられなく、なっちゃって」

と言った。

俺は亀田を睨みつけた。

「ほら、見ろよ！ 藤川はこういうヤツだって知ってただろう！？
勝負終わった後で報告しても良かったじゃないかっ！」

「んなこと言われたって……！ だって、本当につい、だったんだもん！ それに、まさか、由梨、本当にインするだなんて——」

亀田と俺が、口論し始めた時だった。

「――嬉しかった」

小さな細かい声が、漏れてきた。

俺と亀田は同時に、藤川をみた。

藤川は、両手で顔を覆いながら、言った。

「すごく、うれし、かった。

龍介君が、ここ、もう一つの、リアルだって、言って、くれた、
ことが」

あ――――。

聞いて、いたのか。

あの、台詞を。

藤川は、先ほどよりも大きな声を上げて泣いた。

とても繊細で、幼い子供のような泣き方。亀田が母親のように「
ああ、ほら由梨、泣かないでよ」と傍へ寄った。

俺はいつしか、そんな藤川の様子に、少しだけ吹いてしまつて。
ゆっくりと、藤川の元へ近寄った。

「……ありがとな、藤川」

藤川が顔を上げ、少しでも瞳を大きく見開いて俺を見た。

俺は、ずっと胸に溜めていたものを吐き出すように、思いを言葉
に綴っていった。

「藤川が、教えてくれたんだ。ここも、”リアル”の一つなんだ、
て。

だから俺、もう逃げるのはやめよう、て思えたんだ。

いや……逃げる、なんて表現、おかしいけど。

でも、ホント、お前が色々頑張ってくれたから、俺も、亀田だって、こうやってここに居ることが出来てるんだと思う。

だから。

ありがとう。そして、ごめん」

藤川は、俺の言葉を聞き終えた後に、徐々にその肩の震えを大きくさせ、余計に顔をぐちゃぐちゃにさせた。

そして、ふるふる、と頭を振った。

「私こそ——ありがとう」

そう、藤川が微笑んだ時だった。

「いやー。

さっきの魔法陣、すげえなあ」

遠くの方から、低くて鋭い声が飛んできた。俺は急いで、そちらを見た。

数メートル先で、先輩がこきこきと首をならしながら、俺たちを見ていた。

「ああ、何？ 良く見りゃ、リリィちゃんじゃん。もしかしてさっきの、リリィちゃんの魔法？

ふーん、すげえなあ」

にたりと笑う口元。けれどその目は、笑っていなかった。

後ろから、野村先輩の周りにいた男たちが現れた。それぞれの手

に持った細長い銃を、こちらへ向けながら。

「何故か知らないけど体力削られまくって、めっちゃ焦ったんだぜ？
まあ、回復アイテムあったからすぐ解決出来たけど。

かわりに、そっちは全快、てわけか。おもしれえ」

先輩は、その手にもった拳銃を、容赦なく俺たちへ向けてきた。

「どーせなら、もうキミら三人相手にしてあげるよ。
そっちのほうが、”ゲーム”としては盛り上がるだろう？」

ぐっ、と両こぶしを握り締めた。
盛り上がる、だって？

冗談じゃない。

藤川にあんなことにしておいて、しかも遊びのように、こんな戦いに巻き込まうだなんて。

そんなの、絶対に、許されることじゃない。

今なら――負ける気が、しない。

俺は頭の中でイメージすると、右手が光り出した。そこに現れた剣を、しっかり掴んで一薙ぎした。

先輩を睨み返しながら、俺は言った。

「亀田、藤川と一緒に後方へ逃げろ。

俺がなんとか先輩たちの動きを引きつける。その間に、ワープ装置へ向かって走ってくれ。

二人で無事に脱出出来ればそれでいい。出来るだろう？」

少しだけ間が空いた。

亀田は深呼吸するように大きく息を吸い込み、そして、

「いやだ」

と、あっさり断った。

おい、と言い返そうとして亀田の両目を見て、俺は途端に何も言えなくなった。

その両目には、強烈な意志の強さを表す光が灯っていた。

「あたし、もう逃げるのは嫌。

見守っているだけなのも、嫌。

今ならあたし、ちゃんと、『ここ』にいるあたしのこと、信じられるから。

だからちゃんと戦いたい。自分自身の為にも。

それに、由梨のこと触ったことや、あたしに変なことした仕返し
もしてやりたいしね」

「でも、それじゃ藤川は」

「由梨の傍にいながら戦うよ。

というか……松原君のこと、後方からサポートする。それなら良いでしょ？」

ねえお願い、松原君。あたしにも、決着つけさせて」

真っ直ぐに投げかけられる光は、まるでこちらの網膜を焼き尽くさんとしているかのようにだった。

もう迷わない。

そんな刃のような意志が、はっきりと伝わってくる。

「……わかった」

その刃を心の底にしっかりと刻みつけながら、ゆっくりと頷いた。

亀田の表情が、ふっと緩んだ。

俺も顔を緩ませながら、藤川へ視線を遣った。

藤川は既に泣きやんでいて、穏やかな表情で、こちらを見ていた。

ふと、遠くから、バンっ、と銃声がして、急いでそちらへ顔を向けた。

痺れを切らしたかのような表情をしている野村先輩が、天へ向かって銃口を向けていた。

「あのさあ。お喋りなら後にしてくれない？

もう、こっちから行かせてもらうぜ」

先輩たちが、銃の狙いを定めてくる。

「来るよ松原君！ こっちは任せて！」 亀田が叫んだ。

「分かった！ 二人でそこ、動くなよ！」

数メートル先にいる先輩を、もう一度睨みつけた。

その目をきつく絞り、銃口を俺に向けながら、もう一度鋭い銃声音が響いた瞬間。

俺たちの周囲の地面が光り出した。

足元には、大きな魔法陣。その上にドーム型の光の蓋が出来、俺たちをすっぽりと覆いかぶさった。

放たれた弾丸が、それによってはじき返された。

驚いて背後へ振り返ると、藤川が、最初見かけた時のように杖を両手で支えながら上空に掲げていた。

俺に向かって、ゆっくりと微笑むのが見えた。

俺は静かに頷き返し、前方の先輩たちを見据えた。右手にある剣の質量を確かめる。

次々と鳴り響く銃声。全て光の壁で遮られる。だがほどなくしてその壁が薄れてくる。魔力が切れていく。

銃声が途切れたのを見計らって俺は一直線に走りだした。銃声が一気に俺に集まる。身体に流れ込んでくる弾。不思議と痛くなかった。藤川の魔法のおかげだ。

野村先輩の周囲の男たちに抱えられた銃が一斉に光り始める。何かエネルギーを溜めこむように。身を屈めて更に足を早めた。

すると背後からひゅんひゅんと複数のが俺の横を飛んでいった。真っ直ぐに周りの先輩たちの元へ駆ける一直線の光。

七色に光る矢だった。

それらは虹色の軌跡を描いて風のように飛ぶ。やがて受け崩れゆく周囲の男たち。短い悲鳴が轟く。

残されたのは、焦るように視線を彷徨わせている、野村先輩ただ一人。

くっ、と苦々しい表情を作った後、俺へ銃口を向ける。

銃声。すぐさま左へ飛んだ。間をおかず、次々と音が鳴り響く。

不思議なことに、こちらへ向かう弾はまるでスローモーションに見えた。走りながら身を翻す。全て後ろの地面に着弾する。

やがて、悔しそうに顔を歪める野村先輩の目と鼻のすぐそばまで迫ってきた時。

剣を、思いっきり下から上へ、薙いだ。

上空に舞うのは、銃。

何回転かした後に、地面に思い切り突き刺さった。

俺の目の前には、野村先輩。

その高い鼻の真正面に、剣の切っ先を向けた。

野村先輩は、「ぐっ」と声を洩らしながら、憎々しげに俺を睨みつけてくる。

周りから、苦しそうに呻く声が聞こえてくる。崩れ落ちた先輩たちは、地面で身体をねじっていた。上手く動けないのだろう。恐らく麻痺だ。

剣を突き付けながら、俺は先輩の顔を見た。

「……なんだよ。

やりたいならちやっちやとやればいいだろう？」

不気味に引き攣らせた笑顔で、そう言った先輩。
俺が、剣を持つ手に力を込めた。

「――先輩。

お願いします。

あんなチート行為、止めて下さい」

不思議と、声は穏やかだった。

野村先輩は、何も言わない。

続けて、俺は言う。

「さっきも俺、言いましたけど。

ここは、『世界』は偽物だけど、ここにいる俺たちは、リアルそのまんまなんです。

感覚は確かに偽物なのかもしれない。でも、そこで傷つけられた心は本物です。

藤川――リリィは、この世界を、まるで本当のリアルのように、大切にしてきました。

それであいつ、先輩から受けた出来事に酷くショックを受けて、ついには自傷行為にまで走ってしまったんです。

分かりますか？ あいつ、カッターで、自分の腕を切ったんですよ。それくらい、ショックだったんです。

「それでも、偽物だって言えますか？」

先輩の顔が更に引き攣る。

「それに、チートは立派な犯罪行為です。逮捕されてもおかしくない。

だから、お願いです、先輩。
止めてくれませんか」

一陣の風が、俺と先輩の間を通りぬけていった。

ひゅう、と軽やかな音を耳元にかすめながら。

しばらくの沈黙。

ふいに、先輩が、無理やりその口元を曲げながら言った。

「――何？」

じゃあ、この勝負終わったら、松原クンは公式に俺のこと通報するってわけか」

「――んなことしないっ！」

俺はもう一度、剣を持つ手に力を込め、叫んだ。

「俺は別に、先輩が捕まるのを見たいわけじゃない！ むしろ嫌な
んですっ！」

先輩は、バスケット部にとってすごく重要な人だと思うから！

俺、バスケット部で初めて先輩のプレイ見た時、すごく感動したのを
今でもはつきり覚えてます！

現役の頃、迷いもなく相手にぶつかるとか、実はチームの
為に頑張ってる姿とか、マジで俺、尊敬しました！ 友達からの強

引な誘いだっただけど、バスケ部入ってよかったとも思ってたんです！
だから一年の終わりに、先輩から声かけられたときは正直言って
嬉しかったんですよ！　こんな、基本すら出来ない俺を見てもらえ
たような気がして！

でもそれが段々苦痛になってきて、引退してからバスケする先輩
の姿があんま楽しそうじゃないのとか見たとき、なんつーか、悲し
くて！

だから、先輩！　俺も、もう逃げるのやめます、ちゃんとバスケ
やってみようと思います、だから、だから！
お願いしますっ」

頭の中で、色んな感情がごちゃまぜになって、とにかく叫ぶこと
だけで必死だった。

心臓がばくばくと動機を強く打つ。血の巡りが早まるのが分かる。
震える唇を一文字に結ぶ。

そして気付けば、自分の持っていた剣を投げ捨て、地面に膝をつ
き、両手について、
頭を、下げた。

土下座、だった。

やがて。

くっくくくく、と。

先輩が忍び笑いをするのが、聞こえてきた。

「――本当にさ。

甘いよねえ、松原クンて」

頭を上げると、先輩は一步身を引いて、くるりと背を向けた。

そして、手をひらひらさせながら、ぶっきらぼうに言う。

「あーあ。

ま……、どーせ俺の負けになるんだろうしなあ。

いーよ、わあったよ。チートの件、考えといてやる。

それと、バスケ、精々ががんばんな」

そう告げ、周りに倒れていた先輩へ向かい、「おい、ログアウトすっぞ」と声を掛けた。

麻痺の効果が薄れてきたのか、ゆっくりと上半身を起こした先輩たちは、各々がぶつくさと文句を言いながらも、ワープ装置へ向かって歩いていった。

穏やかな風が一つ、俺の身体を優しく撫でながら、草の上を滑っていった。

エピローグ

「……なんか、不思議な感じ、するよね」

「不思議、て。どんな感じなんだよ」

「こうやって空ばっか眺めてるとき、自分が浮いてるような感覚」

「あ、それ私も分かるよ、麻子ちゃん。」

なんか、背中に羽でもついて、ふわふわ浮いちゃうような気分になれるよね」

「なんだよ、それ。……まあ、分からなくもないけど」

「気持ち良いだろうね。街を上から見下ろして、風を全身に受けながら飛行していくの」

「……いや……それ、なんか、怖いと思うんだけど」

「ええ、なんで？ 龍介君、飛ぶの怖いのか？」

「飛ぶのが怖い、てか……」

「由梨。松原君、高所恐怖症なんだって」

「あ、そうなの？ 高い所、駄目なの？」

「ておい、亀田！」

「だって、凶星なんでしょー？」

「……うぐ……」

俺が小さく呻くと、頭上から亀田と藤川の笑い声が聞こえてきた。同時に、目の前に広がる葉っぱのカーテンが、さらさらと揺れる。

巨大樹も、なんだかくすくすと笑っているように思えた。

ふん、と小さく鼻を鳴らしてやると、顔の近くにある土から、優しい匂いがしてきた。

それを精一杯肺の中へ押し込め、地面に預けている全身から力を抜いていく。本当に、ふわふわと浮いてしまいそうだ。

「にしても驚いたわ。由梨、あんなすごい技出せたんだね」

「あ、それはきつとロロちゃんがくれた杖のおかげだよ」

「ロロちゃんて……ああ、手紙に書いてあった子の名前か。アメリカから来たんだっけ？」

「そう。とっても可愛い子なんだ。その子にもらった杖。レアものだって」

「さすが。アメリカカオリティーは違うな」

「松原君、なにその『アメリカカオリティー』て」

今度は、三つ分の笑い声。

「でも、さっきの戦闘は、本当どうなるかと思ったよ、あたし」

「私も、ときどきだった。」

遠くで見ていた時、龍介君と麻子ちゃん、やられちゃうと思ったら、私、苦しくなって」

「……悪かったよ、俺、弱くて」

少しだけ罰が悪くなって、そう言った。

すると藤川は上半身を起こして、俺を見た。にこり、とほほ笑んだ。

「ううん、そんなことない。格好良かったよ」

桜色に染まる、その頬。

伝播するように俺の顔も熱くなってきて、慌てて藤川から視線を逸らした。

「そ……そんなんでも、ないと思うけどな」

「あたしも」ふいに亀田の声がした。「あたしも、あの松原君は潔くてさっぱりしてて良かったと思う」

くすくすと笑う亀田。ごろんと横向けになって、火照りが止まらない顔を、二人に見えないように隠した。

「……でも、本当に先輩、チート、止めてくれるの、かなあ……」
藤川の沈んだ声が、辺りに響く。
俺は、目の前に生える草を見つめた。

去り際に、ふっと緩んだ先輩の口元が、頭の中に蘇ってくる。
それは、いつも見るような、歪に曲がったものでは、なかった。
本当に、つい純粋な笑みがこぼれてしまった、というような、自然な笑み。

「大丈夫だって。
先輩は多分……止めてくれると、思う」

そうだと良い、と思いながら、言葉を口にした。
そっか、と藤川は小さく呟いた。

「それに、いざとなったら松原君が成敗してくれるって」
「ちょっ」

慌てて上半身を起こしながら、すぐ傍の地面に寝転がっている亀田の顔を軽く睨みつけた。
亀田はからから笑いながら、同じように上半身を起こした。

「……でも、さ。良かったよ、あの台詞」
「へ？」

地面にしゃがみ込む亀田の背中が、急に哀愁を帯び始めたように見えた。

「――『ここも、もうひとつの、リアルだ』って、言ってたでしょ？
うん、確かにそうだよな、てあたしも思ってたんだ。」

なんか……、本当に、救われたような気がした」

「……亀田」

なんてね、と陽気な声を出しながら、亀田は振り向いた。

ぺろっと舌を出しながら、えへへ、と笑うその頬は、赤く染まっていた。

「あたしさ、今まで『ここ』を遊んでいる自分は、ただリアルから逃げてただけだと思ってた。

でも、違うんだよね。『ワールド』だって、リアルのひとつだし、ここにいるあたしも、リアルのあたしで。

それに、『ここ』は、リアルから逃げるために存在しているわけじゃ、ないよね」

俺はゆっくり頷いてやった。

横で体操座りをしている藤川も、にこりと微笑みながら大きく頷くのが見えた。

「うん。アサちゃんは、麻子ちゃんだよ」

「って、由梨ったら、何言っちゃってんだか」

亀田と藤川は互いを見ながら、笑いあった。そして藤川は俺を見た。にこりと微笑みながら。

俺は咄嗟に頭を掻き、視線を逸らしながら、遠慮がちに尋ねた。

「そ、それよりさ、藤川。

お前、もう、大丈夫なのか？」

「うん？」

「その……あの、色々と」

曖昧な言葉しか出てこない。

はは、なんて苦笑を洩らしながら、藤川のすぐ右の草むらを見つめた。こんなこと、聞くべきではなかったかもしれない、なんて今更のように思った。

しばらくしてから、穏やかな声が耳に流れてくる。

「……本当はね、ちょっとだけ、今、感覚があることが、恐かったりするんだけど。

でも、大丈夫。心配しないで」

藤川の顔を見た。

可憐な花のように、小さく微笑む藤川。
いつもの、藤川。

その時。

俺の意識全てが、目の前の可憐な花に吸い寄せられた。

可憐だけど小さいが故に、ちよつとでも強い風が吹けば、花卉が飛んでいってしまいそうな儚さが、そこにある。

心臓が小さく跳ね上がる。

藤川が、今度は少しだけ首を傾げながら俺を見ている。

その瞳は本当に、地底深くまで覗けるような澄み切った色だった。

気付けば俺は、片手を差し出しながら、藤川にそつと手を伸ばした。

「あーっ！」

「どわっ」

亀田が突然叫んだ。俺は飛び上がった。

いつの間にか立ち上がっていたそいつは、ぽん、と手を叩きなが

ら上空を見上げていた。

「いっけなーい。そういや今日の夜、ギルドの集会だったっけー。しばらく休んでたから、忘れるとこだったわー」
なんて、少しだけわざとらしい声。俺はこっそり深呼吸。

「……お前なあ。だからって、いきなり叫びだすなよ……マジでびった……」

「ははっ。ごめんってば。」

さあて、あたしはこれでお暇しましよーかねえ」

にや、と笑いかけた後に、亀田はくるりと俺たちに背をむけた。
手を後ろで組みながら、一歩足を踏み出そうとした。

その時、藤川が「麻子ちゃん!」と呼び止めた。

「明日、学校……来る?」

一歩踏み出してから、ぴたりと亀田は止まった。

しばらくそのままの状態で固まった後に、大げさに腕組みをした。

「あのねえ。由梨が入院している間だって、あたし、ちゃんと学校行ってたんだよ?」

……由梨のこときっかけで、あるヤツと、けじめつけようと思つてさ。

まあまだ出来てないんだけど。あたしがすぐ早退しちゃってたから。

だから、明日こそそいつにきちんと伝えようと思うんだ。

明日ならあたし、ちゃんと自信持って、謝れる気がするから」

「――じゃあ、また明日も、学校行くんだね？」

「行くよ」

「ねえ麻子ちゃん。私も、明日から、学校行く。一緒に、行かない？」

亀田はやはり、そのままの姿勢で動かなかった。

何故だか心配になって俺も声を掛けようとしたとき、その浴衣姿が、ぴくり、と動いた。

その小さな肩が、小刻みに揺れていた。

「……馬鹿だね、由梨。」

あんたは無理しちゃ駄目でしょ」

「無理、してないよ。」

本当に、私、大丈夫だから。

駄目、かな……？」

「駄目なわけじゃないじゃん、もちろん良いよ。」

てか、由梨と一緒に付いてってあげないと、むしろこっちが心配になるしね」

「本当？」

「だから、嘘ついてどーすんのよ」

藤川は、「良かったあ」と言って、くすくす笑った。

俺たちに背を向けている亀田からも、くすり、と一つ笑う声が聞こえてきた。同時に、ひっそりと鼻を咬む音。

そして、両手を空に伸ばして、うーんと伸びをした。

「さあて、と。そろそろ、あたし、ギルドんどこ行くわ。」

……お邪魔っばいからね、あたし」

「は？」

また一歩踏み出してから、亀田は言った。

その頭が少しだけ俯く。

両側に括りつけられたツインテールが、寂しげに垂れる。

そして、小さく「ごめん」と謝った。

「あたし、今までさ、ずっと松原君や由梨に、突然突っ掛かっちゃったりしてたよね。ごめん。

でも、もう安心してっ！　もうあたし、無理やり誘うの、やめるから、さ。

ホント……なんか、ごめん」

じゃね、ともう一回告げて、走り去ろうとする亀田の背中。寂しそうだった。そう思ったらいてもたってもいられずに、咄嗟に、「亀田！」と呼びとめた。

ぴたりと止まったその背中に、俺は叫んだ。

「また、一緒にパーティ組もうぜ！」

亀田はようやく、俺たちの方へ振り返った。

その顔は、今にも感情が溢れだしそうなほどに、くちやくちやになっっていた。

振袖でごしごしと顔をこすり、今度は嬉しそうな表情を作って、

「ありがとう」と目を細めた。

軽やかにステップを踏みながら反転し、亀田は迷うことなく、ワンピース装置へ向かって走っていった。

「また明日！」と、隣で藤川が手でメガホンを作りながら叫んだ。

亀田は背を向けて走りながら、手を振って返した。

※

さわさわ、と頭上でまた、葉っぱのカーテンが音を立てた。
横を見れば、藤川が穏やかな表情で亀田が去っていった方向をいつまでも見つめていた。

ふと気付けば、藤川の肩の辺りに、草がついているのが見えた。
俺は少しだけ吹きだしながら、その草を取ってやろうと、指先を触れた時だった。

「やっ」

突然、藤川が後ろへ飛びのいた。俺も同じように飛びのいた。
すぐに藤川は目を伏せて、「ごめん」と謝った。

俺も慌てて、「い、いや、こちらこそ突然ごめん」と頭を下げた。
そこで気付いた。

——そうだ。

藤川はさっきから、「大丈夫だ」って言っていたけれど。

あのショックから、簡単に立ち直れることが、あるわけない。

『ここ』では、ちゃんと感覚があるから。

まだ、人から触れられるその恐怖が、抜け切れていないんだ。

もう一度、俺が謝ろうとして、藤川の顔を覗きこんだ時。

藤川が、固く目を瞑っていて、涙をひっそりと流しているのを、
見てしまった。

両手を胸の前に組みながら、背を丸めて震えている。
たちまち、心がちくりと痛んだ。

罪悪感という名の針が、容赦なく心を突き刺してくる。

「……ごめん、ごめんね、龍介君。」

やっぱり——私、まだ、駄目みたい。

まだ、恐い、みたい。

おかしいな……、私、今はちゃんと、自分がここに居られている
実感があっても、恐くない、て思っていたのに——」

俺は、胸に強く手をあて、目を瞑りながら、思った。

藤川は今、どれほど重い恐怖を背負いながら、ここに居るのだろ
う。

それはきつと、想像も出来ない程の、とてつもない荷物であるは
ずで。

でも、藤川は俺たちのことを心から心配して、こうしてここに居
るわけで。

俺だったら。

俺だったら、同じように、出来ただろうか。

突然心の底から、熱い感情がぐんとせりあがってきた。

それはコップに注がれていく水のように、どんどん俺の体内を
浸透していった。

少しでもその距離を縮め、濡れているつぶらな瞳をそっと覗きこ
みながら。

俺は言った。

「——本当に、ありがとう、藤川。

俺、藤川居なかったら、ずっと、あんな自分引きずったままだっ
たんだと思うから。

ここもリアルの一つだっと思った時、藤川が俺を励ましてくれた
言葉とか、色々思い出して、ああ、それも俺自身のことなんだって
実感出来た時、自信が湧いてきて。

だから、本当に、嬉しかったんだ」

「龍介、君……」

伸ばしそうになる手を必死に抑えつけながら、言葉を紡いでいく。その両目に宿る透き通った真珠に、またまた俺は吸い込まれていくのを感じた。

その間にも、熱い感情は留まることなく、身体を満たす。今すぐにでも、その震える肩に手を添えてやりたかった。今すぐにでも、その小さく縮こまってしまった身体を、ほぐしてやりたかった。

でも、それをしてしまったら、藤川は怯えてしまうから。それが歯痒くて――悔しかった。

すると、藤川はゆっくりとした動作で、俺に左手を差し出してきた。

その手は、大きく震えている。けれど、戸惑いもなく真っ直ぐに伸ばす。

ゆっくりと、ゆっくりと、俺との距離を縮めてくる。俺は動かなかった。

そして、ついに、俺の心臓あたりに、その左手の先が触れた。ほのかな体温と、か細い振動が、一気に伝わってきた。

初めは人差し指のほんの先だけだった。そして後に、中指、薬指、そして全ての指先が、俺の身体に当てられる。

ついには、掌全体が、俺の心臓を包み込むようにぺたりと触れた。手から伝わる藤川の振動と、俺の鼓動がぴたりと合わさった時。

俺は、藤川の小さな身体を、思い切り抱き寄せた。

最初は、びっくりと反応して固まるその身体。

けれど次第に緊張がほぐれ、安心して俺に身を任せてくれるのが分かった。更に力を込める。

確かに今、藤川の体温は、俺の腕の中にある。

龍介君、と呼ぶ穏やかな声が聞こえた。
柔らかくて暖かい吐息が、耳元にかかった。

――私、今、『ここ』で生きてるんだよね？

腕に力を込めた。

俺は、藤川の華奢な肩の上で、頭を横に振った。

――『ここ』だけじゃないだろ？

ぴくり、と肩を動いた。

段々、その動きが細かい動きとなって、やがて大きくなっていく。
もう一度、藤川を強く、俺の中に取り込んだ。

――『ワールド』でも、リアルでも、藤川は生きてるよ。

だから、あんな自分を傷つけること、するなよ。

俺……”感覚”がないっていうの、よく、実感できないけど。
でも、藤川がすごく辛い思いを抱えていたのは、よく分かったから。

俺、何も出来ないし、どうすることもできないけど、でも。
辛くなったら、俺に言えよ。

お前も、もう、一人で抱え込むなよ。

そっと、その体温から、距離を取った。

ほのかにピンク色に染めた顔が、すぐ目の前にある。

綺麗だ、と思った。

それはデータ上のものだったとしても、きめ細かな白い肌や、磨きかかった真珠の瞳や、そこから溢れる一筋の小川のような涙が、熟れた苺のように色を灯す小さな唇が。

全部、本物だった。

藤川は、ただじっと、その澄み切った目で俺を見つめていた。

俺も、ただ吸い込まれるように、その目を見た。

数秒ほど、お互いに視線を交わし、徐々にその距離を縮めていった時に、

俺は、ゆっくりと、その瑞々しい苺に、唇を重ね合わせていた。

※

ピコン。

「わっ!!」

「きゃっ!!」

突然軽快な電子音が響き渡って、俺は慌てて藤川から離れた。

弾みで俺は後ろに転がり、藤川は尻もちをついた。

するとさっきまで、自分がしていたことが頭の中に蘇ってくる。

かああ、と一気に顔が熱くなった。

息苦しさに右手を心臓に当てた。一気に心臓のポンプが加速する。どつくんどつくんと跳ねるように収縮して暴れていた。

しばらくして藤川が、「あ、ギルドの人たちから、メールだ」と

言った。俺は慌てて藤川を見た。

「う、ごう、ごめん、藤川！」

俺、別にそんな、あ、あの、別に、いやらしいことしようとしたつもり、全然、なくて！

き、気付いたらその、なんつか、吸い込まれた、とゆーか、えと、んと、違う、そーじゃない、あ、そうか、って、いやいや！

とにかく、わ、悪かった、俺、突然触ったりとか……」

ああ、本当に、何を言っているんだ俺は！

とにかく、何か言葉を出すのに必死で、あたふたした。

その時。

右手が、そっと包まれるのを感じた。

視線を上げた。

藤川が、頬を桜色に染めて、にっこりとほほ笑んでいた。

「ありがとう」

と、確かにそう囁いた。

それから、藤川は俺の手を取りながら立ち上がった。

きょとんと座りこむ俺に、今度は陽気な笑顔を向けて。

「ねえ龍介君。龍介君も一緒に、私のギルド、入らない？」

「え？」

「ほら、お手紙に書いたじゃん、『世界旅行し隊！』のギルド。

面白い人いっぱいいるんだよ。龍介君入ってくれば、人数増えてもっと盛り上がると思うから！

ねね、そうしよう！」

ほら早く、と急かすように右腕を引っ張られた俺は、ぼうっとした頭で立ち上がった。

藤川は、いつもみたいに可愛らしい花を、その顔に咲かせていた。俺も釣られるように、自然と頬が緩んだ。

そして、藤川と一緒に、ワープ装置へ向かって歩いていった。

「きっと龍介君なら、リーダーさんと仲良くできるよ」

「リーダーさんって……あの、なんか、お茶目だっていう人？」

「うん！　なんかね、龍介君とテレパシーが合いそう」

「なんだよ、そのテレパシーって」

「あ、あとね、他にもテレパシー合いそうな人いっぱいいるから、安心してね！」

「って、それ、安心なのか？」

「そうそう、ロロちゃんのことも、紹介してあげるね！」

あ、そういえば麻子ちゃん、もう行っちゃったんだっけ。

まあいいや、また明日、紹介してあげようっと」

高原に、俺たち二人の笑い声と、葉っぱのカーテンが奏でる優しい音が、いつまでも響いていった。

そう。

ここは、「Real World in Online」だ。

エピローグ（後書き）

完結です。

ここまでご覧下さった方、本当に、どうもありがとうございました
たm（――）m

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7763t/>

Real World～本当の僕ら～

2011年10月7日00時39分発行